東アジアの共生のために
日韓の若者ができること

第9回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語科

2013年度
日韓民族衣装体験（7月26日、お茶の水女子大学）

茶道体験（7月26日、お茶の水女子大学）
グループ別発表会（7月29日、草津セミナーハウス）

草津観光（7月30日）
白根山観光（7月31日）
目次

第9回日韓大学生国際交流セミナー概要 ........................................... 1
森山新（お茶の水女子大学）

講演
今こそ過去を乗り越えグローバル人とならん！ .................................. 5
森山新（お茶の水女子大学）

個人レポート
お茶の水女子大学 ........................................................................ 7
同徳女子大学校 ........................................................................... 57

総評
第9回 日韓セミナーを終えて—もやもや感の先にあるもの .................. 109
松野志歩（お茶の水女子大学 大学院生）
学生間の交流から見える日韓の新たな関係構築の可能性 .................. 111
チョナレ（お茶の水女子大学 大学院生）
日韓—相互理解のための文化意識における基礎知識—文化相対主義の次の段階へ 112
金暎泳（同徳女子大学校）
居場所を共有した中での主体的な対話と協働 .................................. 115
森山新（お茶の水女子大学）

グループ研究レポート
報道グループ .............................................................................. 116
共生グループ .............................................................................. 122
歴史グループ .............................................................................. 128
教育グループ .............................................................................. 134
文化グループ .............................................................................. 140

編集後記 .................................................................................... 145
第9回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山新（お茶の水女子大学）

日時　2013年7月25日～31日
場所　お茶の水女子大学・代々木オリンピック青少年センター・草津セミナーハウス
主催　お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環
同徳女子大学校日本語科

今回が第9回目となる日韓大学生国際交流セミナーは本学学生21名と協定校である同徳女子大学校の学生24名が参加して実施された。グローバルな視点に立ち、日韓両国の学生が言語・文化・歴史の壁を乗り越えつつ、両国の間に横たわる未解決な課題について、挑戦的に討論を行うものである。

今回はまず4月から7月まで、「多文化交流実習Ⅰ」（月9-10時間目）としてTV会議システムを用いて事前の遠隔交流授業が行われ、その後7月25日から31日まで「多文化交流実習Ⅱ」である第9回日韓大学生国際交流セミナーが実施された。また、今回は、参加した同徳女子大学校の学生たちにも「多文化交流実習Ⅱ」の単位（2単位）が与えられた。

1. 日程表

<table>
<thead>
<tr>
<th>7月25日（木）</th>
<th>代々木オリンピック青少年センター・同泊</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>15:55-17:00</td>
<td>同徳メンバー成田国際空港着、成田発</td>
</tr>
<tr>
<td>17:00-18:30</td>
<td>本学メンバー、代々木オリンピック青少年センター着、チェックイン</td>
</tr>
<tr>
<td>18:30-19:00</td>
<td>同徳メンバー、代々木オリンピック青少年センター着、チェックイン</td>
</tr>
<tr>
<td>19:00-20:00</td>
<td>グループ別に夕食</td>
</tr>
<tr>
<td>20:00-22:00</td>
<td>歓迎会（セミナー棟513号室）、【担当：報道グループ】</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>7月26日（金）</th>
<th>本学人間文化棟大会議室、代々木オリンピック青少年センター泊</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10:00-12:00</td>
<td>開講式【担当：文化グループ】</td>
</tr>
<tr>
<td>10:05-10:15</td>
<td>挨拶 三浦徹（本学教員）</td>
</tr>
<tr>
<td>10:15-12:00</td>
<td>講演1「日韓―相互理解のための文化意識における基礎知識」金囲泳</td>
</tr>
<tr>
<td>13:00-14:30</td>
<td>日韓伝統衣装体験（担当：教育グループ）</td>
</tr>
<tr>
<td>14:30-17:00</td>
<td>和菓子作り、茶道体験【担当：教育グループ】</td>
</tr>
<tr>
<td>20:00-22:00</td>
<td>打ち合わせ（代々木オリンピックセンター・セミナー棟513号室）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

-1-
7月27日(土) 東京近郊・代々木オリンピック青少年センター泊
9:00-21:00 テーマ別グループ実習
21:00-22:00 ミーティング

7月28日(日) 草津セミナーハウス・同泊
8:20-8:50 代々木オリンピック青少年センター・チェックアウト
8:50-12:30 代々木を出発、草津セミナーハウスへ
12:30-17:30 自由時間
18:30-21:30 グループ別発表準備

7月29日(月) 草津セミナーハウス・同泊
9:00-12:00 グループ別発表準備
14:00-20:00 グループ発表会【担当：文化グループ】

7月30日(火) 草津セミナーハウス・同泊
9:30-17:30 草津探索【担当：歴史グループ】
18:30-21:00 送別会【担当：共生グループ】

7月31日(水) 白根山
8:40-9:00 チェックアウト、白根山へ
10:00-12:00 白根山にて散策
12:00-16:30 白根山発、代々木へ
16:30 解散

8月1〜2日 同徳女子大学校企画
8月3日
9:00 同徳女子大学校メンバーを見送り【担当：共生グループ】

2. 参加者
2.1 本学学生（21名）

<table>
<thead>
<tr>
<th>グループ</th>
<th>学籍番号</th>
<th>氏名</th>
<th>所属</th>
<th>学年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>報道</td>
<td>1310279</td>
<td>安井 祐菜</td>
<td>言語文化学科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1310261</td>
<td>永野 友梨</td>
<td>言語文化学科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1210255</td>
<td>徳嶽 沙紀</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1210105</td>
<td>伊藤 ほのか</td>
<td>人文科学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>共生</td>
<td>1310284</td>
<td>横川 和花</td>
<td>言語文化学科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1210202</td>
<td>新井 佑理</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1210206</td>
<td>井上 佳苗</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1010240</td>
<td>ストルスマン・リリアン・シュウ</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>4年</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 歴史
<table>
<thead>
<tr>
<th>学号</th>
<th>名称</th>
<th>学科</th>
<th>年級</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1310234</td>
<td>佐藤 文香</td>
<td>言語文化学科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210414</td>
<td>加藤 鈴妃</td>
<td>人間社会学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1110415</td>
<td>笠 智通</td>
<td>人間社会学科（グローバル文化学環）</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210419</td>
<td>小山 奈月</td>
<td>人間社会学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 教育
<table>
<thead>
<tr>
<th>学号</th>
<th>名称</th>
<th>学科</th>
<th>年級</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1210141</td>
<td>梨木 夏葉子</td>
<td>人文科学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210216</td>
<td>桃平 恵理</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210410</td>
<td>牛留 早亜彩</td>
<td>人間社会学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1010114</td>
<td>片山 華花</td>
<td>人文科学科（グローバル文化学環）</td>
<td>4年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210152</td>
<td>南 奈那</td>
<td>人文科学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 文化
<table>
<thead>
<tr>
<th>学号</th>
<th>名称</th>
<th>学科</th>
<th>年級</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1210280</td>
<td>山本 梨紗</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1110207</td>
<td>池田 亜柊</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210238</td>
<td>酒井 佑果</td>
<td>言語文化学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td>1210156</td>
<td>吉村 茜</td>
<td>人文科学科（グローバル文化学環）</td>
<td>2年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 2.2 同徳女子大学校学生（24名）

<table>
<thead>
<tr>
<th>グループ</th>
<th>名称</th>
<th>学科</th>
<th>年級</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>報道</td>
<td>김영주（金榮珠, Kim Young Ju）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>서다인（徐多寅, Seo Da In）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>백경옥（白京沃, Paik Kyung Ok）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>임효정（任孝靜, Lim Hyo Jeong）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>서현주（徐賢珠, Suh Hyun Joo）</td>
<td>日本語科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td>共生</td>
<td>정지은（鄭至恩, Jung Ji Eun）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>남윤영（南潤映, Nam Yoon Young）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>조계현（趙桂賢, Cho Gye Hyun）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>박수정（白守丁, Baek Soo Jeong）</td>
<td>日本語科</td>
<td>4年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>김보은（金報恩, Kim Bo Eun）</td>
<td>保健管理学科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史</td>
<td>정근희（鄭根姫, Jeong Guen Hee）</td>
<td>日本語科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>김정민（金桂民, Kim Jeong Min）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>상유진（張有鎭, Jang Yu Jin）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>강지원（姜智媛, Kang Ji Won）</td>
<td>国際経営学科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>권영아（權英芽, Kwon Young Ah）</td>
<td>日本語科</td>
<td>1年</td>
</tr>
<tr>
<td>教育</td>
<td>최윤정（崔允禎, Choi Yoon Joung）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>김희준（金希俊, Kim Hee Jun）</td>
<td>日本語科</td>
<td>3年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>류미리（柳美莉, Ryu Mi Ri）</td>
<td>日本語科</td>
<td>2年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>강은솜（姜은솜, Kang Eun Som）</td>
<td>日本語科</td>
<td>4年</td>
</tr>
</tbody>
</table>
2.3 スタッフ

<table>
<thead>
<tr>
<th>氏名</th>
<th>所属・職位</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>森山 新</td>
<td>お茶の水女子大学大学院・教授</td>
</tr>
<tr>
<td>金泳 (Kim Yu Young)</td>
<td>同徳女子大学校・助教授</td>
</tr>
<tr>
<td>チョ ナレ</td>
<td>お茶の水女子大学大学院生（TA）</td>
</tr>
<tr>
<td>松野 志歩</td>
<td>お茶の水女子大学大学院生</td>
</tr>
</tbody>
</table>
【講演】

今こそ過去を乗り越えグローバル人となれん！

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、9回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こされるのは、かつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は10数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910年に日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくも時代を経て、1945年に韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンポクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965年に日韓国交正常化が実現しても両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられる。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分がある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化や東日本大震災復興への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れないている。言うならば、まだ心のグローバル化が進めていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

では心のグローバル化はどうしたらできるのだろうか。ここでは、ヨーロッパ共同体が模索してきた「複言語・複文化主義」そして塩原良和が提唱する「居場所を共有し対話と協働」という考え方を紹介したい。

ヨーロッパは二度の世界大戦を引き起こした苦い経験から、二度とこのような悲劇を繰り返すまいと、1949年「欧州協議会」を設立し、ヨーロッパに国を越えた地域共同体を創成したが、その際にそれまでの「国」を単位としたナショナル・アイデンティティではなく、ヨーロッパ人という文化的アイデンティティを確立するための理念として構築された。
のが「複言語・複文化主義」である。これはヨーロッパの人たちが母語・母文化だけではなく、複数の言語・文化を学ぶことで、個の中に「国」を越えた「ヨーロッパ人」というアイデンティティを築こうとするものである。

では複数の言語・文化を学べば、国を越えた「ヨーロッパ人」になれるのであろうか。そんな簡単なものでないことはだれもがわかる。そこでその限界を超えるヒントを与えてくれるのが、オーストラリアの多言語主義の限界を超えるべく塩原が提示する「居場所を共有し、日常的な対話と協働を」という考え方である。

オーストラリアは、前世紀の半ば、それまでの白人中心主義である「白豪主義」を捨て、多文化主義へと大きく舵を切った。その結果、Ghassan Hage が言う、Good White Nationalistsが誕生した。しかしながら、彼らもまた「白人優越の幻想」から脱却することはできなかった。塩原はこの「優越性の幻想」を越えるには、「居場所を共有する中で対話と協働を継続すること」を主張している。

我々のこの日韓セミナーのめざすものと同じで、「複言語・複文化主義」と「居場所の共有した対話と協働の継続」である。日韓の学生が互いの言語と文化を学びあうところからはじめ、セミナーの期間、居場所を可能な限りともにしながら友情を深め、その友情の基盤の上に対話と協働を継続していく。そのような中で、我々のアイデンティティは国を超え、東アジア人としてのアイデンティティが育まれるというのである。

「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、東アジア、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えられるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。

今回のセミナーはこれまでの国の視点を越え、東アジア人、グローバル人となるものである。このセミナーが、国連決議より、日韓首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。
発表そして交流、2つの学び

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
　私たちが、日本と韓国の報道の違いをテーマにし、二つの国の代表的な放送局について、そして、ひとつの事件に対する報道の仕方・内容について事前に調べました。また実際のグループ活動では、韓国の人々が抱く印象を知るためにNHKに足を運び、韓国での報道が彼女たちにどのような影響を与えているかを知るために靖国神社を訪れ、訪問前と訪問後の心境、印象の違いを彼女たちに聞き、日本人が抱いた印象も彼女たちに伝え、話し合いを重ねてきました。それらをパワーポイントにまとめ発表をしました。

1.2 私の学び
　その活動の中で自分にとって最も学びが多かったことは、ひとつのテーマに対して二つの事項を比較するとき、多くのことに配慮し、誰かが意見を言う視点から比較を行う必要があるということです。私たちは日本と韓国の代表的な放送局を比較する際、日本はNHK、韓国はKBSを例に用いました。私たちは、視覚的放送というテレビを、私たちのテーマである“報道”を行なうためのツールの一つとしてピックアップし、それらの国々の代表的な放送局とはどのようなものなのか、好きはあるのかを知ってもらおうという思いで紹介したのです。しかし、視聴者からすると、私たちの発表の仕方ではまるで「日韓の報道の違い＝テレビ局の違い＝NHKとKBSの違い」であると言ってよいように聞こえたようです。報道の方法はもちろんテレビだけでなく新聞、雑誌、インターネット等様々なメディアもあるにもかかわらず、それにきちんと言及せずにテレビだけが報道のすべてであると誤解を生むような発表の仕方、スライドの内容であったことを反省しました。また、対角線の報道の例として、報道の分かりやすさ、事実と意見の割合、繰り返しの程度、の違いを具体的な事件を用いて調べるための例として、私たちは橋下徹の発言を用いました。しかし、橋下徹の発言はこの場合あまり適切な例ではなかったと考えられます。そのため、理由は、日本国内の国によるものであり、これに対して政治の分野や世界のニュースと話題になります。特に、韓国はそれほど国際的なニュースではあります。その違いがあるとすれば元々自身として公論の人として報道をするべきであると感じました。例えば、他の国の政治家の発言をなど二つの国から平等な立場で評価することができる事件を取り上げるか、もしくは、日本の政治家の発言に対する韓国の報道と韓国の政治家の日本の報道を比べるなどの工夫が必要であったと思っています。どんな話題に対しても、常に自分が先入観にとらわれず平等で、客観的な立場に立てているかどうかをまず検証することが非常に大事であり必要であることを身をもって学びました。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
　このセミナーを通じて私が感じたのは、日本人の場合「きっと向こうも察してくれるだろう」とか、「これを向こうに向かって言うのはなんか恥ずかしい」などと思ってしまい言葉にしないようなことを、韓国の子たちは素直に言葉にして伝えてくれたということです。
2.2 私の学び

それを一番初めに実感したのは、発表の準備を始めるときに韓国の子たちが、「私たちはこの発表が成績に関係しないけれども、日本のみんなは成績に関係するから、私たちのせいで日本のみんなに迷惑になってしまうのがすごく心配です。どうにかして良い発表を作ることができるよう私たちも全力で協力します。」という言葉をかけてくれたときでした。このような素直な思いを伝えられたのはなんだか久しぶりで、あまり慣れていなかったため自分も少し恥ずかしくなってしまったけれども、韓国の子たちが考えていたことを知ることができて安心しました。もしその言葉がなかったら、準備の間、「韓国の子たちがもし発表について面倒くさいとか思ってたらどうしよう」などと不安になって、仕事を任せるのを躊躇してしまったり、本音の話し合いはできなかったかもしれません。素直に思っていることを伝えることは、少し恥ずかしいかもしれないけど、表面上だけの付き合いではなく心を通じ合い本音で話し合える関係になるために必要なことであり、韓国人にとってはそれが普通のことで、習慣であることが、彼女らが「情に熱い」と言われる理由なのかと考えました。また反対に、日本人にはあまり習慣していておらず足りないと考えます。だから、ただ「そういう違いがあるのだな」と実感して終わるのではなく、心の中で思っていることを察してもらおうとせず実際に言葉にして伝えて彼女たちの思いに応えなければならないと思い、今までなら口にしないようなことも伝えるようになりました。同じグループの先輩が、韓国の人たちに対して、「私たちの日本語が聞き取れなかったときは何度も聞き返してもいいし、スピードを下げるも一度話すときにもしかして怒っているように聞こえてしまうこともあるかもしれないけれどそれはもちろん怒っているわけではなくて、日本語がわからないまま議論を進めててしまうと意见を言えなくなってしまうから、いつも気を使わずに聞いてね。」と韓国の人たちに言っていたのを聞いて、この言葉で韓国の子はすごく安心しただろうし、異なる国の学生が共に協力してひとつの発表を作り上げるのにおいて欠かせない配慮だと思いました。日本人同士でさえ、お互いの誤解や思いのすれ違いは起こってしまうのに、異なる国の人と交流するときはなおさらです。異文化の人と交流するときに一番重要なことを韓国の子、そして先輩から学び取ることができました。
交流から読み取れる日韓の共通点と相違点

永野友梨

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
今回の実習において、私は報道グループで活動した。報道グループは日韓の報道の差を比較することで、考え方の違いやこれから両国に求められる報道とは何かについて考えた。まず、テレビ、新聞などのメディアを取り上げ、その歴史的背景や思想をふまえたうえで、橋下現大阪市長の慰安婦問題に対する発言における日韓の捉え方の違いを明確にした。その上で、日韓の歴史問題の象徴として頻繁にメディアで取り上げられる靖国神社を訪問し、その感想をもとに日韓両学生全体でディスカッションを行い、これからの両国の報道のあり方を探った。その中でも、特にディスカッションでは、それまではっきりとわからなかった日韓の靖国神社に対する考え方の差、歴史の受け取り方の差を強く感じた。また、一週間のグループでの共同生活においては、日韓両国の流行や遊び、ファッション、食文化などについて話し、非常に貴重な体験をしたように思う。

1.2 私の学び
報道における日本と韓国の違いは、その意見をふまえた報道を行うかどうかであった。日本の場合は報道自体に意見は含まれておらず、事実のみを伝え、韓国は日本に対して否定的な内容の報道をしていることが分かった。しかし、日本はテレビであったりキャスターが、新聞であったり社説や市民の意見などのコーナーで盛んにその会社の意見を示しているため、実際の違いはあまりないように思わせた。これらを調べるなかで私が特に考えたのは、日本人としての一方的な感覚で調査結果を受取らないようにする必要がある。報道の違いはあっても、その国によって事実の捉え方は異なるため一概にどちらかの国の報道を否定することは誤りであろう。しかし、そのことを意識して調査・まとめを行っても、最後の発表の際には韓国側に対して否定的な内容になっているという指摘を同僚の学生から受けたのは、とても重要な反省点であり、最大の学びだったように思う。私は、自分自身が韓国という国には悪いイメージはあまり持っていないと考えていたため、偏見を持っていて、改めて外の世界の文化を理解する姿勢が欠けていることに気づかれた。これから先、韓国だけでなく様々な国の人や文化と接する機会があると思う。その中で、日本人としての凝り固まった視点からそれを見ることのないように、相手を理解する姿勢を持つように心がけることが必要だと分かった。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
今回、私が特に感じた日韓の文化の違いの一つとして人と人との距離感、関係が挙げられる。最初に驚いたのは先輩に対する呼び方である。日本の場合、年上の先輩を呼ぶときには、〇〇先輩、もしくは大学生などの場合は、〇〇さんということが多いある。しかし、韓国では、親しい先輩に対しては、お兄さん、お姉さんという意味である오빠（オッパ）・언니（オンニ）という呼び方を用いる。今回のセミナーの参加者は全員が女子なので오빠（オッパ）という単語をきくことはなかったが、ほとんどの学生が先輩のことを언니（オンニ）と呼んでおり、日本人学生同士の関係より近い関係のように感じた。
また、ものの貸し借りなどにおいても、日本人同士では抵抗がある携帯電話などでも普通に貸し借りしており、文化的な対人関係に対する考え方の違いがあると思った。ただ、事前学習であったように、ペットボトルやストローなどの共同利用に関しては、個人差はあったが抵抗を見せる人もおり、同じものに口をつけないことに関して、同性間ではあまり抵抗感を持つ人の少ない日本人と比べると、若干の違いが見受けられた。

2.2 私の学び
日韓の人と人との距離感、関係については、日本より韓国のほうが近く、親近感があり、日本人として多少の違和感があった。これは、個人的にうらやましいこととも感じられた。日本文化における人間関係の捉え方や考え方の表現として、「ウチとソト」という言葉がある。日本人にとって、自分の周りにある身近な人とその他はまったく異なるものであり、仲のいい友達と言ってもある程度の感覚的壁は存在している。この「ウチとソト」と同じような概念が韓国にもあるといわれるが、日本ののように自他を隔絶するものではない。他人との距離が近いかいいというわけではないが、韓国人のもつ人懐っこさや情の文化は、日本人が随分前に失くしたものだと思う。日韓の人と人との関係の違いは、これからの日韓の問題を考える上でも大切なものになるだろう。今回の交流を通じて、韓国における、近い、対人関係を実際に見て感じたことは、日韓の文化的違いを理解していくなかで最も大きな学びであったと思う。
日韓セミナーで学んだこと

徳嶽沙紀

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
実習で靖国神社に行き、またその前後のディスカッションをしたこと、またその中で考えたこと、自分自身が靖国神社に行って感じたことが今回のグループ活動の中で一番の学びであったと思う。

1.2 私の学び
今回、日韓問題の報道をするにあたり、どんな点に注意をし、またどのような報道をすることが正しいのかということを考える一例として、靖国神社をあげ、訪問し、ディスカッションをした。

私は、靖国神社にはお祭りとお花見で行ったことがあったが、今回、韓国的学生と訪問した際には、とても違った雰囲気を感じた。まずははじめの鳥居で感じたことは、イベント時に参道の左右に連なっていた鳥居がなく、本当に広いなということと、普段はそこまで人が多くなく静かな神社なのだということである。訪問前の印象として、韓国の学生が行くのが少し怖い、と言っていたことも印象的であった。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もう少しの怖さと不安を感じていた。なぜなら靖国神社いう
2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
「大丈夫、なんとかなる。」遅刻しそうなとき、スケジュールについて話をしたとき、なかなかすすまない発表準備中、そして発表直前、何度も何度も耳にしたこの言葉から、日本人とは異なる考え方を感じた。

2.2 私の学び
今回の合宿において、違和感を感じたり違いを感じたりした経験はあまり多くなかったが、韓国の学生が細かいスケジュールはおろか、大まかなスケジュールと宿泊先についてもほとんど知らずに日本に来ていたということには、ほんとうに驚いた。日本の学生は、自国開催されるものであるが、今回のセミナーについてのスケジュールを授業内で何度も確認していたし、質問したり、各自でメモをしたりして、配布された日程表を持ち歩き、またはある程度日程を記憶して活動を行っていた。しかし、韓国の学生は、ほとんどスケジュールを知らず、また、私のグループでは日程表は誰も持っていなかった。日本の学生が同様の海外研修を行うとしたら、ほんのスケジュールがわからないままに出国することはないように思う。大まかにでもスケジュールを覚えたり、メモしたりするだろうし、もし、知られていなければ先生等に質問して教えてもらうようにするだろう。

海外に行くのにスケジュールが不安に感じなかったのかと疑問に思い、質問すると、韓国の学生が「何とかなると思って来た。」「行ったら大丈夫だと思って。」と笑顔で答えていたのを見て、なんて楽観的なのだろうと、驚き、その後のことがすこし不安に思った。これは、初日に行ってかったことであった。

セミナーの前半においては、この「なんとかなる。」「大丈夫。」という考え方の楽観的な考え方が信じられずいたが、しかし、後半の発表準備では、この考え方にとても救われた。私たちのグループは他のグループに比べると事前調査があまりできていなかった。また、報道というテーマのため、テレビ局や新聞社などへ調査を希望していたが、実際に調査にいくことはできず、かなり準備が難航していた。なかなか進まない準備と、せまってくる発表本番にいらだちを感じ、切羽詰まっていたとき、韓国の学生がまた、「大丈夫だよ、なんとかなるよ。がんばろう。」と笑顔でいいながら作業していて、またそのような声をかけてもらったとき、本当に救われた気持ちだった。韓国の学生達の楽観的すぎるようにと感じられた考え方であったが、困難なことに出会ったり、不安に思ったりしたとき、この考え方はとても心強かった。おそらく、この考え方は韓国人の「ケンチャンナヨ精神」とよばれるものであると思う。私はいままでこの言葉をあまり肯定的な意味で耳にしたことはなかったが、これは、韓国人の心の広さと他人のことを許す、素敵な考え方だなと実感した。

異なる文化の人と交わるとき、このような疑問を感じるような考え方や言動に出合うことは多いだろう。しかし、場面によっては、逆にそのような差に、救われたり、それから学んだりすることもあるのだ、ということを学べたように思う。
「日本」「韓国」の文化とは

伊藤ほのか

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

事前調査に関して。ＴＶ局において、資金調達の方法など経営形態の違いが報道の方法に大きく影響を与えると考えた。日韓でなじみがある代表的な放送局であるＮＨＫとＢＢＳの経営形態を各々調査した。さらに、橋下徹氏の通称「慰安婦発言」に関する一連の報道の仕様について調査。対象機関は、新聞社部門からは読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、ハンギョレ、朝鮮日報。ＴＶ局部門からはＫＢＳを取り扱った。調査内容に関して、慰安婦発言に関する報道の繰り返しの頻度、ニュースのなかで使用される言葉の選択、ニュースに添えられるコメントを分析した。同徳女子大学に以前ＴＶ局に勤務していた教授がいらっしゃるとのことで、韓国側に限りインタビューを実施。韓国における慰安婦発言に関する報道について専門家の見解を入手した。

実習に関して。互いに事前調査の結果を報告、比較。比較の結果を踏まえ、日韓不仲の象徴である靖国神社を訪問した。当初韓国メンバーが靖国神社に対し抱いていた印象と、訪問した後の感想を比較。新聞社やＴＶ局はどのような言葉、そして映像を用い、靖国神社を報道しているのか、また実際はどのような場所だったかについて意見交換。その結果からよりよい報道の在り方を議論し具体的な報道コンテンツを考案した。

1.2 私の学び

報道について調査、発表した際の学びを、①日本の報道について②報道が与える日韓関係についての2点から報告する。初めに①日本の報道について。事前調査や実習を通して、思想と報道機関の繋がりが思った以上に深いという印象を受けた。普段の事件について複数の紙面の内容を比較する機会がないので気が付かなかったが、事件を一面に大きく報知する新聞がある一方で、四面の片隅に小さく掲載する新聞もある。どちらも日本の新聞であるのに、まるで別の国の報道のようだ。調査の結果から、新聞を読む国民は、印象形成を余儀なくされており、国民に事実を届けるという視点では非常に危険なものであるという感想を持った。しかしながら、思想と紙面の結びつきを解消することは困難である。

さらに、事件や出来事をありのままに伝えようと努めても、どうしても一部の切り取りになることは避けられない。ここで問われるのが、国民のリテラシーである。購読している新聞が全ての世界ではなく、一つの見方に過ぎないことを理解しなければならない。紙面を読み比べたり、クリティカルに考察したりすることで、自分の意見を構築すべきである。さらに、インターネットが普及しＳＮＳを利用し誰でも簡単に情報を送受信できる現代。摂取する情報の取捨選択はもちろん、自分が誤った情報を拡散する立場になり得ることも頭に入れないなければならない。そこで浮上するのが、個人のリテラシー向上のためには一体どうしたらいいかという問題である。私は教養を高めることだと考察する。小学校から高校まで、何のために勉強するのかと一度は疑問に思う学問や芸術、例えば数学やアジア史などを学ぶ理由の一つは、教養を磨き、個人のリテラシー向上させることがあると思う。日本でも韓国でも同じことが言える。個人のリテラシーが向上し、報道を聴取に自己の意見を構築することができる国民が増えた場合、それは良好な日韓関係に大きく貢献すると思う。
次に日韓関係に対する報道の影響に関して述べる。先に「新聞社ごとの思想の偏りを正すより国民のリテラシーを高めるほうが優先」と書いたが、今回の実習では「よりよい報道の探求」をテーマに討論したので、報道の在り方に関して述べる。最初に、私よりもよい報道の定義は「煽動家にならないこと」である。裏がとれているなど、質の高いニュースは国民の関心を引き付けても暴動を焚きつけることはしない。事前調査や討論を通して、日韓ともに現在のニュース報道は中立を保っていないうえにコンテンツ性に乏しいのではないかという結論に至った。日韓の関係をニュースにするとき、報道内容が世論に傾いたり自国目線の報道になったりすることは避けがたいが、グローバル世界において世論もグローバル化しつつあるなかで、報道だけがドメスティックであることはよくない。一体どのような報道なら、国民を煽動することなく日韓のしこりに切り込むことができるだろうか。根拠をもとにした史実や日韓の大学生の討論、専門家の見解など、よりよい関係を築けそうな、それでいて関係悪化の本質を突いていない友好、例えば日本ではK－POPが流行しているといったようなものではないかと挙げられた。報道の本質は社会の出来事を広く知らせることである。さらに掘り下げると、日韓関係の円滑化において報道は、個人が意見を構築するきっかけになるべきだと思う。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
食事作法や身だしなみなど、風習に因るところが大きい違いはもちろん見受けられた。しかし、日本は協調性を最優先するとか、韓国はもてなし方が厚いといった、事前に何度も聞きていた違いを経験することはなかった。言語行動や考え方に関してはむしろ、日本の方のメンバーとの差異のほうが目についたように思う。グループワークにおいて、ある日本人メンバーはグループの調和を重視して円満な雰囲気でワークを進めるが、別のメンバーは合理性と即時性に重きを置いていた。この場合どちらのメンバーが正しいのか分からないし、おそらく正解はないであろうが、日本人の間でもこれだけ違うという事実は実感できた。

2.2 私の学び
韓国メンバーとの違いというよりもむしろ日本メンバーとの違いのほうが目についた点に関して、いくつか理由が挙げられる。韓国メンバーとの差異は生じて当然という意識があり気にとめていないにもかかわらず、韓国メンバーは母国語を使用しない習慣が根強く、環境で討論したり生活をしたりしたため、短期間の実習をなごやかに過ごせた。これらの理由は考えられるが、しかしながら私は今回の実習を通し、文化を国ごとに区切ることは無意味なのではないかと感じた。伝統、習俗が重んじられてきた過去ではあるが、その文化は地域的なものである。グローバル化の進行が著しく、ただでさえ「あなたは何人ですか？」との問いに答えるのが難しい現代において、韓国文化、日本の文化という言い回しはナンセンスだ。そこで、「日本にいる者同士が分かりあえないから韓国に住む人とも分かりあえない」ではない、「日本にいる者同士が分かりあえないが韓国に住む人とは分かりあえるかもしれない」というロジックを強調したい。国が違うから差異が生まれるのではない。人が違うから差異が生まれるのである。実際に対することは、対面する二人から国という縄文を解き人という段階で立ち入る重要な機会だと思う。しかしながら、それには言語や距離など困難はつきものである。その困難をどう解決していくかが、日韓友好の鍵の一つなんではないかと思う。
幸せに共生するには

横川和花

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私は5つあるグループのうち「共生」グループにいた。私はその活動の中でも、アンケートと、インタビューを行ったことが印象に残っている。アンケートは10代、20代の若者に行った。韓国の場合は日本について、日本の場合は韓国についてどれくらい知っているか、どのように相手国のことを考えているかについて聞いた。日本側が先にアンケートを作り、それを韓国側に韓国語に訳してもらい、両国で同じ内容のアンケートを実施した。韓国側は目標だった回答者100人を超え、107人の方から回答を得た。日本側は100人には届かなかったが、100人近くの92人の方に回答していただいた。アンケート以外にも、私たちのグループはインタビューを行った。韓国の生徒は日本に来る前に「日本文化院」へインタビューを行った。日本文化院とは1971年のオープン後、40年以上にわたり韓国で日本文化や日本の最新情報を発信し続けてきた日本国大使館の一部である。そこで日本国大使館の外交官の方にインタビューをした。日本文化院では日本を紹介するために日本人形の展示や日韓交流おまつりを行っている。日本側のインタビューは実習中に行った。日本の生徒と韓国の生徒で一緒に在日コリアン青年連合代表のリャンヨンソンさんに話し合うが、インタビューの中でリャンさんは今までの生活とそのとき思ったことや、韓国と日本の関係を話してくださった。彼は小中高の12年間朝鮮学校に通っていて、大学生になり初めて日本人と一緒に学校に通うようになった。

1.2 私の学び
今回のアンケートでインタビューでわかったことは「個人が大切だ」ということだ。リャンさんへのインタビューをまとめて行く中で、「個人」という存在が大きいと気づいた。在日コリアンの方は日本人口の100人に1人であり、マイノリティーである。しかし、在日コリアンの中でも朝鮮学校に通う人や通わない人、両親のバックグラウンドの違い、韓国語が話せる人や話せない人など、多様性がある。しかし、日本の中では在日コリアンをひっくりに考えることが多い。在日コリアンとしてまとめるのではなく、個人を見ていくことが大切なのではないか。個人として付き合うことにより、それぞれの人は違う考えを持っていると気づく。そうすることにより、在日コリアンに対するステレオタイプはなくなると思う。また、日本は多民族国家という意識がわかってきていると考えられる。そのためヘイトスピーチが行われてしまうとリャンさんから聞いた。日本の国内法では差別禁止法が制定されていないために、ヘイトスピーチは事実上許されてしまう。この国内法も多民族国家という意識が薄いために私たちは不自然な感じないのではないかと思った。私は日本が単一民族国家だとは思わない。なぜかといえば、日本は多くの面で外国の人にお支えをもらっているからだ。例えば、A L Tだ。日本では英語を学ぼうとしている人が増えていている。このとき英語が母国の人には頼ることが多い。また、今は看護師不足が問題となっていて、インドネシアやマレーシアから来る人に頼っている。日本人は自分がやりたくない、できない仕事を外国人に任せることがある。それには外国人に日本で暮らしてもらうことになる。そうなると日本は単一民族国家だとは考えられないのではないか。私たちが日本人以外を他者として排除している。これを解決するにはメディアからの情報
をうのみするのではなく、自分の力で判断することが必要になる。これには個人の正しい認識が大切だ。このようにリャンさんの話しをまとめて行くと「個人」というもののがとても大切な働きをしていると思った。アンケートではこのことをサポートするような結果が出た。「友人関係と相手国に対する印象の相関関係」では、相手国に親しい友人がいると答えた人ほど相手国に良い印象を持っているということがわかった。特に韓国ではこの結果は顕著に表れた。韓国では親しい友人がいるのないのでは日本に対する良い印象の割合は30%も違った。日本はそれに対して大きな差はなかったが、親しい友人がいる方が韓国に対して良い印象を持っている割合が少しだけ高かった。インタビューとアンケートから、うまく共生していくには個人の考え、他の人を個人として認識する、など「個人」が大切だと学べる。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日韓の違いで最も感じたことは、韓国の人は日本と比べると人と人との距離が近いということだ。はじめはどうすれば良いのかわからないが、事前学習で韓国では人と人の距離が近いと言われていたので、こういうことかと思い、すぐに慣れてしまった。小さな饅頭を5人くらいで分けていたときはとても驚いたが、同時に「いいな」とも思った。他にもジュースやアイスクリームも分けた。食べ物や飲み物を買っても自分が食べる前にみんなに分けていた。食べ物や飲み物を分けた方が、会話が弾み、楽しかった。みんなで色々な味の食べ物を食べ比べたときはどっちがおいしいかで話し合ったり笑ったりしたのを覚えてる。食べ物をシェアすること以外にも、写真をとるとき肩に手を回し、久しぶりに会えばハグをした。腕を組んで歩くことも良くした。食べ物や飲み物を分けた方が、会話が弾み、楽しかった。みんなで色々な味の食べ物を食べ比べたときはどっちがおいしいかで話し合ったり笑ったりしたのを覚えてる。食べ物をシェアすること以外にも、写真をとるとき肩に手を回し、久しぶりに会えばハグをした。腕を組んで歩くことも良くした。食べ物や飲み物を分けた方が、会話が弾み、楽しかった。みんなで色々な味の食べ物を食べ比べたときはどっちがおいしいかで話し合ったり笑ったりしたのを覚えてる。写真を撮るときに肩に手をまわすようにになった。私は写真を撮るときに肩に手をまわすようにになった。私は会って二日目だったのではじめは驚いた。私はいつもと違って二日目では話すことをまず緊張してしまう。しかし、私は韓国の人と仲良くしてもらったような気がしてうれしくなった。その日の夜はみんなで冗談を言っていった。私は自分のグループは先輩と後輩という考え方があるかも気になった。韓国には先輩と後輩という考え方はあると言っていたが、私のグループはみんな同じ学年のように仲良好かった。お互い冗談をいっぺいしていた。私はグループで話し合うとき、先輩と後輩の仲が良い方が良い話し合いができると思った。また、私のグループ内では先輩と後輩だけではなく、日本人と韓国人どうしだ仲良くなれたので、話し合いをするとき考えていることが言えやすかった。私がグループでは「どう共生するか」という答えを見つけるのが大変そうなテーマだった。しかし私は今回の実習を通して共生するには相手を知ることが大切であり、相手を知るためには仲良くなるのが一番だと思う。私が韓国の生徒が仲良くなったのは、韓国人の人との
接し方によってではないかと思う。日本でもシェアやスキンシップをもっととるようにすれば私たちのグループである共生は実現されるのではないかと思う。もっとオープンになることを学んだ。

参考文献
在大韓民国日本国大使館公報文化院
共通性の中にある異文化

新井佑理

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私にとって特に学びが多かった活動は、草津で行った発表会準備です。まず、日韓両国で行ったアンケートを分析し、日本人と韓国人それぞれの相手国に対する感情とその背景、友人関係やメディアが日韓関係に与える影響についてまとめました。次に、韓国側が行った日本文化院での聞き取りの中から、主に日本への関心を高める活動について共有しました。東京で行った在日コリアン青年連合の代表の方へのインタビューについては、お話を基に在日コリアンの方々が抱える問題をまとめた上で、国籍とは何か、国籍を越えた人間関係を構築するには、など深く考える時間を持ちました。
その後、事前学習とセミナー中の学びから、日韓のより良い共生を実現するために何か重要なのか考察し、結論を導きました。

1.2 私の学び
「共生」というテーマには答えがあく、簡潔に解決策をまとめるような問題ではありません。そのため私たちは発表直前まで準備に追われました。そうした中で私が良かったと思う点は、メンバーの皆が、きれいな言葉を並べるだけの発表よりも、自分たち自身で考え抜くことを優先した点です。最後までまとめには苦労しましたが、共通について考えていく過程が自らを高めてくれたと考えています。準備の始めの段階では日本側と韓国側に距離があり、発表に対する温度差を感じていましたが、困難な状況の中で、次第に一人一人ができることを精一杯やろうという雰囲気に変わり始めました。皆で悩んだこと、焦ったこと、気遣いあったこと、そして準備中にふざけ合って和んだことなども含め、共有できた感情は忘れられないものとなりました。
同時に、言語の違いを乗り越えることの難しさを強く感じました。日本側中心の話し合いになり、こちらがある程度まとめてから韓国側に聞かせるまま、という流れが多かったことが反省点です。韓国側の学生が日本語学習者のということを考慮していたものの、話しやすい環境を作るというよりこちらが代わりに話してあげるということに気持ちが向かっていたのだと思います。深く話し合ってパワーポイントにまとめるには時間不足だったことや、ホスト側としてリードしようとしたことも背景にはありますが、答えのないテーマであるからこそ、一人一人が意見を出すことが大切だったのではないかと考えます。韓国側の「しっかり考えているのにうまく表せない」というのも何しても感じた感情もよくわかりました。学習中の日本語で話すのは、本当に考えていることとニュアンスが微妙に異なってしまうことも理解していたため、彼女達の言いたいことを推測するような形でこちらから話することが多かったのだと思います。しかし、振り返ってみれば、それは私が考えた内容であって、私の言葉以外の何かでもありませんでした。日常の何気ない会話では気付くことのできなかった、言語の違いを乗り越えて深く語り合うことの難しさを実感しました。
こうした状況を克服するためには、個々が持っている考えをそのまま言葉にして伝えるよう努めること、聞き手はその言葉そのものを受け止め理解すること、そして何よりも、そのような過程を安心して共に進むことができるような環境を作ることが大切だと考
えます。その基盤となるのが、今回私たちが経験したような異文化理解であり、国を越えた交流なのだと思います。

2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
    韓国からの学生との生活を通して感じた日韓の違いは、人と人との関わりについてです。私が接した韓国からの学生たちは皆フレンドリーで、日本人と比べて他人への関心が高かった印象があります。特に、それぞれの個性が受け入れられているため、自分から積極的にマイペースに行動していることが多く感じました。食べ物を共有したり、年上年下関係なく親しみやすくしたりする雰囲気も新鮮でした。たとえ小さなお菓子でも何人にも分け合ったり、自分が何か飲む場合には必ず他の人にも勧めたりしていました。

2.2 私の学び
    セミナー前から森山先生がおっしゃっていた韓国人の温かさというものを肌で感じ、彼女たちのおかげですぐにグループが打ち解けられました。そうした温かな気持ちに接することができ、私の学びはそれに始まりました。セミナーを通じて、自分たちの文化の違いを肌で感じ、彼女たちの優しさに感動しました。そのような文化の違いを理解し、受け入れる姿勢を持つことが重要であると感じました。

    韓国側の学びは、日本側からの影響を受けたものであり、自分たちの文化をどのように理解し、受け入れるかに焦点が置かれました。互いの文化を尊重し、フレンドリーな関係を築くことが求められました。このように、異文化を理解し、受け入れる努力は、自分たちの文化をより深く理解し、尊重するための重要な一歩となると感じました。
気付きました。

同時に、こうした文化差は、日韓という違いだけでなく個人の性格の違いでもあるのではないかと考え始めています。例えば、日本人でもマイペースで気楽で、韓国側の学生のように他人をよく気遣う人もいます。それらをもすべてまとめて「文化の違い」としてしまうことは抵抗を感じます。加えて、それらをあたかもその地域のすべての人に共通する文化として定義してしまうことは、ある種のステレオタイプを生み出す可能性があると考えます。そういった点から見れば、今回の交流は異文化間というよりも、自分とは違う性格をもつ人々との交流に過ぎなかったとも言えるのではないでしょうか。このように、文化と個人の性格とは密接につながるものであって分離して考えることは難しいと気付き、私たちが理解しようとしている異「文化」とは何か、根本的に考え直す機会となりました。
共生から日韓の相互理解へ

井上佳苗

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私の所属する「共生」グループでは、事前のテレビ会議とFacebook上の話し合いの結果、「共生」の意味を「日本人と韓国人がある場所ないし地域に共存し、更には良好な関係を築くこと」と捉え、研究目的を「日本人と韓國人が共生するために、その妨げとなってている問題を明らかにして解決策を見つける」と設定した。そして、国家間関係の悪化や偏った報道が個人の相手国に対する偏見や負の感情を助長するのではないかという仮説を立て、その現状を把握するために「日韓の双方に対する認識調査アンケート」を日本の大学生92人、韓国の大学生107人に実施した。セミナー中の実習では、在日韓国の青年団体の代表である梁英聖さんに「在日コリアンの現状と歴史から「日韓関係」を考える」というテーマで話を伺った。

1.2 私の学び
私が「共生」グループの活動を通じて学んだことは「国から人を見るのではなく、人から国を見る」ということである。本レポートでは、そう思うに至った経緯をアンケート調査とインタビューの考察から記したい。その前に、私は私事によりグループ活動の中で肝心な「韓国側との討論・発表」に参加することができなかった。レポートを書きながら自分が必要と理解できた気がしないのは、韓国の学生たちと腹を割って議論をしなかったせいだと考えている。このことが私に「面と向かって対話をする」ことがどれほど大事かを逆説的に教えてくれた。

アンケート調査から韓国人の意識を知ることができたのは大きな経験であった。衝撃的だったのは、日本人の韓国に対する見方と、韓国人の日本に対する見方に違いがあったことである。というのは、日本の学生の60%が韓国に対して「良い」または「どちらかといえば良い」印象を持っているのに対し（「どちらともいえない」が20%、「良くない」または「どちらかといえば良い」も20%）、韓国の学生の59%は日本に対して「良くない」印象を持っているという結果だったのだ（「良い」が25%、「どちらともいえない」が16%）。この印象の差の原因は、日韓の相手国に関する情報源が大きく関係していると考えられる。日韓ともにその情報源は自国のニュースメディアが一番多く、日本では8割、韓国では7割ほどに上る。次いで日本では自国のテレビ番組、韓国では自国の教科書を含む書籍でおよそ4割。韓国の学生で日本人の友人・知り合いがいない人が65%であったことを考慮すると「日本に対する良くない印象」は日本人自身ではなくメディアに映る「日本」のイメージや教科書等の書籍に反映される国のイデオロギーに依拠していると考えた。一方、日本の学生で「韓国に良い印象を持つ」理由のほとんどが「韓国人は良い人、韓国人の友人がいる」文化が好きと人を見ることで得られる印象であり、「良い印象を持つ」理由には「反日感情、歴史認識、民族イメージ、ニュース」というメディアを介して得たであろう情報が上がった。よって、「人と接すること」はその国のイメージの改善につながると考えられる。

しかしながら、歴史認識の差も見逃すことはできない。もしかすると韓国人の日本に対する「良くない」印象はここから来ているのかもしれない。アンケートの結果から日本人…
韓国人ともにその近代の歴史において「日本が加害者、韓国が被害者」という共通の歴史認識を持っていることが確認できたが、気になるのは韓国の学生の98%が「日本の歴史認識は正しくない」と回答していることである。思うに、日本人はその歴史問題を知ってはいるが、知っているだけに留まっており、日本としても国益が故に自国を貶めるようなことはできない。一方、被害者として未だに問題を内包する韓国を拠り所とする韓国人は、日本のそのような姿勢を「正しくない」と指摘している。このすれ違いがある限り日韓の問題は解決しないと考えるが、日本人も韓国人も「国」という色眼鏡をかけているから隔たりが残らないのではないかという私の思いである。

青年コリアン連合部の代表である梁さんの話からも、人を国などの属性によってではなく個人として見ることが重要であることを学ぶことができた。まず、梁さんは「日本人・韓国人とは誰か」という質問に誰たちに投げかけた。「共生」グループの皆で出生地や母語、文化などその根拠となるものを探っていたが、結局は「〇〇人」が根拠を持たない概念であることが明らかになった。これまで「共生」を考えるとき「日本人」「韓国人」というカテゴリーを使って考えてきたが、ひょっとしたらこの分類が「共生」を妨げる原因のかもしれないと気づいたのがこのときである。それは、在日コリアンの境遇を見れば明らかである。梁さん自身の経験によれば、在日コリアン2、3世は流れる血が韓国人であるために日本からは「韓国人」と見なされ、生まれ育ちも日本、母語も日本語であるために韓国からは「日本人」と見なされる。それゆえどちらにもつけずに疎外感を味わい、自分が何者なのか悩む。そして、日韓関係が悪いほどその間に板挟みにされる。また、梁さんは日本人の友人に「梁はすっかり日本人だね」と言われて傷ついたそうだ。なぜなら、自分の韓国人としてのルーツが不可視化され、日本がかつて韓国人を強制連行した歴史が現在にまでつながっている。私が「国から人を見るのではなく、人から国を見よ」と提案する理由は、これまで見てきたように「国」という枠組みにとらわれる限り、他者を不確かな先入観を持ってしか見ることができないからである。しかし、人と対話することで「接して見れば良い人だ」と実感でき、メディアや国家のイデオロギーに左右されることなく国家間関係や歴史を正しく理解しようという姿勢にとどまらない。この研究は「共生を妨げるものが国家間の動揺化とそれに基づく個人の偏見」という仮説を立てて行われたが、むしろ私は「共生」が国家関係を動かし、多民族共生を実現できる可能性があると考えた。人と出会って友人になる。お隣さんになって理解を深める。そうすることで生まれた絆が、自分たちの背後に現れる国との関係を良くしようという思いにつながり、国家間関係を改善させる原動力になるだろう。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い

まず、日韓の文化的違いを述べる前に、私が韓国を学ぶとの交流を通して「日韓の違い」という考えに基づいて感じたことを記したい。たとえば留学生や外国人のような出発の異なる人と接するとき、大概は事前に相手の言語行動や文化を学ぶことはせず、相手のことを知っていく。そして、その過程で予測不可能な言動や文化を目の当たりにし、それによってショックを受けたり誤解が生じたりする。これが私のイメージする異文化接触である。しかし、今回のセミナーは多文化交流という目的があった上に、事前に韓国についてある程度学んだために、韓国の学生と接する心構えがあった。きっとそれは韓国側も同じである。よって、日本側も韓国側も互いに思いやりと妥協があった。
と考えられる。だから、私が「韓国の文化に違いがない」と感じたことは、ある種の先入観——これによって誤解や衝突を避けることができたため肯定的なものに則っているのではないだろうか。私がこのようなことを言うのは、自分が「韓国の文化だ」と思ったことに自信心を持ってなかったからである。というのは、あとあと冷静に考え直して、実は韓国人でいても当てはまらない人間がいて、日本人でも当てはまらない人がいることがわかったからだ。しかし、それはある一定期間、近い距離で日本と韓国の学生が接することで、「日韓の文化的違い」を実感した上で一人一人を見つめることができ、その内部の多様性を自覚することことができたという成果だと思わせる。

私がセミナー中に特に感じた日韓の文化的違いは、韓国人は日本人に比べてスキンシップが多く、親しみやすい性格であるということである。事前学習で、韓国の女の子たちは手を繋いで歩くほど対人距離が近く、「親しき仲には迷惑あり」というほど遠慮なく付き合えるという話を聞いていたが、きっと日本人ならこんなに仲良くはなれなかったろうと思われ、彼女たちはとてもオープンでフレンドリーだった。話しているときに体を寄せ腕に触れてくれた、隣に座っているときに肩に頭を乗せて寄りかかってきた、存在を受け入れられている気がした。それらのことは抱き合うこともしたし、ベッドが一つ足りなかったために二人で一つのベッドで寝てもいただけた。本当に、家族のようだった。また、親しみやすくたった理由として、彼女たちの顔の表情やジェスチャーが豊かでわかりやすかったと考えられる。だから、私は「事前学習で学んだとおり、人と人の距離が近くてスキンシップが多いのが韓国の文化。それと比べると日本は距離を置くのが礼儀だ」と感じたのである。

2.2 私の学び

私は日韓の文化の違いそのものから学びを得たということより、私の中の日韓の文化的違いというものが、韓国学生と１週間ほど生活を共にしたことによってある程度中和されたことに大きな意味があると思った。一般に、日本は親しい仲であっても一定の距離を置き、スキンシップも少ないことはよく知られている。一方、韓国は親しい仲では家族のように距離が近く、対人行動も多い。しかし、今回セミナーで私はこれらの観念に自信が持たなくなった。まず、自分でも驚いたのだ。セミナーの後に高校時代の親友と会ったとき、話しているときにふと腕に寄りかかろうとして思い留まった。そのときに「おっと、相手は日本人」という考えが頭をかすめたのである。

私は日本人の中でも極端に非接触文化に生きてきた人間である自信がある。自分では驚くが、つい最近まで家族にさえ触れられることが嫌だったし、飲み物や食べ物を共有するなどもってのほかだった。今その態度を友人たちは見せたら嫌われること間違いないだが、高校を卒業するあたりまでは人から差し出された食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しがり食事食べ物を嫌しあったか否かを問わねばならない。
によって、これまで「日本人らしく」接してきた日本人同士も距離が近くなったように感じた。

「○○人だからこうだ」という知識は、相手を理解する物差しとして必要である。しかし、異文化の人と接するうちにいつの間にか自分が変わっている。そして、相手も変わるに違いない。もちろんその過程で違いに驚いたり理解できなかったりすることもあるので、違いに興味を持って真似したり楽しんでいるうちに相手の文化が心地良くなってくる。ひょっとしたら韓国の学生たちは私の態度を「距離があって冷たい」と感じていたかもしれないし、もしかすると私に合わせてちょうど良い対人距離を保っていってくれたのかもしれません。しかし、文化的な違いを乗り越えて接することとは、このように相手を思いやり、妥協することだろう。文化が違うことは当たり前。だから、誤解を恐れず対話することを楽しみばよい。楽観的かもしれないが、自分の文化が相手に通用しないと悩み、相手の文化が気に食わないとなれば、衝突するばかりで何も解決しないのだから。
日韓共生と民族意識

ストルスマン リリアン

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容

私は共生グループに所属しており、日韓の共生についてその現状とこれからの可能性を探るため、アンケートやインタビュー等の調査を行いました。その一環として、新大久保にて在日コリアン青年連合代表のリャンヨンソンさんにお会いし、日本における在日コリアンの人々の現状や歴史、また“日韓関係”の与える彼らへの影響について伺いました。

1.2 私の学び

リャンさんへのインタビューを通じて、日韓、また在日コリアンとのよりよい共生を形作るためには、①「日本側の民族意識の希薄さ」、②「消費財としての文化」という現代日本社会に内在する二つの壁を認知し、解決策を見出していくことが肝要だと感じました。

まず一つ目に、リャンさんとのお話は、日本人として生きる私たちがいかに曖昧な日本観、民族観を持ち、それが漠然とした根拠の上に成り立っているかを浮き彫りにしました。日本人である根拠として、代表的なものは国籍、血統、文化、言語などがあげられると思いますが、在日コリアンがその最たる例としてあげられるように、そのような特性を共有しても、“日本人”という枠に収まらない人々がたくさん存在しています。このような一種の「単一民族神話」が人々の意識に息づいていることは、大衆のステレオタイプを映すきらいがあるメディアのことばの選択などからも読み取ることができます。どうしてこのようなステレオタイプが再生産され、盲目的に信じられているのか、その構造についてここでは触れませんが、一般的に日本は民族的同一性が高く、それ故に日本人か、そうでないかという二項対立的な分類意識を持ちやすく、在日コリアンのような境界に位置づけられるマイノリティに対して不寛容な傾向があります。

また同時に、自分の所属する民族集団内の多様性に疎いばかりに、マイノリティ内の多様性に対しても純然となっていきます。これは、在日コリアンという画一的なステレオタイプを伴って、潜在的な差別の助長にされることもあります。実際に、現時点での日本における共生、在日コリアン側による通名の使用や帰化など、いじめ、就職、結婚など人生の様々なステージにおける差別を避け生きていくため自らの民族的背景を押し隠すことによって成り立っている側面がおおいにあり、これが彼らのアイデンティティからの乖離を引き起こし、葛藤を生みだすことにもなります。

それから、日本における在日コリアンとの共生を考えるにあたって熟慮すべき点として、政治的・文化的な日韓関係が、在日コリアンに対する日本人の世論や扱いに細やかに影響しているということを伺いました。その例として、連日メディアで報道されている領土問題や歴史認識などで対立する日韓の様子が、在日コリアンの人々の風当りを強くしている傾向にあるといいます。もちろん、在日コリアンは韓国を代表するわけではなく、日韓関係がメディア報道やネットを通して日本を含んだような二項対立的意識を強化し、その構図の中に在日コリアンを取り込んでしまいないように留意しなくてはなりません。究極的にはリャンさんは、日本と朝鮮半島が対立している限り、在日コリアンは分裂する可能性にいることになる、とおっしゃっていました。
二つ目にリンさんは「共生」がおおいに現代社会の構造的問題をはらんでおり、資本主義が介在することによってその真の意味が実現されていないことを指摘しました。その具体的な例としての新大久保は、メディアが表わすイメージとは異なりその実態は真のコリアンタウンではないといいます。確かに街中には韓国的イメージが溢れていますが、逆に言えばそれが一方的に消費されるだけの場であり、決して相互理解を含む異文化的交流を促進しているわけではないかもしれません。また、このような流動的な資本による文化的商品化とも言える現象の拡大には、行政もその一端を担っています。新大久保のある新宿区は“多文化共生”を題に掲げる一方で、その共生の意味するところはさらなる文化的更なる観光資源化であり、共生の主体であるべき居住者の人々の存在が透けて見えることはありません。もちろん、興味を持ったり、より理解を深める足掛かりとして文化産業は有用であることは否定できませんが、無批判な消費に終始し、対話のない一方的な関係を築くことのないよう留意することが大切だと感じました。

「共生」には色々な形があります。必ずしも相互理解、異文化理解を伴わなくても、精神的、物理的距離を保つことで共生できることがあります。しかし一方で、そのような共生の形は、嗜みや慣行によって転換が生まれやすく、脆いという一面があります。そのような共生の実態は、世界中を見渡しても私があるが、現代の日本もそのような側面を持っているのではないでしょうか。昨今の新大久保で見られる（在日）コリアンに向けたヘイトスピーチは、一例として挙げられると思います。対立や差別の根には、「得体のしれなさ」があります。しかし相手の本質を知らないということは、裏を返せば、自分の本質も知らないということになります。この違和感に気付き、草の根の交流をもってよりよい共生を実現していくことが大切だと感じました。

2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
セミナーを通じて、多少言語の問題も関わってくるのではが、特に目立って異文化的違いを感じたことはありませんでした。むしろ、ちょっとした感情表現や所作において、日本との文化的な近さをしみじみ実感すること多かったです。また、言葉の選び方や考え方についても、接した韓国の方全員に共通的文化的背景のある傾向というのは見つからず、個人の性格の域を出ないと感じました。
一方で、人付き合いに関しては、日本人と比べて、概して人と人との距離が精神的にも物理的にも近く、このような習慣においては文化的差異が認められると感じました。

2.2 私の学び
ともと、セミナーが始まる前から、韓国の方に対して、“異文化”を持った人である、という概念を持っていませんでした。しかし、私たちの前に、友達と手を繋いで現れたチームメイトを見て、おや、と思ったことに始まり、私たちに対しても話す時の立ち位置が近く、どんなに小さなお菓子でも食べかけをシェアする、一方で飲みかけのペットボトルは絶対に口をつけない…などなど、彼らの独特な間合いに、文化の違いを感じることがありました。

人付き合いにおいて、特に初対面では、相手との距離の取り方が戸惑うことが多々あります。そこで、日本人なら無意識のうちにシャイになったり、相手の出方を伺って距離を取るところを、彼らはスッとパーソナルスペース入ってき、親しげにスキンシップをし、こちらを気づかず向けしてくれます。そのような仕草に、サービス化の一途を辿るような人間関係が置き去りになってしまった、心地よい遠慮なさを感じ取ることができ、はっとさせられたように思います。
向き合ってわからること

佐藤文香

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
・教科書内容の比較（日韓お互いの高校の教科書を用いて、主に1900年頃の日清戦争から日本の韓国に係る植民地化政策の辺りの記述内容、方法を比較する。
・明治神宮・靖国神社及び靖国神社内の歴史資料館の遊就館訪問
・高校の社会科教師訪問、インタビュー

1.2 私の学び
靖国神社訪問では、終始無言だった。日本人側の学生は参拝したが、韓国側の学生は本殿の前で少し困った顔をしながら立っていた。私はそれに対して、困るのは当然だろう、と思った。参拝しないことに対して、もちろん不満や憤りは感じなかった。立場や今まで国から受けた教育を考えたら参拝しないのは当然のことだと思うし、もし私がその立場にいたら、神社の中にすら入れないかもしれません。お互いの立場を理解して、受け入れる。この姿勢が本当のお互いの共生に向けて必要なのだ、と実感した。今回のセミナーの中で、韓国側が靖国神社に対して反感を持っている理由を、初めて具体的に聞いた。その理由は私が聞いても靖国神社に対して反感を持たざるを得ないような内容だった。教科書内容の比較に関しても、日本と韓国では記述内容及び記述量の差が歴然だった。どちらが正しい、より事実を忠実に記述している、などは言えないが、韓国の教科書が日本に対して反感を持たざるを得ないような記述方法で書かれていて、日本の教科書は韓国との歴史に関する記述量が少ないことは明らかだった。教科書内容を比較して実感したのは、過去を遡っても何の答えも出ないということ。お互いの記述内容やその方法は異なり、争いの種になるだけだ。必要なのはこれからお互いがどう共生に向けて動き出すか、ということだと思う。

昴高校の社会科の先生の所に伺って、竹島問題についての講義を受けた後、日本の歴史教育についてインタビューをした。印象に残ったのは、「何故歴史を学ぶか」というお話だった。歴史を学ぶ事は、考える力を養い、自己のアイデンティティーを確立すること、国際社会の中で生きる力を養うことにつながる。自分は今まで受験のためだけの知識詰め込み型の勉強しかしてこなかった。今回の実習の中でグループ発表の準備をする際も、韓国の学生は自分の国の歴史についての知識を持っていた。それに比べて私はしっかり自分の国の歴史について話す事が出来ず、恥ずかしかった。私はこれから出来る限り海外に出て、グローバルな人間になりたい。一人の日本人として外国人へ行って、自分の国の歴史をきちんと認識していなかった恥ずかしい。歴史について学び直そう、日本の歴史をきちんと話せるようになろうと強く思った。また、もう一つ印象的だったのは、韓国には選択制ではあるが「東アジア史」という教科があるということ。自分の国の歴史だけを学んでも、狭い歴史認識しか生まれない。多くの国の歴史を学ぶ事で、「日本人」ではなく、「東アジア」、あわよくば「グローバル」人が生まれるのだろう。グローバル化が進む今、これから若い世代にこそ「東アジア史」という教科を学んでもほしい。そして私も学びたい。
2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
韓国と日本の間で、特に目につくような文化の違いは感じられなかった。あえていうならば、自分のペースを皆がそれぞれ持っているように思えた。特に気になったのは、歩く速度がみんな遅いことや、入浴・化粧などに時間をかかけること。

2.2 私の学び
今回の実習で、自分の韓国人に対するイメージが全て覆された。韓国人はせっかちだと言われていたが、今回の実習の中では私達日本人の方がせっかちだった。また、韓国の人は日本のようなお風呂の風習を積極的に受け入れないと聞いていた。実際、初日の夜は、お風呂が嫌だと言ってシャワー入る学生が何人かいた。皆でお風呂に入ることが出来たわけではない。しかし、次の日から続々と皆がお風呂に入ることが出来た。「温風、気持ちいいよね」と笑顔で言われたときは本当に嬉しかった。韓国の皆は積極的なコミュニケーションが多いと聞いたが特に気づかなかったし、せっかち、怒りやすいという特徴も感じられなかった。今回の実習で、いかに自分はナショナリズム的に行っていたか、固定観念を持っていたかという事に気づいた。そもそも「○○人といったら～～だよね」と考えること自体が間違っており、正しいものではない。国というまとまりでその国民の性格や特徴を定めることは出来ない。日本の人だってせっかちな人もいればのんびりした人もいるし、謙虚さを持った人もいれば傲慢な人もいる。それは韓国の人だって同じだ。国というまとまりで物事を考えることから脱却しなければならない、と今回の実習をする中で気づいた。この気づきによって、皆を冷静に受ける事ができた。また、実習の中でも一つ考えた事がある。私は、韓国の人々が自分「日本人に似ている」ことに親近感を感じていることに気づいた。自分は無意識に、韓国の皆に同化を強要しているのではないか、「似ている」ということに親近感を感じるのか、逆に言えば、「似ていない（全く違う）」なら、親近感は感じないのか。グローバル化の流れの中で、これから私は自分と全く「違う」人に出逢うだろう。自分との類似度、親近感を持つ基準にしていたら、グローバル世界における共存は不可能になってしまう。まずは国単位でイメージを植え付けるのはやめること、その上で国関わらず一人一人と向き合うことが必要なのだということを学んだ。韓国と日本の歴史や、靖国神社の問題に関しても、どうして問題が起きているのか、向き合って学ぶ機会がこれまで無かった。韓国の学生や先生にそれらの問題に関して、具体的な話を聞く事が出来たのはとても貴重な経験となった。今回のセミナーが無ければ、ただメディアや国の流れに合わせて、当たり前の事のように「竹島は日本の領土だ、靖国神社を参拝するのは当然だ、韓国人は感情的すぎ」というように考えていたと思う。向き合わなければ、直接話しなければ、何もわからない。ナショナリズムや大多数の流れに合わせて自分の考えを決め、述べるのは、このグローバル化が進む現在の世界ではもう時代遅れである。今必要なののは国籍・人種問わず一人一人が問題に向き合い、取り組むことだと今回のセミナーを通じて実感した。
日韓セミナーでの学び

加藤紗妃

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
　私たち歴史グループの活動のテーマは、「正しい歴史認識とは」というものであった。このことについて議論するための資料として、お互いの歴史の教科書を持ち寄り、歴史上の同じ事件の取り上げられ方を比較していったことが私たちのグループの特筆すべき点である。日本側は山川書店の日本史の教科書を、韓国側は近現代史の教科書を用いた。具体的に取り上げた内容は 3.1 独立運動、関東大震災時における朝鮮人の虐殺について、皇民化政策、強制労働・従軍慰安婦問題などである。それぞれについての記述の量や内容について比較し、提示した。

1.2 私の学び
　教科書の記述を見ていくと、予想通り、または予想以上の結果を得ることができた。分量に関していえば、日本史のなかで取り上げられる朝鮮・韓国の枠はとても狭い。上に挙げた具体的事例でも、例えば 3.1 独立運動について韓国の教科書は 7 ページにもわたっており、日本の教科書では 3 行のみの記述にとどまっていた。もちろん単純に記述の長さの比較はできない。言葉も違う上にそもそもその教科書 1 冊で取り扱う歴史の長さにも差があるからである。しかしこの差は歴然としており、視点が違えば同じ事件でも見方が全く変わってくるという事実に衝撃を受けた。内容に関しては、日本の教科書は思っていたよりは「公平な」記述であったように感じた。もちろん日本にとって都合の悪い書き方や悪い印象を与えるような言葉は用いていなかったが、淡々と事実を述べている、という印象であった。それに対して韓国の教科書では日本軍に対して（同じグループの韓国人学生の日本語訳によると）「邪悪な日帝」のような反日感情が全面的に押し出されているような言葉を用いていた。日本人から考えてみると、子供たちにとって一番身近な公的な教育資料である教科書にそのような感情的な言葉を用いるのは「正しい」歴史認識に偏った先入観を与えないものではないかとも感じる。しかし、韓国側の学生はあっさりとした日本の教科書の記述に対して「日本はもっと責任を感じるべきなければならない」とも主張していた。立場が違えば考え方が違う。私たち歴史グループが「正しい歴史認識とはなにか」に対して出した結論は、「それぞれの主張する「正しい歴史」があることを理解し、そのそれぞれの内容を正確に知ること」である。例えば日本が朝鮮を侵略したという事実はあっても、その犠牲者の具体的な数字や実際に行われていた一部始終をすべてを記録したものは残っていないため、これが正しいといえる絶対的な証拠は存在しない。それを理解し、お互いの立場を知ることが重要なのではないだろうか。その上でどのような考えを持つかは個人の自由である。以上が今回の発表を通して私が考えたことである。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
　日韓の文化の違いといえどもはり目上の人の対する態度がきちんととしているということが挙げられるのではないかと思う。1 つ上のにもオンニと呼びかけたり、敬語の種類がたくさんあることを教えてもらったときに、普段の生活に基づく韓国人の礼儀正しさ
や真面目さを感じた。せっかくの機会だったので、私も真似をして年上のメンバーにはお
ンニと呼びかけたりしたことも文化交流の 1 つだったのではないかと思う。とはいいうるもの
、日韓の文化についてさほど違いを感じなかったというのがセミナーを通しての私の印
象である。確かに全く同じだとは思わなかったが、それは日韓の違いというよりは個人個
人の習慣の違いであって、韓国人だから、日本人だから、ということの違いはあまり感じ
ず、ストレスにも全く感じなかった。

2.2 私の学び

文化の違いを感じた、というわけではないのだが、少し考えさせられる出来事もあった。
草津に宿泊しているとき、2、3 時間前にトイレに行ったときにはきれいにそろえてあった
はずのスリッパがいろいろな方向に脱ぎ捨てられていたことがあったのだ。正直に言うと、
韓国人学生が使ったのかな、と瞬時に考えてしまったのである。その時に自分でも気づか
ないうちに日本人なら次に使う人のことを考えてきれいにそろえて置いては、という先入
観や固定概念にとらわれていたと思い、少し反省した、ということがあった。そういった
考えというのは無意識のうちに浮かんでしまうものであるため、固定概念をすべて捨てると
いうのはかなり難しいことである。しかし自分のそういった行動を自分自身で監視し気
づくことができれば、そのことを意識することで多少は自分を固定概念から離し、自分で
考えて判断することがしやすくなるのではないか、というのがこの出来事を通して私が考
察したことである。また、文化に関連して言語のことについてもいろいろ考えさせられた。
今回のセミナーはほとんど日本語で行われ、ごくたまに意思の疎通がはかれないときに英
語を用いた。よく言われることでもあり、今回私が体験したことでもあるのだが、コム
ミュニケーションをとる上で、言葉が通らないなどということはあまり障害にはならない。ネ
イティブは相手が話してくれるので待つこともでき、言わんとすることを察することもで
き、辞書を使うこともできる。しかし話す内容がないと仲良くはなれないのも事実だ。特
に、一緒に思い出して笑うことが出来る出来事といったお決まりの笑いを共有することが
非常に重要である。一緒に笑う時間が増えるれば親近感もわき、距離も縮まる。今回のセミ
ナーに参加した韓国人学生のほとんどは日本語学科に所属しており、日本に興味をもって
いる学生がほとんどだった。その点話題の基盤となる部分に日本人学生との共通点が数多
くあったため仲良くなるのにあまり時間を必要としなかったのではないかと考える。
もしあまり共通点がない人と仲良くなる場合はもう少し時間が必要である。出会ってから
お互いとの共通点を増やしていくことで理解が深まっていくのではないかと思う。

今回のこの経験は今後の私の人生にいくつかの指針を残してくれた。歴史認識のことは
もちろん、自分がもつ固定概念のこと、相手と楽しい時間を持ち上げる大変重要なことを
このセミナーを通して学んだ。今回の日韓セミナーは楽しいだけではなくいろいろ考えさせられた
こともあり、とても有意義なものであった。
歴史は生かせるか

笠智遥

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
・事前調査
  一高校の歴史教科書調査…19世紀後半から20世紀前半、日本と韓国の近代化、植民地化の過程、独立運動などに関する記述の抜粋と日韓の教科書比較・分析
  一日韓のイメージ、靖国神社、旭日旗に関するインタビュー…対象：特に親しい人（親、兄弟、親友等）
・課外活動…明治神宮、靖国神社、遊就館、高校訪問（領土問題、歴史教育に関する講義）
・日韓の歴史認識と提言をまとめ、グループ発表（パワーポイント）

1.2 私の学び
近年、日韓関係における歴史認識の問題が注目されている。今回は特に、どのような歴史の記述や認識が日韓の对立を生んでいるのか、また両国の歴史教育（教科書）はどのように個々の歴史認識形成に関わっているのかということを念頭において実習に臨んだ。事前学習を通して、日韓の歴史教科書を比較分析したが、歴史の教科書が多分に国家のイデオロギーを含んだものであると感じた。もちろんすべての出来事を記述することはできないが、何を含めるか／含めないかという取捨選択やその出来事をどの視点からどのように記述するのかというところに両国の政治的・歴史認識を垣間見ることができた。たとえば、三・一独立運動を、日本では武断統治から文化統治への転換点として肯定的に描写しているが、韓国では日本が武力といった直接的な支配から思想や文化といった内部にその影響力を及ぼす（洗脳する）契機になった出来事として、より悲劇的に捉えていた。よって、同じ歴史的事件でも、日本人は植民地時代の一出来事として、韓国人は先祖が民族の尊厳や誇りを侵される一大事件として捉えるようになり、こうした認識が定着するのを抑えることは困難である。また、教科書の記述や遊就館訪問を通じて、日本の歴史認識、とりわけ世界大戦や植民地政策について、自らが受けた被害や亡くなった日本人、日本兵への共感や被害者の意識は強く示されているが、同時に日帝時代の政策によって、また日本が海外で引き起こした戦争に陥ったことによって、被害を与えた人々やその痛み、苦しさについての認識や配慮が無くとも欠如していると感じた。グループ発表の前日夜、日本の植民地時代の朝鮮半島内の様子について、その時そこに住んでいた人々がどのように感じていたかを韓国の友達から聞くことで、恥ずかしながら初めて日本が被害を与えた側であることを強く意識し、被害を受けた側の葛藤や苦立ち、悲しみに気づくことができた。これまで、日本人の戦時中の生活の苦しさ、戦争のむごさについては祖母や語り部の人たちから話を聞くことでそれが具体的なイメージとして記憶に残っていたが、たとえば戦時中に日本によって被害を受けた韓国や中国、その他アジアの国々の人々の声を聴く機会は皆無であった。現在、日本に求められる歴史認識とは、日本だけでなく他の国、地域における過去の様々な痛みや苦しみに共感し、それらが繰り返されないようにすることではないだろうか。これまでは歴史が日韓の葛藤の原因であったが、歴史は今回の実習が示すように日韓のよりよい友好関係構築に生かすこともできる。日本史、韓国史といった国ごとの分類を超えて、アジア史、日韓史を共同で作ってみるのも一つの手段だろう。
これからは、歴史を生かした国の協働、関係が築かれることを心から願う。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
・言語行動…友達同士の会話と議論や発表時の積極性

2.2 私の学び
様々な場面に対する言語選択、態度の違いが印象に残っている。事前の遠隔交流では各グループとも日本語でしっかりと自分の意見を発表していたので、こちらもしっかりと準備しなければと毎回構えていたのだが、実際に講義や発表、議論の際には大変静かであまり自分の意見を主張しなかったことにとても驚いた。もちろん彼女たちが自分の意見を持っているということは、個人的に話す中でよく分かったが、もっと積極的で感情的に自分の意見を主張するイメージがあったので、尚更不思議に感じた。こうした態度は、日本の大学生にもよく見られることなので、文化の違いであり、類似点でもあるといえる。今回の発表や議論をする言語が日本語であったので、その制約が大きかったのかもしれない。こうしたことを除いては、特に強く文化の違いは感じなかった。言葉や社会規範は異なっているが、おいしいものを食べてもおいしいといい、きれいなものを見て美しいと感じるなど、人間として多くのことを共有していることを再確認した。日本語という制約の中でも苦労も多かったろうが、とても楽しく過ごすことができた。ただ、昨年のセミナーに参加した日本人から、韓国人のホスピタリティの高さと素晴らしさを聞いていて、今回、私たち日本人のおもてなしも十分であったかは不安が残る点である。迎え入れる気持ちは十分にあったが、なかなかそれを態度や言葉で示すことができなかったことが悔やまれる。特に、課外活動で訪問した高校では、テーマとは少々離れた講義があり、かなり専門的で難解な日本語が多用されていたので、事前の打ち合わせをもう少し詳しくしておくべきだったと反省している。私たちのグループがどのような目的で訪問し、どういうことを期待しているのか、そして日本語の配慮を希望していることなど、日本側がもっと準備しておくがあったのだろう。おもてなしの気持ちは、迎え入れるときだけでなく、こうした事前準備にこそ反映されるべきであった。反省点は多く残るものの、現在でもLINEやfacebookなどのSNSを通して、日韓の交流が続いていることから、今回のセミナーは有意義であったといえよう。
1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私たちの発表テーマである「歴史」に関して、以下の活動を行った。

まず事前学習として、各自で日本の教科書と韓国の教科書を読み比べた。
セミナー合宿 3 日目の自由時間の際には、靖国神社と、併設されている資料館『遊就館』を見学した。その後、千葉県立市川昴高校で教鞭を取っていたらっしゃる吉井先生の元を訪れた。吉井先生は日韓の歴史研究をなさっているそうで、その伝で、大学で歴史を教えていらっしゃる先生を紹介して頂き、特に「竹島の領土問題」について日韓の歴史認識がどのようなものであるか、お話しいただいた。その後、先生方に質問を行った。

発表準備段階では、個々人が事前学習や見学に行ってどのように感じたのか、意見を述べ合いながらまとめていった。

1.2 私の学び
様々な活動を行ったが、その中で特に私にとっては学ぶべきことが多かったのはやはり、発表準備の時まとめました。私が担当したのは、日韓の教科書における戦前の出来事についての記述の差を探し、まとめることだった。このように言葉にしてみると単純な作業のように見えるが、実際にやってみると、終始悩み、踏踏ましながらの作業であった。

教科書の記述の仕方がまるで違うことに戸惑った。発表でも述べたが、日本の教科書が淡々と客観的に事実を記述するのに対し、韓国の教科書はどこか感情的で、主観的だ。故に、日本の教科書では戦争体験の悲惨といったものは伝わりにくいと批判することとも出来よう。例えば、関東大震災に関して、在日の韓国人に対する虐殺が民衆によって行われたが、日本の教科書ではどこなく冷めていて、「パニックに陥った民衆が朝鮮人を殺すこともあった」とあっさりとしている。片や韓国の教科書では、韓国人が故にその時代に日本にいたのかという、彼方の話から記述し、そして残酷で非道な日本は、韓国人を保護するばかりか殺したものだと日本が何倍もの記述量で詳細に述べる。このような記述が悪いとは思わない。けれど私がこの教科書を読んで一番考えたのは、だから韓国人は、戦前・戦時中の日本の行いが悪いと断言出来らず、日本人を嫌ってしまうのだ、ということだった。韓国の教科書は、少なくとも私が目にしたものは、日韓の間で起きた様々な出来事を、政策を、事細かに記述している。しかも教科書のでかなので、歴史がわからなるなら当然だろうが、とても理解しやすく、すんなりと頭に入るものだった。特ににとっては、日本の教科書は、それ単体ではとてもじゃないかが歴史の前後関係が分からない代物だ。授業で先生が壊し碎いて話すことで初めて、実際に起こった出来事として受け取る、というレジュメのようなものだ。けれど韓国の教科書はそれを読めばすぐに歴史がわかるというほどに分かりやすい。日本人は、歴史認識、などと言われると自分の学んだ日本史を思い出し、なんだかよく思い出せない、よく分からないと思っててしまうことが多いようだ。けれどそれだけはっきりと記述されている教科書を読んでおけば、どれほど時間が経っても、記憶が多少曖昧であっても、韓国の人々は少なくとも「日帝が悪いことをした」ことだけは忘れないだろう。日本に対するネガティブキャンペーンのようにも感じられなくなった韓国教科書を前に、私は戸惑った。
私がここで書いたようなことを、安易に口にしていいのだろうか。それは、韓国への批判、ひいてはすっかり仲良くなってしまったグループの面々を傷付けてしまうのではないだろうか。そもそも、私の考えたことは、間違ってはいないのだろうか。

語句一つ尋ねることさえ躊躇った。日帝、という言葉から、私は戦時中の大日本帝国に対する無言の嫌悪を感じ取ってしまっていた。別に大日本帝国は私ではないのに、なんだか私の属性をけなされたような気がしてしまった。けれどもこれは、後に私がうっかり発表中に多用した「朝鮮」という言葉と同じで、悪意はまるで無いのに、呼ばれた対象がそれを好まないという、扱いの難しい呼称の問題であったようだ。

ここで違っている、と指摘することもつらかった。相手は韓国そのものではない。韓国から来た留学生だ。けれど、私が韓国の教科書の言葉に違和感を持つことで、そしてそれを伝えることで、彼女は私の否定されたように感じてしまわないだろうか。理性で分かっていても、どこかで傷ついたりはしないだろうか。

これほどに気を遣い、悶々としながら発表課題をまとめたことはなかった。相手とは十分親しくなっていたのに、だからこそ、相手を傷付けたくはなかった。けれども、この機会を逃してしまえば歴史の話を韓国人と直接する機会なんて無いと、気付いたことは全て言った。

結局、発表は単に記述の違いを述べるだけに留まった。もう一つ踏み込んで、感じたこと、考えたことを述べられれば良かったが、私にはまだ、荷が重すぎた。それよりも、私はこの葛藤の記憶を大事にしたいと思う。この葛藤は、相手に対する情が無ければ存在しなかったと思うからだ。そしてそれは決して不要なものではない。寧ろ、とても大切なもののだ。

私の学びは、異文化交流はこのような葛藤をもたらすものであるということだ。この葛藤の向こうはまだまだ見えなかったが、いつか無くなるようなものでもないのだと思う。

相手への思いやりと、それでも知ろうとする意志を持つならば、異文化交流は成し得えない。日本と韓国とは違い国と表現されることが多いが、それはあまりに互いを忌避し過ぎていたが為ではないだろうか。私たちはこれから、深い葛藤や、痛みを感じながらも相手を知ろうとしなければならない。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化的　違い
文化の違いになるのかどうか分からないが、「親日派」という言葉の使い方にギャップを感じた。
グループの韓国側の彼女曰く、韓国における親日派とは、戦時中に日本にあった人々で、それにより富を築いたり、権力を得た人々を指すという。そして、親日派でありながら韓国内で豊かな生活を送っている様を、醜いとか、問題だと感じるという。

私は親日派、という言葉を聞いた時は、政治的に日本に有利になるようなことをする人間であったり、日本の文化を好む人々のことを言うのかと思っていた。例えば日本で言えば、自民党は親米派と言えるし、デーブ・スペクターは親日派芸能人だろうか。いずれにしても、醜い、という言葉で表すことはあまりしないように思う。ここから、韓国の人々は爱国心が強いのではないかと感じた。

2.2 私の学び
普段ことさらに日本人であることを意識しない私にとっては、日本の教科書が自国を指す時に「日本は～」と述べるのに対し、韓国の教科書が「われわれは～」と表すことさえ強い違和感となっていた。そこに親日派は醜い、というコメント。そして、他の授業の課
題で取り上げる為に調べた「韓国的キリスト教」の在り方が思い起こされる。韓国的キリスト教は、日本による侵略の進む最中に流行したという背景の為に、シオニズムにおけるユダヤ人の在り方と韓国人とを同一視するような、レジスタンス精神や愛国精神を盛り上げるような要素を持つという。このようなバイアスにより、韓国人は自国を愛しすぎている。時に他者批判的になり過ぎる。と否定的に思っていた。

けれども、この私の考えこそが偏見というものであったのではないかと、セミナーが終わってからであったが気付かされた。きっかけは単に、教科書の主語が「我々」であることについて両国の先生にお尋ねしたところ、「そういう文化なんじゃないの？」と事も無げに言われたことであった。

私は今まで、相手の文化を受け入れることを目指してきた。それがどんなにめちゃくちゃに感じられても、否定するのではなく、理解したいと思っていた。けれど、現実には理解の及ばない方が多い。時に、理解も何も、そもそも特に考えずに習慣として行っているだけのことでもある。全てを理解できると思っていたこと自体が浅かったのだと、その時実際に体験して、漸く気付かされたのだった。

親日派、というものを韓国の彼女が醜いと思うのなら、それはそういう風に彼女は思うのだろうと思ってしまう。教科書が「われわれは～」と言うのなら、へえ、日本と違うのね、でいい。違いをただそこにあるものとして認識してしまうのがいいのではないだろうか。そして、どうしても受け入れられないと感じるならば、忌憚なく話し合ってみるのもいいのだろうと思う。とはいえ、話し合うことが出来るのは、相手と親密になってからであろうか。
異文化交流の醍醐味

梨本夏菜子

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私の所属は教育グループである。私たち教育グループは日韓両国の教育の問題点を調べ、それに対する改善策を日韓両国の長所なども参考にした上で探っていくことを目的に研究を進めた。ただし一口に教育といっても扱う範囲が非常に広くなってしまうので、以下の三点に範囲を絞ることにした。まず小学校における英語教育。次に大学受験勉強について。最後に大学生の学習意欲の実態についてだ。この三点だけでも十分に範囲が広く感じられるかもしれないが、日韓それぞれで焦点の当てたい問題にかなりの差異がありながらも、それらを尊重し、話し合ってある程度妥協した結果なので許していただきたく思う。そしてこのなかで個人的に学びが多かったと感じるテーマは日韓の大学受験についてである。調査活動はだいたい次のように行った。まず日本・韓国のメンバー全員に今まで自分がどのような教育を受けてきたのか（何歳から習い事や塾を始めたなど）について各々まとめ、提示しあった後、気になる点についてはより詳しく話してもらったり、インターネットを通じてそれに関するデータを調べたりした。またセミナー中ので実習では、東大のキャンパスに場所を借りて、様々な大学に在籍している日本人大学生を集め、自らが受けてきた教育とその問題点などについてと思うところを各々に語っていた場を設けた。ここにおいて韓国の子たちは事前に内容を考えてもらったりインタビューを行ったりして、比較学習を深めていった。

1.2 私の学び
大学受験の問題に関しては、韓国の受験競争の厳しさはよく知られるところなので、日韓で大きく違いが比較できる分野だろうと考えていた。実際に韓国の子たちにインタビューしていくと、高校1年生の時から強制の夜間学習があったり、部活動がほとんどなかったりと、私が経験してきた高校時代とはかなりかけ離れているものだった。しかもよく調べていくうちに、日本と似通った問題も起きていることに気が付いた。例えば私費負担の重さの話が韓国側から出たが、それは日本でも問題になっている。奨学金滞納問題も深刻になっていることも耳にしたことがあった。また韓国では進学する大学によって将来が確定してしまうというが、日本でもまだ大学のネームバリューの力関係は根強く存在する。受験制度を見てみると、日本の大学受験も韓国の大学受験も一発勝負的な性格を持つ。さらに塾や予備校、教育熱心な親や進学高からの大学進学への圧力が問いといといった問題は、程度の差があるもので、日本の進学校出身の学生からも同じような声を多く聞いた。以上のように予想していたよりも非常に多く、日韓で似通った問題点が大学受験の分野で浮上したのは驚きであったし、たいした問題点は挙げられないのではないかと浅く考えていた日本のは大学受験に対して客観的・批判的な視点を養うことができた。

2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
七日間共同生活を行ってきたなかで実際に見たり感じたり、また韓国側の子たちとの会話の中で、「日本ではこうだけど、韓国ではこうなんだよね」というように教え合ったりし
た結果、発見した文化の違いはそれなりにある。例えば韓国側の子たちの声が少し大きく感じたり、食事の礼儀作法において違いがあったり、言葉が直接的だったりすることだ。そのような文化の違いをそこそこ感じはしたが、正直に言って、実際の共同生活の中でより多く感じたのは「違うこと」よりも「同じである」ことだった。それはおそらく、事前に韓国側の子たちが日本の礼儀作法や言動の特徴を踏まえて、いわゆる「郷にに入れば郷に従え」の精神で気を使ってくれたことに起因する部分も少からずあるであろうし、私たちが事前に韓国の文化の特徴についておおまかに学んでいたことも要因のひとつであるとは思うが、ただ文化の違いによって困ったことが全くなかったわけではない。

韓国では日本で常識とされる「空気を読む」というような文化はあまりない。だから私たち日本人からしたら、「そこは何も言わずともこうするべきだろう」と思うような時でも、私たちがそのまま何も言わなければ、韓国の子たちは自分たちの思うようにそれぞれ行動を起こしてしまう。それによって私たちは後手に韓国側の希望にそうように対応をかかった場面が少しあった。また事前のテレビ会議やfacebookでのやりとりにおいては、日韓で焦点を当てたい問題にすれ違いがあったり、言語的問題から相手の意図が上手く取れなかったりして、全く話し合いが進まないようなこともよくあったので、実際には話し合いを進めるまでは本当に発表まで漕ぎ着けられるのかという不安はかなり大きかった。

2.2 私の学び

上で挙げたような文化の差異による問題や不安を乗り越える、というか気にしなくなったらことに大きく寄与したのは、先ほども言及したが、私たちは「同じ」だと感じることだった。韓国の子たちと打ち解けていけばいくほど、そう感じる機会が増えているだろう。例えばユーモアの感覚が同じだったら、夜に恋愛の話になると盛り上がれる。それによって私たちは後手に韓国側の希望にそうように対応をかかった場面が少しあった。また事前のテレビ会議やfacebookでのやりとりにおいては、日韓で焦点を当てたい問題にすれ違いあったり、言語的問題から相手の意図が上手く取れなかったりして、全く話し合いが進まないようなこともよくあったので、実際には話し合いを進めるまでは本当に発表まで漕ぎ着けられるのかという不安はかなり大きかった。

文化の差異を発見し、その原因や由来を学び理解することも無論重要なことであるが、それに加えて、お互いの共通点を見つけて「私たちは同じだ」と感じることの方も非常に大切で、大切なことであると私は実感した。つまり「差異」を興味や関心のきっかけにして、その後理解を進めていく過程で「同じ場所」「共通点」に気がついていく様子に出会ったときよりも何倍も感動し、嬉しく思った。文化の差異を発見し、その原因や由来を学び理解することも無関係なことであるが、それに加えて、お互いの共通点を見つけて「私たちは同じだ」と感じることの方も非常に大切で、大切なことであると私は実感した。つまり「差異」を興味や関心のきっかけにして、その後理解を進めていく過程で「同じ場所」「共通点」に気がついていく様子に出会ったときよりも何倍も感動し、嬉しく思った。
セミナーを通じて

柿平恵理

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
今回私たち教育グループは、日韓の教育比較からより良い教育を探る、ということをテーマに活動してきた。英語教育、大学受験、大学における学習意欲の三点を軸に研究したが、自分にとっては特に英語教育研究において学びが大きかった。事前学習では、日韓の英語教育に関して様々な文献やインターネットを用いて情報収集に努めたが、セミナー中に行った実習や韓国学生たちとのディスカッションで多くの気付きを得た。実習では、東京大学駒場キャンパスで様々な大学から現役大学生を招いてインタビュー及びディスカッションを行った。英語教育に興味関心を持つ学生たちも多く、日韓英語教育の違いや日本の英語教育はどうあるべきなのか、様々な意見を聞くことができた。また、韓国学生たちに自らの受けてきた英語教育についてインタビューすることで、文献などでは得られないような学生たちの身近な韓国英語教育に対する意見を聞くことができた。

1.2 私の学び
もちろん、何より強く実感したのは、互いの受けてきた英語教育の違いである。以前は互いに似通った英語教育を行ってきたはずの二国だが、今や韓国は日本の十年、二十年差をもっていると言っても過言ではないほど日本を引き離れ、日韓両国の英語教育を比較したとき、見つかる最も明らかな違いは小学校における英語義務教育の有無である。日本は2011年によく小学校の英語教育を必修化させたが、韓国ではそれが既に1997年から始められていた。加えて、日本では英語教育が必修とされるのは五年生からである一方で、韓国では三年生からである。しかしこれも現在では一年生から拡大されている。こうした英語教育の違いにより、両国の学生の英語力には大きな差が生じていることが多く、調査によって明らかにされてきた。小学校英語が必修化されていなかった当時、私が中学入学後に学び始めた基礎を、韓国の学生たちは既に小学生のうちに習得していたのであるから、両者に差が生まれるのは無理もない。こうして見ると、明らかに日本の英語教育が進歩的に行われると、その進歩的な韓国英語教育を私自身満喫のままで持って来た。しかし、今回気付かされたのは、その英語教育にもメリットと同時にデメリットが含まれており、完璧な教育など存在しないということである。今回のセミナーを通じて韓国側の学校韓国英語教育の影も見えてきたのである。一つ挙げられるのは、子どもの早期教育によるギロギアッパ（기러기아빠）問題であろう。これにより、子どもを英語圏へ早期留学させる際、妻と子どものみが海外へ渡り、韓国に残された父親は経済面での負担を強いられるため精神を病む等の、韓国英語教育の過熱が生んだ社会問題である。日本ではこうした社会現象は一般的では無く、ここでの英語教育への過度も言える熟意とそこに隠む影が認められるであろう。このように、私たち日本側から見れば、一見理想的とも言える韓国英語教育には、メリットと同時にデメリットも隠されているのである。教育は、その国の基礎である。教育は、その国のあり方を大きく左右する。しかし、どの国にも、どのような教育にも、完璧な正解など存在しないのではないだろうか。未だ正解に辿り着くことができないからこそ、常に新たな教育を模索し続け、改善していく必要があるのである。韓国の教育に見習うべき点、改善点の両者が存在するように、ま
た日本の教育にも長所と短所が存在する。私たちがより良い教育を目指すために必要なので
は、他国の教育をただ賞賛し自国を卑下することでもなければ、他国をただひたすら非難し自国を賞賛することでもない。私たちに何よりもまず求められるのは、相手をよく理解することである。他をよく理解し、そこでの気付きを自らの教育に活かさなければならない。相手の教育を理解してこそ、自国の教育は良くなり得るのである。このセミナーにおける実習や調べ、対話を通じて私は、論文や資料に見えるものだけではない、より身近で意外な両国の教育の長所と短所にも気付くことが出来た。両国の教育はもちろん完璧ではない。だからこそ、今回得た、どんな教育にも光と影が存在する、という学びがより良い教育を目指すその一歩になるのではないかと思う。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日韓の間にどのような違いを感じたか、実のところ、私はこの質問にはっきりと答えることができない。なぜなら、私はこのセミナーを通じて、本当は私たちの間に大きな違いがないのではないか、ということに気付きだからである。もちろん、日韓の間のどこにも違いなどない、というのではない。必ず何か違いを述べなさいと言われれば、韓国人は接触行動が多い、自分の意見をはっきり言う、美意識が高い、とでも答えるであろう。日本人一般に比べれば、韓国の人々は接触行動・スキンシップが多く、その対人距離の近さから親密さを感じられるし、一週間という短い期間でありながら、スキンシップを囲ったり何でも話し合える仲になったことは、やはり彼女たちの積極的なコミュニケーションスタイルによるものだろうと思う。しかし、これらの違いは私にとってほど重要なことではない。私が本当に強く実感したのは、「同じ」ということなのである。

2.2 私の学び
私はこれまで、熱狂的で、自己表現が明確で、接触行動が多く、「ウリ」文化の浸透、「親しき仲にも迷惑あり」、といった、韓国文化の一部ではあるが日本とは異なるその言語行動や習慣の違いを学んできた。韓国文化にさほど馴染みの無かった私にとっては、その価値観の違いに驚かされることも多く、これらの知識は私の中で「韓国人」像を形成した。韓国に行ったことがあるのであれば、韓国人の友達が多くいるのであれば、私は一方的に「韓国人」を分かったような気になり、私たち日本人とは大きく違う韓国人、という日本人との差異ばかりが強調された「韓国人」像が私の中に出来上がっていった。しかし、この日韓セミナーによって私のその韓国に対するイメージは大きく塗り替えられた。これまで私が抱いていた「韓国人」像はステレオタイプに過ぎなかったのではないか、ということに気付かされたのである。私が克服しなければならなかったのは、日韓の文化の違いではなく、むしろ、私の持っていた「韓国人」像を韓国の学生全員に当てはめようとし、その差異を前提として韓国の皆と接しようと身構えていた、自分の柔軟性に欠けたその意識であった。もちろん、先ほど述べた通り、日韓の間に何も差異が認められない、と断言すれば嘘になる。彼女たちの人懐っこくもあるが物怖じしない姿勢は、日本人にはあまり見られない韓国人の持つ積極性としてとても印象的であったし、教育や言語、環境の差から来る価値観の違いは確かにそこにあった。日韓双方の意見を尊重しながら、計画を練ったり、発表の準備を進めたりすることは、言語の問題もあり、もちろん簡単ではなかった。しかし、だからといってそのことは、日本と韓国はこんなにも違うのだ、と私に強く感じさせるものではなかった。むしろ、協働できた喜びや、多少の困難に直面してもそれを乗り越えることができ、という達成感の方が大きく、私たちは分かり合える、私たちは「同じ」なのではないか、という思いの方が私の中に強く残った。
多様なはずの個性を「韓国人」と一つに括って捉えることは、異文化と接触する際には確かに簡単で便利であるが、時にそのステレオタイプが異文化交流の妨げになることもあり得る。まして、そこに否定的な感情が加わりバイアスがかかったものへと変化すれば、それは非常に危険なことである。残念ながら、韓国、韓国人に対してそういったバイアスを持っている日本人は少なくない。そのような中で、私はこのような韓国の皆と直接触れ合い共に生活する貴重な機会を得、自分の持つステレオタイプに気付き、そしてそれを塗り替えられることが出来たのは、非常に幸せな経験であったように思う。私たち日本人と韓国人は、同じように学び、遊び、食事し、笑い合い、泣き合い、協力し合い、共に生活することができる。私たちは「同じ」であり、分かり合える。その中に気付いた今、私は韓国、韓国、韓国、韓国人の皆を「韓国人」としてではなく、一人ひとりの個性ある存在として見ることができる。共通点を見つける事よりも、違い・相違点を見つけることがずっと簡単であると思う。違いは目立つばかりでなく、人々に違和感を覚えさせるからである。しかし、大切なのはその共通点に気付くことなのではないか、と私は思う。実際に会って、話して、共に生活して初めて気付く「同じ」ということこそ、協働するために重要なことなのではないだろうか。このセミナーを通じて私は、日韓の違いのみならず共通点に気付くことができ、この貴重な学びの経験が今後、自分の異文化交流体験において有意義なものになれば良いな、と感じている。
他人を知り、自分を知る

牛留早亜彩

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
今回、私たちの班は「日韓の教育」というテーマを土台にグループ活動を行った。まずは、「教育」というテーマでは大きすぎるので、教育の中でも何について考えて行きたいのかということを日韓各自で話し合い、それをもちいた。この結果、韓国は大学受験やキャリアについて、日本側は英語教育についてという全く違うテーマがあがったが、お互いに共通するものとして「自国の教育で自分が納得していない、問題と考えること」がテーマにあがっていることから、お互いの国の教育について比較することによって出てくる長所・短所を用いて、お互いの国の問題点を解決する策を考えるという方針になった。

その方針が決まってからは、まずは自国の教育について、お互いが出し合った受験、キャリア、英語教育について重点的に調べ、それを持ち寄り比較して解決策を練り、さらに日本での実習として、実際に現在の日本の大学生に教育について質問をして、日本の学生の現状を把握し、それらをもとに日韓でディスカッションを行って解決策を考えた。

1.2 私の学び
「教育」という今回のグループ活動のテーマにおける学びはもちろんたくさんあるが、何よりも今回私がこのグループ活動を通して学んだことは、自分の思っていることを、母語の違う相手に伝える難しさである。これは外国語を勉強していれば必ず突き当たる、当たり前のことのように聞こえるが、今回は普通とは状況が少し違った。大抵、「言葉、自分の思っていることが通じない」という感情は、基本的にネイティブスピーカーに対して、ノンネイティブの自分の語彙力やスピーキング力が足りないことによって生じるものである。しかし、今回の場合は、それとは180度違い、逆にネイティブの自分が、ノンネイティブの相手に明確に伝えることができないというジレンマであった。例えば、「学習習熟度」について韓国の学生とディスカッションしているときに、日韓の中での「学習習熟度」の意味の理解の仕方が違って、ディスカッションをしているうちに何について話しているのか分からなくて、混乱してしまったり、難しい言葉の簡単な言い方からかなかったりとか、言い回し方がくどくて、真意が伝わりにくいことがあったりなど多くの困難にぶつかったり、またこれらを私はなかなか克服することができなかった。今まで、「世界にでていく」という気持ちが自分の中に強かったこともあって、今まで母語の違う人々とふれあうとき、自分がノンネイティブで、相手がネイティブであることばかりであり、この逆の状況に立つことができなかったのである。

しかし、森山先生が去年の参加者の感想文を見せてくださったとき、ある1つの感想文の一文に目が止まった。それは「相手が理解しているかどうかを毎回しっかりと確かめる」というものだった。確かに、今まで自分たちは、とりあえず自分の言いたいことをすべて言ってしまって確認するというスタンスを取っていた。しかしこれでは途中で分からないことがあっても、最後まで行くうちにその分からないことを忘れてしまい、結局は分からないまま終わってしまう。それが後々積み重なって、話すはずが生じてしまうのだ。自分自身が留学でマイアミやマンチェスターに行ったときのことを考えてみるとそれがよくわかった。マイアミでのホストファミリーーや、マンチェスターでの先生は、ことあるごとに分か
ったか聞いてきたり、大丈夫か確認していた。少しでも私の顔に疑問の色が浮かぶとすぐ
に言い換えるなどの措置をとってくれていたことを思い出した。そのことに気づいて、顔
色をうかがったり、質問を短いスパンで受けるようにしてからは相互の理解度がぐっと深
まり、またそれが日常会話にも影響して、韓国側の学生が日常生活や日本語のことなど多
くの質問をしてくれるようになり、会話がはずむようになった。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日本と違い、韓国はやはり言い方がストレートなことや、そのためか最初から距離感が
近い。また、それとは逆に距離感が近いのにも関わらず上下関係はしっかりしている。

2.2 私の学び
ものの言い方がストレートなのは、英語でも同じなのであまり気にはならなかったが、
最初から距離感が少し近く、日本では初対面とか、会って1週間とかで聞かないような内
容の質問を聞かれたときは戸惑ってしまった。しかし、彼女たちが悪気がないことは分か
っているし、会話を続けようとしてくれているのだなと考えることで克服した。またこの
ように距離が近かったからこそ、分かれるときにたった1週間だったのにあんなにも寂し
かったのだろう。
また、その距離感の近さのわりに、上下関係がしっかりしていて、年下の子は必ず上の
子を呼ぶときに敬称をつけたりするので、最初年上の3人をどう呼べばいいか、また最初
の自己紹介でニックネームをつけたのが本当にそのニックネームで呼んでいいのか戸惑
い、最初は呼びづらかった。しかし、結局はニックネームも彼女たち自身が納得してつけ
たものであるし、あちらがいれていている様子もなかったので名前の呼び方について気に
することはなくなった。またそのこともあってか、あまり年下年上気にすることなくなか
よくできたように感じる。
2013年度日韓交流セミナー報告

片山華花

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
【発表に至るまでのミーティング作業】
今回の日韓交流実習で一番学びが多かったと感じるのは各打合わせ作業行程であった。
事前学習と実際の実習に分けて説明したいと思う。

・事前学習期間（5〜7月中旬）
会議場所：テレビ会議、Facebook、LINE
私の所属していた教育グループでは、「教育」という大きなテーマを選択したが為に、そこから教育の何に焦点を当てて調査していくかというテーマ決めの段階でまず壁に当たった。テーマ会議は両国の教育事情の実態調査と並行する形で進められ、主にFacebookを利用して行われたが頻度は少なかった。

・現地実習期間（7月25日〜31日）
会議場所：ミーティングタイム、部屋での打ち合わせ、インタビュー実習
発表に向けてスライドにまとめるため、正規のミーティングタイムでは主に資料内容や現地実習で日本の大学生にインタビューして得られた内容をまとめる作業を行い、日中や夕食後の自由時間ではよりくつろいだ形での話し合いが取れることも手伝って発表内容のすり合わせを進めていった。

1.2 私の学び
「教育」という大きなテーマを調査し、問題提起をし、更には解決策まで考えていくというのは非常に重たいものである。そして、文化や習慣のように明確な違いや問題が二国間の問題として既出しているわけではないというポイントにより、簡単に出来ない作業であるからこそ話し合いお互いの意見を交換していくことは非常に重要である。異なる文化の人間同士でミーティングすることの課題をとても実感した。

まず、テーマや内容の面である。先述したとおり、文化や習慣・思想など解り易い対比物ではないということが、両者の認識の誤解を生み出し理解を阻んでいた。教育、というテーマについて考えると、私たちは自分の一般概念に基づいて考えている。そして、教育の過程は一般概念に基づいて考察する。しかし、実際には日韓という国の違いが大きく、教育そのものに対する認識の違いが見られた。
例えば、テーマを設定する際に「学習成熟度」について調査したいと韓国側が言ってきたとき、私たち日本側の学生は「学習成熟度」とは具体的にどのような概念なのか？などと言語・認識的な面で悩み、グループで共有理解することが難しかった。そもそも日本では学習成熟度、というものが具体的にどのようなものをさせばいいか分からなかったり、どう測ればいいかという点が特に班員の頭を悩ませているようだった。
このようなことを事前学習の段階で議論するとともに、短いテレビ会議の時間ではなかなか難しい、Facebookでも文字だけの押収（しかも翻訳を通して）になってしまうために、
ミーティング作業が難航し、同じ用語を使用していても受取り方が異なるため、用語認識の相互確認というもののが異文化交流においては非常に大切だと学んだ。

また、実際に対面してスライドを作りあげていく中で特に感じたことだが、まとめ作業をする際に日本側と韓国側との間の乖離が多かったように思われる。

スライド自体を日本語で作成するため、作業を日本人の方が進めていった方が早いということは勿論だが、全体的に日本人が色々と発表内容の形式から何かまとめ作業をしていく、たまに韓国側に質問を投げかけて、最後に出来上がった原稿をチェックしてもらうというような流れだった。

そのため韓国側としては手持ち無沙汰だったのではないか、また発表内容が日本よりのものになってしまっていないかと少し不安である。

特に、発表内容に関する意見を日本と韓国と合同でじっくり話し合う機会が少なかったように思う。互いの意見交換は恐らく交換できたものの、質問や意見の応酬であると言っても意識的に置かざるを得ないために意見交換の流れのことを考えると、お互いの意見を交換することに対する若千の差異のようなものがあることを互いに感じた所提供之うちものを互いに感じたのであろう。また、日本側の学生はやはり、韓国側に比べて仲間内だけで話し合うことを好むため、韓国側に自ら掛け合って引き込んでいく力が足りなさそうに感じた。PPTを作成している間も作成作業をする日本側と手持ち無沙汰な韓国側、というような構図になっていってしまって、なかなか共同進行の難しさを感じていたので、今後の参考にしていきたい。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日韓交流実習で実際に対面して共同生活を行っていく中で一番日本と韓国との間の差異を感じたことに、美容に関する習慣や行動の違いがあった。

女子学生ということで、大学生にもなれば美容のためのケアや身だしなみに心を配ることは常識のようになっている。けれどもそれに対する行動が、日本と韓国の学生の間で大きく異なることがあったので述べていきたいと思う。

まず、朝晩のケアでは両国とも違いはとくに感じられなかった。韓国側の学生も日本の学生も入浴の後には肌の手入れをして美容に気を配る姿が見受けられた。使用しているものの種類はほぼ変わらず、日本の化粧品メーカーのものは韓国で割と愛用されているということになった。日本では韓国コスメブームがあり韓国の学生は韓国製の物を愛用しているだろう。(それからこれは余談だが、今回の合宿で特に分かったのが、日本には入浴文化が栄えているために、入浴による美容効果が多いだろう。)

違いがあったのは、街中での化粧行為である。日本では公共の場所での化粧直しはマナー違反としておりまるべく人目が少ないところで化粧をチェックし直す、というのが一般的である。

しかし韓国の学生は、電車の乗り換え時や電車内でもマイペースに身だしなみをチェックし直している姿を見かけた。恐らくこれは完全に習慣や意識の違いだと思われる。

2.2 私の学び
韓国の学生が、公共の場で日本人に比べて身だしなみを気にしていたところに、日本と
韓国との間では美容に関する意識の違いは私たちが思っている以上に大きいのではないかと感じた。

日本では電車内等、公共での化粧直しは、「みっともない」という意識がまず働く。日本でも電車内で化粧をしている場合にも居るが一般に好ましくない行為だとされているため数は少ない。なぜバッドマナーなのかという理由を説明しようとすると難しいが、化粧を他人の前でする、という行為自体は恥ずかしいことであるという意識が多くの日本人の共通認識としてある。歩行しながらの化粧直しに関しては、人とぶつかって他人の服を汚してしまったり、または自分が怪我をしてしまうというおそれもあるため日本では皆無に近い行為だ。

このようにデリケートな問題なので、なんとなく日本人の側である私からこの違いについて韓国学生に言うのは、マナー違反を注意しているような感じになってしまい申し訳ないし言いにくいという気持ちが働いてなかなか言えなかった。（と言って言うと、一度だけ駅を歩いている時に、「怪我するかもしれないから危ないよ～」と言ったあるくらいである）

日本では、韓国の美容に対する意識は非常に高いか、というのをよく聞くので、そのような行為と美容意識との関係が気になったが、上記のような理由で韓国の学生に直接話を聞くことはできなかったため理解は困難であったが、「何かを良くしよう」というプラスの行為が国が違えばマイナスに働いてしまう可能性もある、そんな一例を学ぶことが出来た。
日韓の違いと共通点

南奈那

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
日韓の教育の違いを明確にするため、お互いの教育について話し合う。まず、お互いのスタディーヒストリーをかき、比較し、アンケートなどでより明確にした。スタディーヒストリーにより、日韓の教育において大きく違っていた「受験制度」「英語教育」「大学の授業に対する意識」の 3 つについてとりあげた。

1.2 私の学び
受験については、韓国ではかなり早くから備えるようだが、高校以降のプロセスは日本との共通点もみられた。部活動をしている人がとても少ないことに驚いた。韓国側としては、もう少し部活動を活発にし、そこでの努力も受験に組み込めるようにしてほしいというこだ。そういった点では、日本の内申制度を真似ると、韓国が受験制度はよりよいものになるかもしれない。

英語教育については、韓国では早期教育・早期留学が盛んだという。日本でも早期教育が始まっているが、以前からこういった教育に取り組む韓国から学ぶべきことは多い。事実、韓国では「ギロギアッパ」と母語習得の妨げになるといった問題も英語の早期教育においてでてきている。韓国の英語教育を全体的に見てみると、英語教育を始めるのが早すぎていていけないということがわかる。そういった点を踏まえて日本は英語教育の内容・時期についてしっかりと吟味する必要がある。

大学の授業については、韓国では就職のために高い意識で取り組んでいるのに対し、日本では教員、生徒、会社のあいだで起こっている負のサイクルにより、意識が低くなり、学校の成績の重要度も低下している。しかし、韓国側は大学の授業の目的が就職のみになっていることに不満をもっているようだ。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
起床時間、恋愛事情。

2.2 私の学び
韓国の人たちはみんな起床時間がとても早いように感じた。1 週間過ごして班員のなかで寝坊をした人は一人もいなかった上に、むしろ日本人よりもいつも早く起きていた。大体みんな自分が起きる時間よりも 30 分は早く起きていたように感じる。時にはもっと寝ていたいのに物音がするということもあったが、そのおかげで自分も寝坊をすることはなかった。早く起きて何をしているのか見てみたところ、身だしなみに時間をかけている人が多いように思った。

恋愛事情について一番驚いたのは、兵役という日本にはない障壁だ。男性が兵役の際、交際をやめてしまうケースが多いという。日本にはない事情だったのでとても新鮮だった。兵役の際は、メールも文通のしかほとんどできず、電話もできないという。途中で休暇のため帰ってくることはあるが、ほんの数日のみのため、またすぐに戻ってしまうという。
しかし、兵役から戻った時には、多くの男性が筋肉をつけて帰ってくるので楽しみだとも話していた。文化の班の発表でも取り上げられていたが、「肉食系男子」が韓国で人気があるという背景にはこういった事情があるのかもしれない。
その他、あまり韓国との違いというのは感じられなかった。むしろ、似たような考え方、感性を持っているように感じた。日本人同士で話しているような感覚で韓国の友達と話していた。そのことがとても驚きであった。
日韓交流を終えて

山本梨紗

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私たちのグループは、ドラマや映画などのメディアで描かれる「家族関係」と「男女関係」に注目し、日韓でどのような違いがあるのか、またなぜ違うのかについて調査した。「家族関係」では嫁姑問題とマザコン・ママボーイを、「男女関係」では草食男子と肉食男子をそれぞれ扱った。事前学習でのやりとりや資料の共有は主にLineとfacebookで行い、現地実習では、日本の草食男子が描かれているとして『箱入り息子の恋』を池袋の映画館で鑑賞した。

1.2 私の学び
現地実習の移動中、「日本語では『○○する方がいい』よりも『○○した方がいい』という言い回しをよく使う。でも『○○しない方がいい』とは言っても、『○○しなかった方がいい』とは言わない。それはなぜか」と質問された。普段考えもしない内容で、頭を抱えると同時に、こちらのことを知ろうとしてくれていることがとても嬉しかった。同じようにこちらも韓国語について質問しようとしても、恥ずかしながらこちらは韓国語がほとんど話せない。セミナーでの使用言語は私たちの母国語である日本語で、言語の上で歩み寄ってもらっているのは事実だ。言語的に優位にたたせてもらってている私たちにできることは何だろう。そう考えた時私が思い出したのが、昨年のセミナーの発表中の韓国の生徒の様子だった。「全然頭に入ってこない」とつらそうにしていた子がいたのが心のしこたれとして残っていたのだ。私たちにとっては母国語でも、彼女たちにとっては第2外国語での発表で、その負担は半端なものではない。そこで、スライドや原稿に理解しづらい言葉遣い、単語や言い回しがなくなかどうか、ひとつひとつの確認し、同じ内容でも少しでも伝わりやすいように心を配るようにした。私たちのグループの発表内容は、他のグループに比べると意見の衝突の起きにくい題材だった。比較的早い段階で発表内容をまとめられたので、例えば、「執着」などのスライドの読みにくい言葉にはルビを振り、「景気低迷」より「不景気」の方がピンとくるということだったので書き直し、「嫁姑」という単語が初見では分かりにくいという指摘があれば口頭で韓国語の注釈を入れるなどの工夫をした。最終的には韓国語の注釈のある個所の発表担当ではなくなったのだが、発音のへたくそな私に合わせて、分かりやすいようゆっくりと発音してくれたり、根気よく練習に付き合ってくれたりした。昨年のセミナーではそこまで気を回す余裕がなかったので、個人的にステップアップできた部分かなと思っている。お互いがより理解し合うという気遣いがあったことが、無事発表を終えられたことにつながったのではないかと思う。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
「ちょっとしたこと、例えば扉を開けて待ってくれた時や人にぶつかってしまった時に、日本のみんなは、ありがとうごめんなですねと言うね」と同じ班の韓国人の人たちが指摘してくれた。特に意識していたわけではないのだが、確かに無意識的に口をついて出てきた。
2.2 私の学び

私は昨年もこの日韓セミナーに参加したが、昨年以上に「日本人だから」「韓国人だから」といった差は感じなかった。グループでの事前交流が昨年はGoogle+でテレビ会議形式が中心だったのに対して、今年の事前交流が主に文面のやりとりだったということや、今年は開催地が日本であり、生活様式が自文化だったことも大きな要因であったと思う。そういう意味では、昨年のセミナーの方が人との距離感の違いや食事などの生活様式、習慣の違いを強く感じた。今年はおそらく韓国人側の方たちのほうが「文化の違い」を感じたのではないか。2.1で挙げた日韓の違いも、私が感じたことというよりは韓国人の人たちが口にしてくれたおかげで「言われてみればそうだな」と認識したことだ。

私はむしろ、どういう人が韓国人で日本人なのか分からなくなった。一般的に言われるような「日本人と韓国人の違い」を感じるというよりは、あくまで個人の範囲内だと感じた。韓国人も控えめな人は控えめだったし（ただ、それが元の性格なのか、言語的な不自由さからくる控えめさのかは微妙なところです）、日本人でも積極的で押しの強い人は強い。特に私は「日本人っぽくない」「こういう（韓国的な）環境の方が合うんじゃないですか」と言われるので、そういう私の性格も関係しているかもしれない。もちろん生活様式はこちらに合わせてもらっているし、使用言語の上でハンディがないという前提がそう感じさせるかもしれない。

韓国の人文化習慣に入れば自分の中の「日本人」が浮き彫りになりやすかったが、今回はのような自文化の文化習慣の中では見えにくかった。少なくとも昨年の方が驚きは大きかったように思う。今回のセミナーの中での交流において感じたちょっとした差は、お互いの気遣いがあれば乗り越えられる程度の差であるように感じた。

セミナーを通じてとても良い友人を得ることができたので、昨年同様、これからも交流を続けていきたいと思う。
日韓交流セミナーを通して

池田亜柊

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
文化グループは「メディアから見る日韓の文化」を発表のテーマとした。日韓どちらのグループもメディアを通した大衆文化という馴染みやすいものから、文化の差異または共通点を見つけ相手を理解するヒントを見つけたことを目標とした。特に自分たちが女性であることを活かしてドラマや映画の中で表象される女性像の違いに目を向け、自分たちとその将来を見つめなおすきっかけとなることを目指した。

発表は大きく「家族・嫁姑関係」と「恋愛観」の項目に分け、私は「日本における嫁姑関係のイメージと現実とのギャップ」について担当した。

1.2 私の学び
「嫁姑とは対立しているものである」というイメージは確かに私の中にあったが、それと同時に実際の自分の家庭を鑑みると決してそのようなことはないので、自分の中には2つの相反する嫁姑観が共在していた。そしてこれは多くの日本人に言えることなのではなかいかと考えた。

調査してみると、発表した通り日本での嫁姑関係は悪くないようである。姑と同居している20代から50代の嫁にアンケートをとったところによると若い世代を中心に姑との関係は良好であると答えた人が過半数を超えていた。また思ったより姑に気を遣わなくても良かったと答えた人が90％を超えていた。これは「嫁姑関係は悪い」というイメージを持っていたが実際にはそうでもなかったというギャップがあることを意味している。メディアの影響による嫁姑関係に対するステレオタイプのイメージが先行していることや、時代の変化により女性の立場や年功序列の意識が変化していることが考えられる。

しかし嫁姑関係に悪いイメージを持っている人が多いにも関わらず実際にそのようなドラマや映画を探してみると、なかなか見つけることができなかった。確かに「渡る世間は鬼ばかり」という代表的かつ有名な作品はあるが、橋本壽賀子脚本以外のものをみつけるのは容易ではなかった。つまりドラマや映画はこのステレオタイプの形成にさほど関わっていないかもしれない。

では、どのようにこのステレオタイプが形成されたのだろうか。考えられるのは①韓国にもあるようなバラエティ番組の影響②視覚的なメディア以外（雑誌や新聞）の影響である。
②の新聞は、私も中日新聞の「ねぇねぇちょっと」という投稿欄で嫁姑についての愚痴をよく見かける。ただしこのような年齢層からの投稿で、このようなメディアからイメージが先行した若い世代で、実際とのギャップが引き起こされているのではないか。

2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
私たちのグループは事前の遠隔交流に主にFacebookとLINEも用いた。資料・原稿や参考サイトの共有にはFacebookを用い、テーマについての話し合いやその他の交流はLINEで行った。
LINEでの交流の際、韓国側から実際に会う前に名前と顔を一致させるためにLINE
のアイコンを顔写真にして名前を実名にする提案が再出された。その時私はアイコンも自身の写真ではなく名前も自分の名前が連想できないようなものであった。韓国側の提案が有用であることは容易に納得できるし、実際韓国側は全員そのようにしていた。しかし私には抵抗があり、結局名前は本名と同じものにしたがアイコンを変えることはなかった。日本人の他のメンバーはどのように変えたメンバーもいるし変えなかったメンバーもいる。また変えたメンバーも抵抗があったと言っているメンバーがいた。

2.2 私の学び
授業で事前に学習した通り、日本には「内と外」という意識があるために抵抗を感じるのではないかと考えた。LINEは電話番号からも簡単に検索できてしまう開けたツールなので、知られたくない相手、つまり外の人間からも自分が特定されてしまう可能性がある。

実習で実際に対面を共にする期間は限られているので、事前に発表内容だけでなく親密さを増しておくことも極めて重要なことであるし、ではなく是韓国側の提案を受け入れたほうが良かっただろうか。

この課題を考えると上で①韓国と日本のSNSに対する意識の違いと②韓国という日本とは異なる文化を持つ人間からの提案に対する対処の2つについて考える。

①に関しては上で述べた通り日本の「内と外」の意識が関係していると考えられる。では②に関してはどうであろうか。今回日本人側が韓国側からの提案に応えたことは確かである。日本人がLINEのアイコンに自分の顔写真を使うことに抵抗を感じることは明白であり、例えば交流のために良いと思いついたとしても提案することははばかられる。今回私が自身でこの提案を受け入れるために「韓国という自分とは違う文化の人がからの提案である」ということを利用した。そう考えなければ「配慮が足りない人だ」と思われかもしれないし、「情報教育を受けているのか」と疑問に思ったかもしれない。このようにお互いが異なる文化背景の中で育ってきたということを知っているか、意識できるかということは異文化間の交流において大切なことであると考える。

2つの文化があればその中に差異があることも、予想していたよりも似通っているということも、交流を進めれば進めるほど多く経験する。私が今まで様々な異文化交流を体験してきて感じることは、まず初めにその差異に目が行き、次に共通点に目が行く。世界のどこでも旅行に行ったとしても同じように見えたり、アジア圏であれば似た環境や歴史を持っているのでその共通点の多さに驚くことになる。さらにグローバル化が進み、インターネットの整備が進み、世界のどこでいても日本と同じような生活をすることができる、という感覚を持っている現代人は多いのではないか。しかし私は更にその先に進むと、また改めて差異を体験する考え方を掴んでいる。差異が目についたが思ったよりも共通点が多かった。しかし更に交流ははかると細かい差異が再び立ち現れてくる。という感覚である。文化背景が異なるということはやはり異なる感覚を持っているということである。今回の交流セミナーで、私たちは日本・韓国という近い国、また全員女性であり、大学生であり、立場はとても近い者同士が交流したと考えている。だからこそその共通点に目が行き、「こんなに似ているのだからもっと仲良く出来るのではないか」という安易な考えに陥ってしまう考え方がある。そう考えてしまうと、今回の韓国側の提案の受け取り方もネガティブなものに変わってしまった危険性がある。

私は普段から国際交流に興味があり、留学生や外国人と接する機会も多い。国際交流・異文化交流を続けるということは発見の連続である。新しい人と出会う度に私のの中に国や文化に対するイメージは再構築されて行く。それは楽しいだけではなく、知識や知見の広がりを意味する。今回の交流でも私はそういう面で成長したと思うし、これからもこうい
った交流を続けて行きたいと感じることができた。

日本経済新聞 http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK0500E_V00C13A2000000/ （2013年8月27日）
日韓の文化の違い

酒井佑果

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

人間関係における日本と韓国の文化の違いを、各国のメディアを通じて研究し、発表した。

1.2 私の学び

私たちの班は、日韓のドラマや映画で描かれる人間関係について比較研究した上で、文化の違いについて発表した。その中で学んだことは、例えばドラマや映画という架空の世界であっても、きっちり日本と韓国の文化の違いは反映されているということだ。例えば、日本人は、家族同士であろうが、恋人同士であろうが、韓国人と比べると、相手との距離が遠く、それに対して、韓国人は非常に人と人との距離が近い。これは、ドラマにおいても現実の世界においても言えることだ。

「どの韓国ドラマにも不可欠なシーンについて。それはすばり『家族愛』を描いた場面である。恋愛ものの、サスペンス、時代劇など、すべてのジャンルのドラマであっても、韓国ドラマでは親子や兄弟姉妹の強い絆が色濃く描かれている。比較的ドライな人間関係を好む日本人にとって、韓国人の濃厚すぎる家族愛は、時として理解しがたいものだが、韓国では当然のことであり、そうすることが道徳的に正しいとされている。」

「『口げんかのシーン』。どんなドラマを見ても、かならず一話に一回は出てくるお決まりのシーンである。些細なことが原因で激しく言い争う姿に、なんでそんなに怒るの？と首をかしげてしまう人も多いだろうが、思ったことや不満を言わずにはおられない韓国人的国民性を反映しているもので、これも韓国ドラマに必須のエッセンスといえよう。」

これらは、本田恵子という韓国ドラマの字幕翻訳を手がけている人物の韓国ドラマに対する分析である。同様のことを私たちが調べた発表の中でも感じた。例えば、日本の「マザコン」に関する認識についてまだ、マザコンは決して日本で好意的に捉えられていないが、韓国では親との距離が近いことは当然のこととされ、日本ではあまり人と人との距離が近いと照れくさかったり、恥ずかしいことだされたりする傾向があるが、韓国ではそのような強い絆で結ばれた親子関係はごく普通のことであるらしい。そのような文化の違いが、濃厚な家族関係が扱われることが多いという、韓国ドラマに表れている。また、「思ったことや不満を言わずにはおられない韓国人の国民性」も然りだ。私たちの発表の後に、ある一人の韓国人の学生が、「日本では『本音と建前』という文化があるから、不満があっても口に出さないため、ドラマで嫁姑の対立があまり描かれないのではないか」という感想を述べていたが、そのような点においても、日本古来の文化が表現されているのを感じた。次の「日韓の文化の違いと学び」の項目でも述べるが、いさかいを好まず、「和」を乱さないことを心がけ、比較的あらかじめに人間関係を作り日本人に対して、韓国人は自分の意見をはっきりと述べ、言い争いは当面前だが、その流れを通じて人と人との距離が近い人間関係を作り上げる。きっと韓国人は日本ドラマのような、激しい言い争いは登場せず、微妙で繊細な心の動きを描いたドラマでは物足りなく感じることもあるだろうし、日本人は韓国ドラマのような、激しい口調で勢いよく言い争うシーンが多いドラマに驚いてしまうだろう。このように、文化的な違いがよく反映されたドラマや映画は、単なる娯楽として

- 53 -
だけではなく、異文化を学ぶことのできる重要な手段でもあると感じた。

2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
日本人は周りの意見を尊重し、自分の意見を控えめに述べるのに対して、韓国人は自分の意見を積極的にはっきりと述べるという違いを感じた。

2.2 私の学び
私がこのセミナーを通じて感じたのは、日韓の自分の意見を主張する際の姿勢の違いだ。例えば、発表の準備をしている過程で、グループ内ではとことん話し合ったが、そのときにも韓国的学生はとても積極的に意見を述べていた。海外でのホームステイをした経験などから、自分の母語でない言語で自分の考えを表現することの難しさは十分知っていたが、文化グループの韓国的学生は、実習で見た映画に対する感想についても、パワーポイントのレイアウト一つをとっても、皆よりよい発表にするために一生懸命考え、例え片言の日本語であっても物怖じせずに自分の思ったことは率直に述べていて、その積極性に驚いた。一方で、これが「日本人の傾向」だとステレオタイプ的に述べることはできないが、日本人である私は自分の意見は控えめに述べ、相手の意見を尊重し、ひたすら話し合いが円滑に進むことばかりを最優先してしまう傾向があるということを、セミナー中常々感じていた。

このことから得た学びは、自分の意見を積極的に述べる事の大切さだ。今回同じグループだった韓国人達は、相手が自分と違う意見を述べたら、納得する結論が出るまでとことん議論していた。なんなく妥協して、相手の意見を通すという事が決していない。この姿勢は、大勢で共同の作業をする際にとても重要なことだと感じた。例え議論の中で衝突する事があっても、それを乗り越えていいものを作ろうとする、そのような態度が新鮮で、発表の準備のためのたくさんの話し合いも苦ではなかった。もちろん、日本のように和やかな空気のなかで良いものを作ろうと意見を述べ合うという姿勢も私は好きだ。しかし、韓国という、意見を主張する姿勢に関して日本と正反対の国の文化に触れて、お互いに思ったことを率直に述べ合う潔さも重要だと感じるようになった。文化の違いは優劣をつけうることはできないが、違う文化に触れても自分の文化を省みることができた、貴重な経験になった。

参考文献
舘野 智（2012）「韓国の暮らしと文化を知るための70章」明石書店
日韓セミナーを終えて

吉村茜

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
文化グループは「メディアから見る日韓文化研究」というタイトルで、日韓ドラマから見た家族文化と男女関係を題材として扱った。両トピックともに共通して、「女性」を軸に調査・考察を進めていった。家族文化では嫁姑問題を、男女関係では様々な現象の上から取り上げた。普段のお茶の間から流れる身近な存在であるメディアから、家族や男女関係といった女子大生の興味を持ちやすい素材であると考えたからである。

実習先は映画館を選び、『箱入り息子の恋』を鑑賞した。それまでのあいだに原宿の竹下通りや明治神宮を観光し、夜は隅田川花火大会へと繰り出した。実習期間中は送別会の出し物であった、K.A.R.AのPretty Girlダンス練習にも励んだ。

1.2 私の学び
私が担当したのは、男女関係についてである。日本人男性の草食化の原因をたどり、不景気による未来不確実性によるものが大きいという結論に至った。ということは、韓国の景気低迷がささやかれる現在、このような現象は日本のみならず将来の韓国にも当てはまるものであろう。また、草食系男子が韓国で人気がある理由は兵役が関係しているのではないか、という話が出た。韓国では、兵役を終えた男子こそが真の男性となると考えられているようだ。よって、兵役を培った肉体や国や家族を守る精神を持ち合わせた男性が女性から人気を集めるらしい。韓国特有の話題であるだけにとても興味深く聞いたものだった。ドラマに出演するキャスツの体型やキャラクターの性格、視聴者の期待も大切に含まれてはいる一方で、きちんとその時代の社会背景や実態を映し出しているということが Vertexとして日本に存在するとの元が韓国ドラマの女優を見ているとき、日韓のドラマのキャラクターの違いが気になることがある。今回、日韓ドラマを比較することで初めてその理由やコンテクストについて深く考えることができた。

実習中に原宿を訪れ、プリクラを撮ったときに韓国人の学生たちが現在使われている日本のプリクラの機種が数年後に韓国にもたらされていることを教えてくれた。日本がプリクラ先進国であることを実感した瞬間であった。また、ソウルでは花火大会が毎年1度しか開催されないと聞いた。日本では花火は夏の風物詩というイメージの下、津々浦々で花火大会が例年執り行われていることを思えば、少し不思議な感じがした。普段に着付けをしたり、和菓子を作ったりする機会には恵まれていなかったので、いかに自分が日本文化に触れていない事実を痛感して突きつけられた気がした。

「歌は国境を越える」とよく聞く。ダンスも然り。この言葉を身を以て体験することが出来た。年齢も違い、国籍も違う。にもかかわらず、ひとつの目標へ向かって努力するうちにコミュニケーションを自然にとることができた。プレゼンテーション準備の間にも曲が流れては勝手にからだが動きだす。日本人の間だけでなく、韓国人の間でも起こった現象である。うまくいかないもどかしさや、失敗と成功から起こる笑いもダンスを通して共有することができた。

- 55 -
2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
セミナー参加中に「日本人だから」「韓国人だから」といった理由で困難を感じる場面はなかった。習慣・言語行動がそれほど違うとも思わなかった。強いて挙げるのならば、日本と韓国では人付き合いにおいて、距離感のつめ方が違うという点であろう。最も印象に残っているのはため口（Banmal）である。日本人は「相手と仲良くなってきたなあ」と感じたら徐々に敬語からため口（に近いもの）へと変えていくようになる。決してすぐに変えられるものではなく、ゆっくりとである。ナチュラルなため口で話すには幾ばくか時間を要する。しかし、韓国では目上の方が「ため口にしようか」と言ってきたらその瞬間からため口の関係になるらしい。あくまで個人の経験に基づく見解ではあるが、日本では「ため口でいいよ」といくら言われたとしても、ため口で話すことはためらわれてしまいがちである。

2.2 私の学び
例えば、韓国人の一人がメロンパンを買ったとする。そのメロンパンがとても美味しかったので、彼女はグループの面々に分けた。グループのメンバーたちは、そのメロンパンをちぎるのではなく、そのままかじった。パンをちぎらないことがマナー違反だとか、どこではそういった話をするつもりはない。仲の良い友達同士ではちぎって食べ物をシェアすることがないかと思っていたので、ずいぶんと距離感が近いものだと感じた。しかし、距離感をつめつけることは1週間しかないセミナーをより親密に、楽しく過ごすことができるようにするためにはありがたかった。日本人にも距離感が近い人はいるので、このような体験が韓国人とだから起こったものだとは決して断言できるものではない。
日本人と韓国人も同じ人間である。人間である以上、多種多様な性格が存在する。マイペースな人、自己中心的な人、一匹狼のような人、常に自分を抑えて直接的な物言いを避ける人。何人だろうとすべての人がそのステレオタイプなイメージに当てはまるような性格をしているわけではない。普遍的なものは大多数の人には当てはまるということでしかない。もっとも韓国人に対する特定のイメージがなかったゆえに、自分の中でのイメージと実際に会った韓国人との間にギャップを感じることもなかった。いろいろな人がいるのが当たり前だからだ。国家間の関係は歴史認識等が複雑に絡んでいるために、そう簡単には満たることはできないかもしれない。しかし性格や趣味が合うのならば、または相手に適応できるのならば、個人的な付き合いは可能だ。このようなことを気付かせてくれる友人に出会うことができた点において、今セミナーはとても有意義なものだったと言える。
本でなく直接経験して感じた日本

金栄珠

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
報道のグループは「韓日報道の差」をテーマに4月から、遠隔交流とfacebook、kakao talkを通じてお互いの意見を交わし、セミナーで直接会って意見を総合する時間を持った。韓国側は韓国を代表する放送KBS9時のニュースと韓国の代表新聞、朝鮮日報とハンギョレを、日本側は朝日・毎日・読売を5.13〜5.31までの両国に対する報道の差（両国の代表放送の比較、橋下発言に対する繰り返しの程度と深層性の程度）を比較した。両国の報道の代表的な違いは、言論報道の性格の違いにある。つまり、韓国は「言論機関」、日本は「報道機関」なので、韓国マスコミは事実報道と論評が入るが、日本報道は論評が少なく、事実報道に焦点を置くという違いを持っている。資料を調査しながら、最近の韓国は過去に比べて日本に対する報道態度は客観的で穏健に変わっていることを知ることができた。しかし、まだ視聴者たちに日本に対する認識を否定的にとらえる報道だった。

韓国の代表放送KBSの5月13日のニュースを見ると「進撃の日本…右翼」という刺激的な発言をして日本視聴者の関心を集め、日本より比較的誇張された報道をしていることを知ることができた。また、慰安婦についての橋下の発言が、まるで日本全体を代表するように報道した。報道は媒材が伝達してあげる情報が即時的に解釈され、その事実そのままで受け入れられている特徴があるので、このような刺激的な報道は、視聴者にとって日本に対する否定的な認識をもたらすかも知れないと考えた。

1.2 私の学び
最近、国家を超えた交流が拡大、深化する中、韓日間でも社会文化交流が激増している。韓国と日本は他の国家間の関係とは異なり、歴史的に被害者と加害者の立場にあったため、両国の橋下の慰安婦発言に対する報道は違いを見せた。韓国言論は橋下の発言について「妄言」という単語をたくさん使用したが、これは被害者立場にあった韓国言論にとってはできる報道だと思った。物足りない点としては、最近韓国言論は感情よりは事実に基づいた報道が増加しているが、まだ刺激的で誇張された報道が多く残されていると考えた。また、橋下の発言に焦点を合わせて反復的に報じたりもした。橋下の発言だけに焦点を合わせては反復的に報じたかった。橋下の発言だけに焦点を合わせるのではなく、歴史的な問題、橋下の発言に対する日本市民たちの反応などさまざまな視点から報道が行われれば、視聴者たちが日本についてもっと客観的で自発的に見られると考えられる。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
今回のセミナーを通じて感じた日本は韓国より相対的に個人を重視していて、このような差が人間の関係においても影響を与える可能性があると考えた。日本人の友達と一緒に生活してきた宿所ではベッドにカーテンがあって個人の空間を作れるようになっていた。この宿所で一緒に生活する間、日本人の友達は折々、カーテンを弾きながら個人の空間を作って休憩を取った。もちろん、共にセミナーの意見をかわしたり、遊ぶ時はカーテンを
あけて一緒だったが、友達とベッドで寝るなどほとんどの時間を一緒に遊ぶ韓国の文化とは相違があって、不思議で驚いた。また、セミナー生活と東京の自由旅行をしながら、日本人たちは食事をする時、自分が食べる量だけ取って食べたり食堂でも一人で食べる人をよく見ることができ、「やはり韓国よりは個人的な時間を持つことに慣れていた」と思った。こうした日本の個人を重視する文化は人の間の関係にも影響を及ぼすと思った。今回のセミナーで新しく知った事実は日本人たちは友達とスキンシップをしないということだった。これに対して普通の韓国人たちは家族、友達、恋人などとスキンシップを取るのが自然な行動だ。日本人たちはスキンシップをする時、相手の気持ちを考えるために韓国よりはスキンシップが少ないのではないかと思った。個人を重視して、相手に対する配慮に慣れた日本人たちは韓国人の事に対する態度は差があるため、韓日の人間関係にも差があると思う。

2.2 私の学び
セミナーを通じて日本は韓国より個人を重視して、対人関係において差を見せたと思えた。しかし、文化においてどんな文化が良いか悪いのかを区別することは意味がないと思う。セミナーの準備過程を思い返せばFacebookでも会って意見をかわす時にも最大限に相手の気持ちを悪くしないように言葉を本当にきれいにするように考えた。さらに発表が終わった後の質問をする時、その発表のどんな点がいいのか言ったり後に質問するスキンシップの友達が本当に印象的だった。そして私も韓国に帰ったら友達、家族などの人に対することがあったから、相手の気持ちを察して気配りする人になりたいと思うようになった。また、お互いの文化から学ぶ点があれば習ってもっと良い方向に進むことがいいと思った。
協調性と責任感

徐多寅

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
1.2 私の学び

今回日本の学生たちと一緒にグループ活動をして一番初めに学んだことは責任感だった。日本の友達は韓国の友達よりも責任感が強かったようだった。グループ活動は他の人と一緒に一つの作業をするので、協調性が重要であると考えた。しかし、日本の友達はそれよりも自分が引き受けたことを完璧にしようとする責任感が強く感じられた。日本の友達を見て、一緒に頑張るのも協調性だが、それぞれ分担した部分を責任感を持って完璧にして他のチーム員に迷惑にならないようにするのも協調性の一つだと思うようになった。

私たちのチームが担当したテーマは“報道”であった。橋下の発言という一つの事件について韓国と日本の報道の違いを調べて公営放送局であるKBSとNHKの違いや共通点を調べて比較した。グループの中でまた二つのチームに分かれ、橋下の発言について日韓報道を比較したチームと公営放送局を比較するチームに分かれた。PPTの作業もそれぞれ調査したチームが作成して貼り付けるようにした。最後にはPPTを合わせて発表の準備をしたが、その時に発表の分量が多いメンバーが少ないメンバーに発表の量をあげたりした。また実習地として靖国神社を訪問したが、それについて感じた点と訪問前に知っていった部分との違いも比較して発表をしました。

日本の友達は小さな決定をする際にもいつもチームメンバーと相談して決定した。多くの対話を通じて決定するのが基本だった。PPTを作成する前に会議を通じてメンバーの意見や感じたことを集めて全体的に発表の方向性を決定した。韓国ではリーダーを決めてリーダーは主体的にリードして、メンバーは同意するというグループ活動が多いのに対し、日本の友達はチームメンバーの意見を集めて決定する方式であった。そのために進行速度はやや遅かったが、皆が満足する結果をもたらすことが出来たので、日本の友達から私が知っていた協調性とちょっと違う協調性を学ぶことが出来た。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
2.2 私の学び

今回の交流を通じて感じたことは、思ったより韓国人と日本人の行動に大きな差がないということだった。思ったより日本人の異なる文化は大きく目立たず、例えば、食堂に行ったら他のメンバーの食べ物が全て出てくるまで食べず待っていて皆の料理が全部出てから、その時に一緒に食べ始めるなど、韓国よりも他人と一緒に行動する感じを受けた。しかし、また違うことは私のものと他人のものを区別することであった。そのような面で韓国と日本の普段の習慣に違いがあることを発見した。

例えば、私は普段食べ物を少なく食べ方なので、1人分を頼んでも常に残るため、お腹があまりすいていない友達と一緒に1人分の食べ物を注文して分けて食べる習慣があった。あと、子供の頃から他人と一緒にするのを嫌がっていたので、私は使っているスプーンや箸で友達に食べ物を食べさせたり、親友のものを一緒に使うように他人と私を区別しない生活に慣れていた。しかし、日本の友達は私と正反対の習慣を持っていた。食堂で
は当然一人分の食べ物を頼み、もし物を借りる時があれば頼んだり注意しながら聞いて借りたりした。このような些細な生活習慣の違いを感じたが、全体的に別々な行動は感じられなかった。

最初は平気に関わらず食べたり物を使ったりする私たちを見てどんな考えをするか、またはどのように受け入れて上げるかと心配した。しかしすぐに日本の友達が大丈夫だ、と、あまり気にしなくてもいい、と言ってくれて安心した。もし親友と食べ物を分けて食べる時は了解を求めたり小さな皿に減らして食べたりして日本の友達が気にしないようにした。日本の友達も私たちが気にしないように自分たちも食べてもいいと言ってくれてありがたかった。また、物を借りたり食べ物を一口食べても見る時、慎重に了解を求めることを見て私のことを守るためではなく、他人のことを守ってくれるためのものであることが分かった。大きく感じられる差はなかったが、些細な差を合わせながら日本の友達ともっと深い友情を作ることができ、有益な交流になったと思う。
意味のあるセミナーを終えてから

白京沃

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

1.2 私の学び

今回のセミナー活動の中で発表を準備する過程が私にとって一番大きな教えになりました。

発表前日未明までお茶の水女子大学の学生たちと一緒に発表する内容を考えて、P P Tを作りました。夜遅くまで、寮で事前に調査してきた資料を踏まえてP P Tの発表準備をしました。発表準備をしながら、日本人の友達にたくさんのことを学ぶことができました。その一つは責任感です。韓国で数人がチームになって、発表準備をするときに、P P Tを作る人、台本を書く人、発表する人と役割を分けることが一般的です。しかし、お茶の水女子大学の学生たちは自分が発表する部分のP P Tを自分が作って自分が発表しました。このように自分が作ったP P Tを発表したら内容について正確な理解を通じて発表することができます。こんな風に自分の受け持った部分をしっかり準備して発表するお茶の水女子大学の学生たちを見ながら責任感を学びました。

責任感だけでなく、協同心も学ぶことができました。お茶の水女子大学の学生たちと同徳女子大学の学生たちは自分の担当した部分を準備しながらの中で、絶えずお互いの意見を聞いて些細なことにさえ全部一緒に話を交わしながら発表準備をしました。また、お茶の水女子大学の学生たちは韓国人留学生らが台本の練習をするときに分からない単語とか見分けがつかないイントネーションがあれば親切に教えていました。韓国人の学生たちはお茶の水女子大学で調査してきた資料を日本人の友達に親切に教えていました。このような互いに足りない部分を聞きながら協同心を育てることができました。

2. 日韓の文化の違いと学び

2.1 日韓の文化の違い

2.2 私の学び

日本人の友達と会話しながら、韓国と日本文化の差を感じることができました。韓国では友達と話をする時、お互いの目を見ながら話します。それは互いの話を聞いているという表示です。しかし、日本人の友達は目を合わせないで話をしていました。最初は日本人の友達たちと目が合わなくて、私の話をあまり聞いてくれないのかと考えました。その後で目を合わさず日本人の友達が会話をする時、なぜ目を合わさないのかと聞いてみました。日本人の友達は、恥ずかしいので、日本人たちは会話をする時お互いの目を合わせないと言えました。日本人の友達は会話をする時、相手が目を正面から見たら恥ずかしいと思っていると言いました。それでその後から、わたしも日本人友達と会話をする時はなるべく目を正面から見つめず会話をしようと努力しました。相手の目を見ないで話をしたら相手によって聞いているという信頼を送るために私も知らずに相槌を打ち始めました。相槌を打たれるとその間気になっていた疑問が解けました。日本のドラマや映画を見るとき、俳優たちは相手の言葉が終わる前に「はい」とか「そうです」を言うのを見てなぜあんなに相手の言葉を途中で止めるのではないかと感じていました。しかし、日本人の友達と会話をしながら、相槌は相手の言葉を遮る不要な言
葉なのではなく相手の言葉を聞いているという信号だったことを理解するようになりましました。

このような経験を通じて、他の文化を理解するにおいて最も重要なのは、易地思之（立場の態度）だということがわかりました。はじめは日本人がずっと相槌をしてくれるのを見ておかしいと思ったが、直接日本人と話して、日本人の立場になってみたら彼らの行動が理解できるようになりました。

これからは日本語科の学生として、日本の文化を眺めるときは私の立場ではなく、相手の立場で眺めなければと思いました。
思いやりの精神

任孝靜

１．グループ活動報告と学び
１．１ 活動内容
私たち報道グループは、遠隔交流を通じて日本の報道と韓国国の報道の差について扱うことにしました。私たちは「橋下発言」というテーマを中心に両国の報道の差について新聞、テレビ番組をもとに資料を集めました。そして、facebook とカカオトークを通じてお互いの資料調査の状況と内容を共有し、徐々にセミナーの形を整えることができました。

私達は、韓日間でも最近は社会文化の交流が急増しているのに韓国と日本のように加害者と被害者であった国は、接触の频度の高さにも関わらずなお誤解が深くなり、偏見が固定化されているのではないかと思って、これに対し韓日の報道の特徴と違いを比較してどのような影響を与えているのか調査しようとしました。

１．２ 私の学び
日本の友達に会う前に私達は十分な資料調査ができませんでした。本格的にセミナーが始まってからずっとそれが心配でした。日本の友達もきっと心配になるはずなのに、心配している私達に大丈夫だと言ってくれて安心させてくれました。日本の友達の思いやりのおかげで楽な気持ちで発表を準備することができました。

セミナーの間、みんな大変で具合が悪いときもあると思いますし、それに引率する立場である日本の友達はきっと私達より大変だったはずなのに、少しも表に出さないで親切にしてってくれて本当に驚きました。彼女達の大人さを習いたいと思いました。

また、発表の準備をする時、ただ調査するだけじゃなくてみんなの意見をきいてブレイブスターミニングのように話し合うところがいいと思いました。韓国ではあまりそういう経験ができなかったので今回のセミナーでは、これが本物のグループ活動なのだと思いました。

２．日韓の文化の違いと学び
２．１ 日韓の文化の違い
私は昔から本音と建前、迷惑など、日本人の性格に対する色々な先入観がありました。彼らは私達より心を隠すのが得意で、個人主義的だと思っていました。しかし直接会ってみると、みんな親しみやすくてよく笑ってくれる友達でした。でもやっぱり自分の感情を表に出さないところが違うとおもういました。たとえば、私達は宿泊でマピアという韓国のゲームをしました。そのゲームは、ゲームに参加している参加者が市民とマピアになり、お互いを疑ってマピアを探すものです。そのゲームを日本の友達と一緒にしましたが、なぜか日本の友達はずっと困っているようで、韓国の友達は嫌に思いました。なぜ誰も疑わないのだろうと思っていろいろして、猫をかぶっているのかなと思いました。よく考えてみたら、日本人にとってなんの理由もなく相手を疑って、その意見を表に出すのはちょっと苦手なことだったのです。私が当たり前だと思っていたことが彼女達には難しいことだったのです。それに気づいた瞬間、少し恥ずかしくなりました。本や授業で習ったくらいで彼らを全部知っていると自慢していたのです。私はもっと大事なことを忘れていいました。それは文化相対主義のことでした。
2.2 私の学び

マピアゲームの時に感じたのは違う国で、違う環境で、違う言葉を使う私達は当然、文化も違うことでした。最初は彼女達を理解できなかったけど、一緒に生活してみると、これは彼女達の文化だと思いました。彼女達もきっと私達の行動が理解できなかったかもしれません。でも彼女達は私達を韓国の社会の立場で理解しようと努めていました。そのような彼女達の注意深さとか、思いやりを見習おうと思いました。彼女たちの言葉と行動は彼女達の文化の一部で、文化の独特な環境と歴史的・社会的状況で理解するべきだと思います。つまり、人類が住んでいる社会は社会ごとに特殊な文化を持っており、様々な文化を正しく理解するためには、その社会の立場で理解しようとする態度が必要だということを習うことができました。今回のお茶の水女子大学の日本の友達との思い出は大事な経験で、私に色々なことを教えてくれました。これからも外国に行ったり、外国人にあったら文化相対主義の心持ちでいい友達を作ってみたいと思います。そしていつか、友達になったお茶の水女子大学のみなさんともっと仲良くなって、思いやりのマピアゲームをしてみたいと。
セミナーで学んだこと

徐賢珠

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
1.2 私の学び

事前に行われた韓日合同発表においてのグループ活動は、最初は順調に行かなかったです。皆のスケジュールを合わせたりすることがなかなか難しかったし、「報道」という範囲の広いテーマだったので、どの部分をどうみたら良いのか判断できないところも少しありました。しかし、日本現地でお茶大の学生さんたちに会ってからは、皆意欲的になりました。ディスカッションを通じ、韓国の皆も自分の主張したいことをちゃんと日本語で伝えられていた。これは、「交流」という部分において大きな意味を持つと思いました。お茶大の学生さんたちの熱意をみて同徳の皆も勇気付けられ、頑張ることができたと思います。私たちはこの先ずっとこの経験を生かし、日本語の学習を頑張るでしょう。

私はこの報道のグループ活動をしながら、韓国と日本のそれぞれの新聞の特徴や傾向など言論報道のコミュニケーションのギャップを考察することができました。また、マスメディアの影響力がどれだけ大きいのか分かりました。私は「マスメディアの影響力」が印象的だったのでこれをテーマとして取り上げたいと思います。私たち報道班は、報道において一つの手段である新聞の主な例として「橋下の慰安部に関する発言」についてインターネットや新聞を通して資料を集めたりしました。また「靖国神社」に対するお茶側と同徳側のそれぞれのイメージをお互いに話し合いました。

前で述べたように私たちの班は靖国神社についてのイメージについて話し合ったのですが、靖国神社に対する両側のイメージが大分違ったので驚きました。韓国側は否定的で、悪いイメージがほとんどです。しかし、日本側はネガティブなイメージは特になく、日本にあるお寺の一つ、ただのお寺といったぐらいでした。韓国側の皆が靖国神社に対して悪い印象ばかりもっているのはきっとマスメディアと関係があるのだと思います。問題として取り上げられる部分は、靖国神社は悪いというイメージをもっとことではなく、悪いイメージをもっときっかけなど、悪いから悪い理由がちゃんとあるはずなのに、悪い理由を説明できない部分がいけないのだろうと思います。また、何かに対して批評する記事などを読むとき、そのまま受け入れて誤解することのないように、それは妥当な内容で、説得力のあることを述べているかを重視すべきだと思いました。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
2.2 私の学び

数年、日本で滞在していたこともあり、私の頭の中ではいつも「日本人＝親切」という方式が成立されています。しかし、これからは「リアクション」をプラスアルファしたいと思いました。報道班の皆だけでなく、お茶大の皆がすごくリアクションが良いと感じました。例えば、日本の皆にちょっとした韓国と日本の違いを教えてあげると日本の皆は考える側を元気付けるほどすっぐ良いリアクションをしてくれて一緒に話していると楽しくなります。個人差はあると思いますが、全体的にそうだということです。

私は時々時間にルーズなのですが、このセミナーで特にそうだったと思います。日本に
は「5分前行動」という言葉があるように、お茶の皆も時間に対してきっちりなひとでした。個人的な意見ですが、「5分」という時間に対して普通のときはそれほど危機感を感じることはありません。受験の日など緊張感が溢れそうなとき、要するために迫られたときに危機感を感じるものではないかと思います。しかし、このセミナーを通じて、改めて「5分前行動の大切さを知りました。集団活動、つまり組織的に行動するときは、短いけれど決して短くない「5分」をどう使うかで状況が変わることも十分にあり得ることが分かりました。

他にもこういうことがありました。班別行動のとき、次の予定が知りたくてお茶大の友達に「このあとは、何するんだっけ。」と聞くと、「スケジュール表あるよ。見る?」「うんうん。見てくれる?」「韓国の皆はスケジュール表持ってないの?」「うん。持ってないよ。」「えー、じゃあ今までどうしてたの?」「えっと…ふつうにしてました。」「うそー！あり得ない！」とお茶の友達をびっくりさせたことがありました。私たちとしてはそれほどびっくりすることのないことでしたので、その友達は結構びっくりした様子でした。多分その友達は私たちがスケジュール表を持っていないことにびっくりしたと言いうより次の予定がどうなのか知らないまま行動していたことにびっくりしたのだろうと思います。小さいことながらこれも一つの文化の違いではないかと思います。

私はこのセミナーを通じて日本人の言語行動は、多様性を持っていると感じました。慎むときは慎み、はっきりするときははっきりします。こういった部分を見習いたいと思いました。日々直すべきところを意識し、行動する練習の必要性を感じます。

韓国と日本、相互理解を深めるためには、お互いの文化を知ることが大事だと思います。またその文化をちゃんと知るためにはやはり直接接触するのが一番でしょう。機会があれば、また日本へ行って色々と学びたいです。
10 日間の熱いハーモニー

鄭至恩

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容

私たち共生グループは、日韓の共生が行われるため、大学生である私たちが何をすべきかどうかを調べるために多くの活動を実施した。活動に先立ってテーマを決定するためにFacebookを介して会議を進行した。韓国と日本は地理的に近く、経済的依存度も高いため、共生の必要性があるが、お互いに対する反感が強く共生が難しいという点から出発した。

すなわち、共生の必要性は認識しているが、歴史的な理由などでは認識されていないことに注目した。大学生である私たちから共生の取り組みが開始されると考えてテーマを決定するに至った。

まず、両国の青少年を対象にアンケート調査を実施し、相手国に対する認識を調査した。また、韓国側では在韓日本大使館所属日韓文化院に訪問した。文化を伝播することのイメージを改善するのに大きな影響を及ぼすと判断したが、日本政府次元でどのような努力をしているか調べるためだった。

日本では、韓国、日本側と一緒に在日韓国人団体の代表に会ってインタビューする機会があった。在日韓国人は日本が韓国にどのようなイメージを持っているか知ることができると判断したからである。

1.2 私の学び

日韓文化院副院長とのインタビューで、日韓の経済交流の状況を客観的に見ることができた。両国の輸出入に大きな比重を占めており、相手国を訪問する両国民のことも評価された。日韓関係が経済的にはすでに離れないほどの結束を持っているということに改めて気づいた。両国民の敵対的な感情は別に、経済的にはすでに深い共生が行われていた。

また、韓国の学生が日本をどのように考えるかについて実施したアンケート調査で、日本の友達がいるほど、日本に対する認識が良くなっていることを発見することができた。そして、韓国人は日本に対する認識が全般的に良くない一方、日本人は韓国人より、より積極的に韓国を認識していることもわかった。

また、ニュースでしか見たことのない在日韓国人に際に会って、在日韓国人が成長して経験する差別と苦労を知った。自分が選択したことには問題がないにもかかわらず、政治的な問題の犠牲になって成長期にアイデンティティの混乱を経験したという点で残念だった。在韓日本人のインタビューは実施しなかったが、在日韓国人と大差ないだろうと思う。私も努力して「韓国人」「日本人」の偏見を取り除こうとするきっかけとなった。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い

韓国にもお風呂文化があるが、日本とは違うということを感じた。私たちが泊まったユースホステルにもバスタブがあることが不思議だった。韓国ならたぶんシャワー施設しかなかったと思う。日本の友達がよく言っていた言葉の一つが「お風呂に入りたい」だった。韓国だったら「シャワーしたい」としたのだ。最初は「お風呂」というのが実際に浴槽に入りたいのかは、ただシャワーをしたいという意味なのか判断が難しかった。なぜな
ら、韓国では風呂に入ったり、風呂に行くのが毎日の日常的な習慣ではないからである。
また、日本の友達は韓国人である私たちよりも団体行動に長けていたようだった。ご飯を食べ終わった後、食器を整理するとかテーブルを拭くといったことは、韓国で私が育つ中で経験した団体行動とは異なるものだった。それだけではなく、一連の予定の時間を少しでも超えた場合、非常に困っており、なんかそれを守ろうとするところが私たちとは少し違った。韓国でもだいたい約束の時間を守るが、少し遅れていることは理解している場合が多いからである。
また、夜の文化にも違いがあると感じた。私をはじめ韓国人の友人は、夜にホテルの外でお酒を飲んだり、アイスクリームを買って食べるなど、何か夜に感じることができる自由さを感じていた。しかし、日本の友達はそのような経験が少ないようだった。私の国では、夜になっても街が明るい方で遅くまでやっているレストランが多いのに、日本はそれに比べて少ないようだった。

2.2 私の学び
まず、韓国ではあまり浴槽に入らずシャワーのみであったため、トイレに懐疑的だった。しかし、韓国よりひどい湿度の中で生活してみると浴槽から吹き出す熱気がいっぱいのお風呂場で洗うことが初めて理解がされた。全身の疲労が解けるほど気持ちよかったです。日韓の入浴文化の違いが湿度の違いに由来するものと考えるとおもしろかった。日本文化の授業でも学んだが、自然環境が人間の生活の様子を変えるのに多くの影響を及ぼすということを改めて実感するきっかけとなった。
また、私の国に比べて厳密に約束を守り、自然に後片付けをして日本の友達に被害を与えないために、日本の友達と同じようにしようと努力した。相手のマナーの問題であるため、日本だけでなく韓国にも戻っても厳密に守らなければならないと考えるようになった。
また、韓国のよりはお店を早く閉めるなどという、日本の環境に適応した私たちは、夜遅く外に出て買って食べるのはあきらめた。代わりにコンビニのように夜遅くまで営業しているお店で食べ物を宿泊施設の中で食べることを計画しなおした。その際には韓国人同士ではなく、日本の友達も一緒にだった。夜遅くまでおしゃべりをし、おいしくおやつを食べた。韓国の夜の文化を日本で成功的に適用したと思う。
セミナー

南潤映

2年生になって1年生の時には参加しなかった韓日交流セミナーに申請して出席するようになった。私は「共生」をテーマにしたグループに入ったら。歴史、教育、報道とは異なり、「共生」というあまり考えたことがなかった不慣れなテーマに、当初はテーマを誤って選択してしまったかという気もした。いつも韓日関係は良くないと考えて来たし、あまり考えてみないテーマだったからだ。難しいと思った。しかし、セミナーの準備をしてから、在日韓国人に会って話を聞いてみることにした。アンケート調査をして、日本に行ってからは、在日韓国人たちが、歴史、教育、報道とは異なり、「共生」というテーマに不慣れなテーマに、初めはテーマを誤って選択してしまったのかと考えた。しかし、日本に行って日本の学生たちと過ごす間、私は何の悪感情とか何かぎすぎぎすぎとした感じがまったくしなかった。学生は皆、とても優しく、親切で、最初はぎこちなかったけれど、後には宿舎で夜におしゃべりするのが一番楽しいと感じられるほどのいい子たちだと思われた。私が韓国で聞いて感じた在日韓国人に関する事実の中に一致するものはほとんどなかった。ただ違う言葉を使う学生たちであるというだけだった。そうだったから、韓国人が共生をできない理由は、このような交流をあまりせず、見ていないうちではないだろうか。今回のセミナーで「共生」組に入って、本当の共生を直接体験した。それから、やはり社会認識が本当に多分の影響を与えたということを学んだ。私も日本語科にまだ入っていなかった時は日本人と韓国人は本当に合わないものだと思ったからである。

日本の学生たちはも感謝を受けた。私たちとたくさん遊んでいても、セミナーを準備する時は、誰よりも集中し、在日韓国人に会った時には積極的に質問をして思いを語った。また、多くの日本の学生たちは社会を見て、代表で言うことに対して、人の前に立つことに抵抗がなかった。発表や視線を受け取って、あわてて言葉もでてこない私には非常に新鮮な光景だった。また、1年生の時に大きな違和感にインターンをして留学まで準備する学生を見て、一年生の時に同じような生活を送り、見ていないうちではないだろうか。今回のセミナーで「共生」組に入って、本当の共生を直接体験した。それから、やはり社会認識が本当に多分の影響を与えたということを学んだ。私も日本語科にまだ入っていなかった時は日本人と韓国人は本当に合わないものだと思っていたからである。

日本に来るとき、日本人と考え方は行動があまり違ったりどうしようと思っていた。しかし、たったの一週間という期間のせいか、同じような文化であったのかわからないが、それでも大きな差を感じなかった。それでも韓国との違いを挙げることを挙げるならば、日本人たちは性別に対する役割、アイデンティティのようなものが韓国よりももっと強いようであった。言語において、女性と男性の言語において、女性と男性の言語に違いがあるのは両国同じであるが、日本人は韓国人よりももっと女らしかった。性格が大体落ち着いている人は、服やアクセサリーやレースなど、女性性が際立つ服が多かった。また、何かを提案するというよりは、他の人たちが決定するのを待ったりするときもあったが、他の人を配慮する思考深い行動だと考えられるものがあったりして、イライラすることもあった。もちろん、日本人の中でもおてんばのような性格や強い性格の人もいるし、韓国人の中にも女性らしい性格の人がいるかもしれないが、ほとんどの場合が、
韓国人より日本人が、さらに女性らしかった。

他の人を考えてながら行動して物事を言う性格も女性的な特性であり、日本人たちは特に繊細だ。このような点に初めはイライラした。しかし、相手がとても親切で、準備の際に「大丈夫？」と確認しながら心配してくる。だから日本の学生達も私たちがぎこちなくて、考えに壁があるという印象を与えたりした。変に負担であって親しくなることができるだろうかという心配もたくさんした。しかし仲良くなればという考えで私の本来の性格どおりに接したから、それがそのままその子たちの性格ということを知り、親密になった。このように心配していたが、いつも楽しく日本人たちと過ごす私を見て心配したことなど忘れて、いろんなことを学ぶことが出来た。まず、韓国では何人かの本当にやさしい子たちを除いて荒々しい性格があるが、日本人は異なるということを学んだ。私も知らずに日本人を韓国人の基準で考えて判断した。二つ目には私は人と近くなるには自分を飾らないで、ありのままに見せなければならないということを改めて学んだ。私が相手を楽にしてこそ、相手も私が楽に思ってくれる。先に心を開かなければならいない。今考えて見れば、最初は私が先に壁を作っていたようだ。社交性がないため、心配したが今回の機会を通じて友達を作ることについても学んだ。最後に日本人の配慮を学んだ。セミナー期間に一度冗談と言ってみたが、日本人たちの考えにはそれがちょっと友達に言うにはひどいことと思ったようで、びっくりしたことがある。その時は私が日本の学生たちの反応にびっくりしたが、後で考えてみたら自分が冗談で言った言葉でも相手には冗談ではなく、心の傷になってしまうこともあるということを学んだ。

日本の学生たちと一緒に過ごした一週間は日韓文化の違いについて多くのことを把握するにはちょっと短かった。しかし私が一週間日本で学んだように、日本の子たちも韓国の学生たちから良いものを学んでいたらしいと思う。
近さで感じる、嬉しさ

趙桂賢

今回、事前会議を含めた日本での合宿を通じて積極的な態度についてよく見るようになりました。日本人はグループ活動をする際に与えられたことをすることだけに留まっているだけでなく、積極的に参加しないという話を聞いていました。しかし、今回の合宿を通じながら日本の友達の積極的な姿を学びました。すべての活動に積極的に取り組んで文句を言ったこともありませんでした。初めて代々木公園で合宿する際に日程がきついと感じましたが、日本の友達の積極的な姿を学びました。すべての活動に積極的に取り組んで文句を言ったこともありませんでした。暑い天気にいっせい疲れ、宿舎でゆっくり休みたいということだけ考えていました。しかし、日本の友達は地下鉄に慣れていない私たちを最初からうまく誘導しながらいつも笑顔で話してくれました。もし日本の友達が韓国に来て様々な活動をしている状況だったら私もうからと考えてみました。多分私なら友達にそんなに笑顔で親切に案内してあげられなかったと思います。また、草津合宿所でレクリエーションを準備する時も日本の友たちと楽しく準備をしました。初め韩国で準備をするときには何をするか困りたくありませんでした。レクリエーションに費やす時間があまり残っていない状況で急いで用意したダンスだったが、友達が笑いながらよく教えてくれて楽しく準備できました。また違ったグループの友達も一緒に出ようという言葉に積極的になってくれたおかげで私が思う通りでした。

一度くらいは「やりたくない」と愚痴をこぼすこともあり得ると考えましたが、すべての活動が大変だったにもかかわらず、真剣で積極的な態度で臨む学生たちを見ながらたくさん学んだと思います。したくないこともしなければならないことが多いですが、グループで活動する様子を見ていて文句を言ってやるよう積極的に参加した方がもっと楽しい思いを作ることができると思います。日本の友達も私もこのように不満が多くて腹を立てながら活動していたことに私の記憶の中では日本人の友達は今のように良い印象で残っていなかったかもしれません。公式的な活動はもちろん、宿舎の中でも夜遅くまで話を交わすことにも疲れたのに私たちの言葉に耳を傾けてくれて笑ってくれて本当にありがとうございました。

実際、韓日間の違いを大きく感じることは無かったです。言語がうまく通じなくて多くを話せなかったせいか、日本人たちがどのような価値観を持っているのか授業時間に関いたことがあるからか生活する時には気づきませんでした。しかし、韓国に帰って来て考えたこともしなかったが、少し違う韓国と違いがあったのを分からでしょうか。まず、合宿でご飯を食べる時、最も大きく感じたようです。韓国では食べたいだけ食べ物を盛っても食べたくないなら食べ物を残すことが私たちでもよくあります。ところが日本の友達は毎回、一度も残さず全部食べました。代々木公園でも、草津でもまずいという不満を一度も口にしないで全部きれいに食べました。個人差には思わずけれど、韓国ではほとんど口に合わなければ残すことが一般的なので不思議でした。食べ物を適量を持ってきて、全部食べるのが習慣となっているようでした。韓国でも食べ物を残さず食べなさいと使いますが、実践する人は多くありません。食べたくない食べ物を無理に食べたらどうかしいとは思ってはいませんが、食べても食べ物だけ適量を持ってきて、あまり残さない方がよく見えました。

- 71 -
もう一つの驚くべきことは他人の物にやらないことでした。日本人たちは他の人が失ってしまった物を拾って行くことはほとんどなく、その場にそのまま置いて持ち主がみつけるようにするという事実を聞いたことがあります。話だけ聞いただけでなく、温泉に行った時、実際に見ることができました。温泉に入る前に貴重品を入れておく 100 円のロッカーがありました。すべてのロッカーに貴重品を入れておいた後、温泉をしばらく楽しみました。帰ってみるとだれかが 100 円を置いていってしまったようでした。韓国でならば 100 円拾ったと持ち帰って好きに使うのに日本人の友達は 100 円持っていかなかった人がいなかと持ち主を探してあげようとしていました。そして持ち主が現れないので 100 円をそのままその場に置いてきました。もし私が先にお金がロッカーに置かれているのを見たらお金を持って行ったでしょう。けれども、日本の友達たちが持ち主を探そうとする行動を見たら、お金を持って行きたいと思ったという事実が恥ずかしかったです。韓国では落とし物を取戻そうと思って行っても、むしろ警察に申告されることもありますが、日本ではそんなことがなさそうだと考えました。こうした日本の市民意識が羨ましいと思いました。私たちも幼かったとき、基本的に学ぶはずのことなのに基本を守っていないということをたくさん感じました。このごろ日本の文化を毛嫌いする人が多いなか、このような文化を見ながら学んで、日本に対する好意的な感情を持ったからと思います。

日本語科に行く前までは日本について関心もなかったが、進学してからこのような機会で日本の友達と会うことができるようになってもっとも良かった時間でした。百聞は一見に如かずという言葉のように実際に生活して日本について習ったことが多いと思います。共生というテーマで発表を準備しながら韓国と日本の共生ができるだろうと悩んできたが、7 日間の韓日学生たちが争いなく話し合う姿を見ながら直接顔を合わせて会うのが一番早くて確実な方法だと思いました。一緒に生活して私たちと大きく異なるのは、言語であるだけだということを感じました。両国が互いの姿を理解して尊重してくれるなら私たちが今回のセミナーで楽しかったようにすぐ親しくなることができるのではないかと思いました。それで今回のセミナーがさらに有意義であり、今後もさらに活発になったらと思います。そして短期的な出会いがなく、続けていくことができるように発展することを望みます。
共生、生をこのように生きる
（共生、生をこのように生きる）

白守丁

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
韓国で事前調査のために日本文化院を訪問しました。民間交流の現状と日本文化院の活動内容を中心に調べるために訪問しました。韓国にいる日本文化院は日本外交部から公式に運営している機関です。したがって毎年さまざまな行事を開催し、主要事項には韓日文化交流フェスティバル、アニソングランプリなどがありました。関係者とのインタビューを通じて韓国と日本の文化交流はますます増える傾向で、年々イベントに参加する人数も増えており、韓国・日本間のお互いの関心が高まっていることを知ることができました。しかしそのままで過去にあった歴史問題、政治問題はこれから一緒に解決していく問題であると指摘されました。

日本では新大久保を訪問し、在日韓国人とのインタビューを進めました。「〜だった」と考えるの、「何らかの理由になるのか？」という疑問から始まったインタビューは、在日韓国人が持つ多くの問題を感じることができたし、韓国人ながら日本人という生き方をその方を通じて多くの考えを持つようになりました。

1.2 私の学び
事前調査を通じて最も大きく感じたことを一言で要約すると「当然のことがなかった」という点でした。韓国と日本は地理的にかなり近い、外交的、政治的にも多くの交流が続いています。しかし、「実際に日本人と韓国人は近い仲なのか？」という質問に当然「近い」と言ってきたが、そうでない点を多く発見することができました。韓国と日本は近いために対峙することもあります。外交、政治、歴史的な問題ではお互いに鋭い視線で眺めてきた場面も多いですが、自分の国を代表する立場から、韓国人が日本人を見るときの考えは違えません。特に韓国人と日本人がお互いを眺めるとき国家の立場を代表して眺める場合をよく見ていたし、私もそうでした。しかし、今回の在日韓国人とのインタビューを通じて、「果たして私がどうやって韓国人になったのか」という問いを自らに投げることで、国家と個人についてもう一度考えるきっかけになりました。韓国人、日本人を越えて、国家をなくせば、私たちは同じ「人」であるということです。そして私たちはその間で苦しんでいる在日韓国人を会いました。私たちはお互いに眺めるときどう見なければならないのか、という質問には国家が介入してはなりません。視野をもっと広げて、私たちは他の環境、他の条件を持っている人たちとのコミュニケーションを通じて生きている時、私たちの生活はもっと豊かになって楽しくなりそうです。事前調査を通じてもっと広い視覚で韓国と日本の共生について眺めることができるようになったようです。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
初めて日本人の友達と会った時、明るく笑いながら荷物を持って案内してくれた姿が思い出されます。日本に滞在する間日本人の友達は笑いを失わず、いつも親切な姿でいてくれるかのようにでした。
れました。大変でタイトな日程にも全く疲れな気配がみえなかったし、団体生活における基本的な礼節を必ず守ろうとしている姿には感嘆が出るほどでした。また、自身の意見を先に話すよりは相手の意見を先に聞いて対応してくれました。

2.2 私の学び

いつも礼儀を守ろうとして親切にしてくれている日本の友達を見ながら「大変じゃないかな？」という気が先にしました。韓国は友達との関係において親しくなれば親しくなる程さらに楽に接する傾向があります。基本的に相手が私をよく分かっているので理解したい心から出ることだからです。しかし、日本の友達は親しくなるほどもっと礼儀を守って、害を与えないという話を聞きました。これは、相手が私を親しい友達だと思っていてくれているからむしろもっと楽にしないという心だということです。セミナー期間中、日本の友達と同じようにしようと努力しました。大変な点が多かったです。しかし、彼らの共同体文化を徐々に感じて私の友達の行動を理解することができました。
韓国人と日本人を越えて世界の人々に

金報恩

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私は、この日韓セミナーで「共生」チームに属して活動しました。私たちは、韓国人と日本人の共生のために、まずどのようなものが共生を妨げるのかを考えてみました。歴史的な問題と、お互いにしっかりと知らずに持っている偏見のためだと思うし、さらに対人交流で結ばれた関係ではなく、国と国の関係でアクセスしたマスメディアの記事、放送などに触れ、それらを自分の考えを経ていないまま受け入れたからだと結論づけた。だから、国と国の間の関係が個人が埋没されて日本への偏見を形成するのではなく、直接日本人と韓国人が会って、民間交流を通じて偏見を克服し、お互いが変わらないものを感じることが共生のために必要なことだと思いました。そこで、まず、韓国と日本の人々は相手国にどのような認識を持っているかを正確に調べるために調査をしました。これは論文を参照して調査したが論文で指摘したように韓国は日本に対して否定的に考えている側面が強いのに対し、日本は韓国に対して否定的に考えている面がうかがえました。これらのこととは、韓国は日本との歴史的な事件について壬辰倭乱、日韓併合のような、比較的長い時間前にあったことを述べたが、日本は日韓ワールドカップのような比較的近年にあったものを参照することを通じて、異なる各国のイメージを持っているからとわかりました。しかし、韓国と日本の回答者のほとんどは、日本人を直接会ったことがないか、日本人の知人がいない人が大半でした。もし、実際には両国の人々が交流をするなら、国家的な関係を離れて、お互いの人間としての真の心の交流を通じて共生をすることができると結論づけた。

また、仮説で止まるのではなく、実際に日本に住んでいる日本人、韓国に住んでいる日本人に会って他国での生活と意識がどうか調査しました。私たちの学生は日本公報文化院を直接訪れ、日本大使館で働く方と韓国の学校に通っている方に会うことができました。この方々も直接日本人に会わないまま日本人に対する否定的な認識を持っていることを指摘し、お互いの立場になって考えることが共生のための第一歩であることを言いました。日本に住む韓国人は在日韓国人に会った。日本の学生たちと直接在日韓国人に会ったが日本語がよく分からない私としては、多くの内容を理解できませんでした。しかし、日本人でもあり韓国人でもある任意のフレームにもしっかりと挟まれていない在日韓国人の立場からどのようなものが日本人を日本人だと、韓国人を韓国人だと断定できるようにするかどうかを私たちに問い合わせられました。このインタビューをもとに韓国人と日本人の垣根を越えて同じ人間として交流することが重要であると考えて発表を準備しました。また、実際に韓国で開催されるアニソングランプリ、日韓文化交流フェスティバルのような日本人と韓国人が互いに交流する事例を調査して発表しました。

1.2 私の学び
私は今年の共生についてパネルを展示する活動を行いました。その当時は私の周りの人々を大切にすることから始まる共生が始まり、他者が変わらないものを認識することを重視に活動しました。しかし、今回のセミナーでは、韓国人と日本人が国籍を超ええて共生することをテーマにセミナーを準備しました。普段日本に対して関心があったが、
日本人と韓国人は別だという認識が強かった。歴史的な問題もそうであり、あえて日本人について考えることはありませんでした。しかし、今回のセミナーに参加することになり、直接日本の学生たちに会って会話をしながら私がまだ認識していなかった私の日本人に対する根拠のなかった先入観をたくさん知ることができました。だから韓国人に日本の調査時に受けた回答者がそれらの人々だけの話ではないということを感じることができました。また、前述のアンケート調査をしたときに意外にも日本に対して興味がない友達が多くて驚きました。日本のことをよく知らない調査の難しさを表現している友人を見て、日本をよく知らないまま、日本の良くない認識を持つことは本当に恥ずかしいものと考えられました。

日本で在日韓国人をインタビューしたのも印象深かったです。何が私たちを韓国人なのか、日本人かどうか決定するかどうかを尋ねられたとき、両国の学生は、生まれた国、接した文化などを回答したが、どれも確かに私たちを韓国人、日本人で作ってくれてはいない気がしました。これらの質問により、最終的にどのようなものも韓国人、日本人を区別することができないことを悟りました。そのため、韓国人、日本人であることを越えて、私たち一人一人の地球に住む人類であることを悟り、行動することが重要であると考えています。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
私は昔から日本のドラマ、映画、大衆歌謡など、日本の文化をたくさん接することができました。それらを通じて見た日本の文化は他人に迷惑をかけることを嫌っており、女性は受動的な姿をたくさん見せてくれることなどでした。しかし、日本人の友人に会って私とは別の姿が多く見られました。日本の学生たちは、フェイスブックなどを通じて、まず、積極的に自分の意見を言ってくれたし、発表準備にも積極的に臨んでいました。また、他の組が発表したものの中で日本の女性たちは、自分の好きな男性に先に告白する場合が多いということを聞いて驚きました。しかし、日本人の友人が「ごめんね」という言葉を少し間違えてても多くのことを通じ、本当の姿であることがわかりました。物を取り出すときに少し遅れても「ごめんね」と言うのが、最初は恥ずかしかったが通常そのような習慣の一つ一つが、相手を尊重する一つの文化として私にたくさんの残してきたからです。しかし、そのような姿が心ではなく、加飾と思われるところをお少しあげられることもあります。そこで、ずっと日本の友達と日本の習慣に触れながら、そのようなものはただの飾りではなく、相手を尊重する日本の文化というものを感じることができました。実際に会った日本の人々は、誰よりも道を親切に説明してくれて、優しく声をかけて真剣に他人の言葉に耳を傾ける人々でした。また、無条件に友好的な姿はなくオムハル時は誰よりも厳しく、積極的に自分の意思を表現することを知っている人々でした。結果、日本人も韓国人のような人でした。もちろん、日本では茶道文化や歌舞伎、韓国は韓服やテコンドーなどそれぞれの固有の文化があるが、これもお互いの個性を活かして楽しく交流できるようにしてくれるきっかけでした。今回のセミナーを通じて、私の狭い視野から脱し、より広く世界を眺めるに成長しました。
1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
1.2 私の学び

日本に来る前、韓国側のみんなと一緒に西大門刑務所に訪問した。そのあと、わたしの担任だった先生の元を訪れてインタビューをした。それと周りの人たちは韓国と日本、両国についてどんな風に感じているのかをインタビューで簡単に調べてみた。日本に来て日本側のみんなと明治神宮、靖国神社とそこにあつ博物館を訪問した。千葉県にある高校に行って歴史の先生にインタビューをした。草津でプレゼンを作りながら両国の歴史教科書を比較した。これまで調べて集めた情報を整理してプレゼンを完成させて「歴史認識について」というテーマで発表をした。

事前学習で訪問した西大門刑務所は以前、わたしが中学生だった頃学校で現場実習して行ったことがあった場所だった。だがその時は幼く、歴史についてあまり深刻に考えるような年ではなかったし何より考え方が浅かったこともあって、ただ単に独立運動のために戦っていた人たちがここで無惨に亡くなった、漠然とそう考えていた。

歴史の勉強も視野が狭くて日本人は韓国の歴史をどんな風に考えているのだろう、そんなことはなかなか思いつかなかった。でもこうして国際セミナーで歴史という問題を取り扱って深く勉強してから前よりも視野が広くなった感じがした。

韓国で西大門刑務所に、日本では靖国神社と明治神宮に現場実習をした時各国の利害関係と立場によって歴史の記述がとても違うことにびっくりした。特に靖国神社の隣にある博物館に入って見たものはかなり衝撃的だった。歴史を学んでいたころ先生から日本人は未だに自分たちがどんな間違いをしたのか知らないってよく聞いたけど心のどこかではそれちょっと疑っていた。

いつもマスコミで歴史の論難があったけどわたしはすべての日本人がそんなはずがないと考えていた。でも展示されているものとその横に書いている看板を見て結論失敗した。せめて人間的に考えると自分たちが犯した過ちに少しても罪悪感を持つのが一般的だろう。

また実習中に千葉県にある高校で学生たちを教えている歴史の先生にインタビューをした時もなんで罪悪感を持ってくれないかな、そんな考えしかしていなかった。他の国から留学をしにこの学校によく来るその先生から言われて、ちょっとは中立的な立場で考えてくれないかな、と少し期待していたが予想通りにはいかなかった。

韓国で歴史の先生とインタビューをした時、先生はどんな方にも傾かず中立的な立場で両国がこれからどうするべきかゆっくりその解決策を出してくれた。でも日本の先生はその時と全く違って失望した。これは一時高校生だったころわたしが歴史をこの先生から教えられてから言えることじゃない。中立的な立場として見てみるとそんな考えしか出なかった。もちろん自分の国だからそんな考えが出るのも理解できる。だがそのインタビューが終わった時どこかぎこちないさを割り切れなかった。

ここで両国間仲良くなるためにはお互い自分たちの間違い歴史認識を正しくすることが一番大切なことだとはっきりわかった。
2. 日韓の文化の違いと学び

2.1 日韓の文化の違い

2.2 私の学び

今度の国際セミナーで両国の違いをはっきりと感じた。お互い文化の似ているところは多いのに違うところも結構多くてびっくりしたことがある。韓国の人たちは対話するとき、あまり大きく反応をしない。例えば「あ、そう？」とかこんな反応が大抵だ。その反面、日本人は大きく反応をしている。ドラマやアニメでその反応をよく見かけていたけど、実際に見るのは違うもので、最初は不慣れで多少戸惑ったりした。

それとご飯を食べる時も違うことがある。食堂でご飯を食べる時、韓国ではおかずが基本的な条件だ。少なくともせめてチキンとサラダぐらいは出ている。だから日本で外食をする時、おかずは全くなかったと感じた。でも思ったよりおかずがない生活にすぐ慣れて大した問題にはならなかった。

温泉とお風呂をする仕方も違った。韓国の温泉は長くいると危険だということは書いてない。だが日本の温泉は10〜15分以上いると危ないと書いている。

韓国では恥ずかしくて友達と話す事が多い。そうかと温泉水に行かない。その上、家族同士で行くのも恥ずかしくて行かないぐらいだ。それに比べて日本のみんなは恥ずかしさを全く気にせず一緒に温泉に入るお互いにもっと親しみを深めるチャンスを作る。それがおかげで、もっと親しくなっていいしてくれるという体験ができた。

韓日文化の違いのために、大学で映像による遠隔交流をする時には本当に仲良くなれたのか心配だった。相手についてよく知らないし、何よりもこの人と親しいと言えるほどの間柄ではなかった。その上、このセミナーではなければ知らなかっただろう韓国側のみんななどあまり親しくなかったから国際セミナーの前日は心配で眠れなかった。でも日本に着いて一緒に過ごしながらこの心配は本当に無駄だったことをはっきり気づいた。

日本と韓国は似たところが多くても違うところも多くてすこし多い。でも実際に日本に行って体験してみると本当に違うのだと感じた。

特に、韓日セミナーのプレゼンが終わったあと、発表の時間とか教育方式が本当に違うのだと感じたことが多かった。中学、高校のころは発表をする機会があまりなかった。ただ先生のおっしゃることを書いてそれを書き取って単純に暗記して試験を受けた。課題があっても調べて提出することしかなかったし、なおさら積極的な性格ではないわたしには人前で立って堂々と言うことがすごく難しくてそのチャンスが来ても自分から進んでいなかった。

だから大学に入った今でも発表をすることが怖くてかなり苦労をしている。それまでの時何か気になると話すことも質問したいことがあっても自分から進んで発表することが恥ずかしくてできなかった。そのことが今でも気になって少々後悔している。これを直したくて今度の学期に発表が多い講義を聞こうと考えている。

また、歴史の先生のインタビューをした時に高校に行った時夏休みなのに部活をするため学校に来て一生懸命に練習をしていることや、代々木オリンピック公園で部活の合宿に来て自分たちがやりたいことに没頭して頑張る姿を見ながら羨ましいなーとずっと思っていた。韓国は入学することばかりでずっと勉強勉強で、自分がやりたいことは大学に入ってからやりたいという感じだった。

そのせいか、大学生になったみんなは何をしたいのか確実に決めていない上に夢さえもない状態だ。でも日本では部活などいろいろな活動をしながら自分がしたいことを探すチャンスがあり、韓国ではそうではないので羨ましかった。本当に学生の青春ライフを満喫するのだと思った。

韓国も日本のように学生たちに勉強だけを押し付けるのではなく、本当に子供がしたい
ことを自分で見つけさせ、それから勉強をさせるのが本来の教育の目的ではないかと考える。まず学生たちの意思を尊重して本当の夢が見つかるようにこの入試制度を直すべきだと思う。
交流を通して学んだこと

金柾玟

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
歴史グループでは約 2か月間、韓国と日本、両国間の異なる歴史認識を調べるために両国の歴史教科書を比較・分析した。同時に両親と親しい友達1人にインタビューをし、韓国または日本の好き・嫌いなところと旭日旗・靖国神社へのイメージを調査した。
また両国の歴史の先生を訪れ、韓国の先生からは歴史教科書・授業の限界や問題点のような歴史授業の現場に対する話しと、韓国と日本の望ましい未来像に対する話ができた。日本の先生からは古資料を利用し、独島問題に対する話と東アジアの望ましい未来像に対する話をそれぞれ聞くことができた。
一方、実習として韓国では日帝強占期時代、多くの独立闘士が投獄され、拷問された西大門（ソデムン）刑務所を、日本では明治神宮や靖国神社をそれぞれ訪問した。

1.2 私の学び
昨年の今頃に、韓国と日本がしばらくな膵問題で騒がしかったことがあった。その時、日本のポータルサイトで同じような記事を探して見たが、あるユーザーが「韓国人たちは洗脳されている」というようなニュアンスのコメントを残したのを見て驚いたことがあった。
私が今まで当然だと思っていたことが、相手側から見ると当然のことではなかったのだ。しかし、今回のセミナーでお互いの歴史教科書をみていたら、初めてなぜ韓国と日本が歴史問題で争うかを少し理解するようになった。
私たちは両国の歴史教科書で共通された5つの事件、韓日強制併合から3.1独立運動、関東大震災、皇国臣民化政策、慰安婦・強制連行までの記述について比較・分析した。両国の教科書はこの事件を説明する分量も、事件を描写する単語も、ニュアンスも全然違っていた。
韓日併合を例に挙げると、日本教科書では韓日併合を1ページ半にわたって「保護国化」、「韓国の内政改革を指導した」という風に表現したが、韓国教科書では5ページにわたって主に「脅威、強行、強要、無慈悲、弾圧、強制的、鎮圧」という単語を書いて韓日併合を描写していた。
もちろん、教科書にはその国の教育目標・目的に合わせて再構成されて用いられるので、そこまで他の国が関与する権利はないと思う。しかし、教科書で事実を意図的に隠蔽・縮小・美化、あるいは偏見を持たせるような単語を使って教科書を書かることになれば、それは抑止すべきことだと思う。あくまでも事件の本質を客観的に叙述し、判断は学生らが自主的にするようにしなければならないと思う。
そして歴史を勉強するために相手を反論するために勉強するのではなく、お互い知るために、もまた理解するために勉強することができる学びに繋がるのではないかと思う。この点で、私たちが約2か月にわたっての交流は一見すると単なる一つの小さなことと考えまるかもしれない。しかし、私たちが今回の交流を通じてお互いを理解しようと努力したり、話し合ったり、また一緒に経験したことのは10年・20年後に他の実践・交流に繋がると信じる。
また、これが今後の肯定的な韓日関係の土台になると信じて疑わない。私も今後、今回経験したことを、別の実践・交流に繋がるように努力したいと考えている。
2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い

私は日韓文化の違いで「配慮心」を挙げたい。日本に行ったことは2回しかないが、日本人たちの深い配慮心に驚いたことは一度にとどまらない。たぶん今回のセミナーで初めて日本の人々と接して感じた。私の漢字の名前の上に日本の友達がちりばめたのは代々木で名札を渡されたときに思わなかった。私の友達の名前を丁寧に書いた友達がいる。韓国人である私たちのためにそういった風にしてくれた、その心がとても美しかった。今もその名札を取らなかったのが後悔される。

また、私たちが下手な日本語で話している時、一生懸命に聞いてくれる姿がとてもありがたかった。何か私があまり面白くないことを言っても皆さんがすぐに笑ってくれるので、私まで本当にたくさん笑ってしまった気がする。

そのうえ、私たちは歴史の問題を扱うのでお互いちょっと敏感だったことがあったと思う。しかし、日本の皆さんが私たちの話をじっと聞いてくれ、直率に自分の意見を言ったりしてくれた。おそらくこのような部分においては日本の皆さんが私達のため、多くの部分を配慮してくれたと思う。

その他にも日本の学生たちの深い配慮行動は数えきれないほどだ。もちろん韓国でも人を考えて相手を配慮するが、考えられなかった所で人を本気で思ってくれる心は日本の人がもっと深いと思われる。これが私が日本で感じた韓日文化間の違いの一つである。

2.2 私の学び

行動の一つ一つにも本気が、温かさを感じられる日本の学生たちの配慮心を感じてから、私は果して普通、人たちをどうしているかについて思うようになった。私はふつう他人よりは私が中心となって考える傾向が多いと思う。もちろん最近はできるだけ人に親切で率直に行動しようと思うが、それでも日本の人達は本気で思ってくれる心が日本の人にはもっと深いと思われる。これが私が日本で感じた韓日文化間の違いの一つである。

行動の一つ一つにも本気が、温かさを感じられる日本の学生たちの配慮心を感じてから、私は果して普通、人たちをどうしているかについて思うようになった。私はふつう他人よりもは私が中心となって考える傾向が多いと思う。もちろん最近はできるだけ人に親切で率直に行動しようと思うが、でも、やはり日本の人達は特に深く思ってくれる心が日本の人にはもっと深いと思われる。これが私が日本で感じた韓日文化間の違いの一つである。
近くて遠い日本
張有望

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
1.2 私の学び

歴史。歴史については今まで、「難しく複雑なこと」という考えで深く考えていませんでした。セミナーに参加するようになって歴史グループを選択して日本のみなさんと交流を始めるようになりました。歴史について知り、これまで無知だった私を反省できる時間になりました。

最初のグループ活動として韓国の友達と西大門刑務所を行いました。過去にも行ったところでしたが、初めてガイドの説明と一緒に長い時間の間たくさん話を聞きました。私たちのつらく大変だった過去、独立のために戦ってくれた誇らしい独立闘士たち。忘れてはいけないが忘れていた私があまりずかしく恥じないで心が痛みました。すべての現在は過去があったからこそ可能なのか。一瞬の気持ちではなく「毎日を感謝する気持ちで生きなければ」と思いました。

本格的なグループ活動は、日本で始まりました。グループ活動日、私たちは靖国神社、明治神宮そして日本の歴史の先生のお話を聞きました。実は靖国神社に関しては単に戦犯を祀るところだと聞いていたし「気持ち悪い」ぐらいの認識だったが、実際に見てそこを見ながら戦犯を美化して侵略戦争を否定する靖国神社の本質的な問題点について考えてみました。

一番記憶に残った時間は千葉に歴史の先生に会いに行った時でした。個人的に愉快ではない時間でした。独島の関する話を聞くことができ、内心最近独島講演で話題になった保坂祐二教授のような論理と原則的な話を期待しました。しかしそうではありませんでした。ずっとそう思っていたことを違うように考える人を見た時は本当に不快な気分でした。そして悲しい気分になりました。

過去の韓日の歴史や独島などの問題に関しては日本国民の関心が、一部を除いて大多数が高くないと思います。そのために国民たちは、日本政府の主張や歪曲された事実に自然に同調する可能性が高く、そのため、韓日関係がさらに悪化していなかったかと思います。間違ったことを正すことが本当に必要だと感じ、そのため、韓国の歴史教育ももっと積極的に進めべきだと思います。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
2.2 私の学び

これまで日本の文化を体験できる機会がなくて今回のセミナーは私にとってたくさんの経験になりました。一番記憶に残るのは時間概念に関するエピソードです。韓国でももちろん時間の約束が重要だが、時間概念がかなりルーズです。このような概念が習慣になって草津で夜に宿所に適時に入ることができず、宿所のおじさんにすごく怒られましたがあの時「あ、日本は本当に時間概念が徹底しているんだね」と感じました。遅れて入った私の過ちもあるが、初めては本当に動揺し、ひどいという考えも聞きましたが今考えてみると本当に勉強になったようです。
日本の友達と一緒に生活しながら感じたのは、日本人たちは本当に誠実ということでした。セミナー準備とか普段の生活する姿をみると、韓国人友達より真面目なところが感じられ「すごいなぁ」と感じました。そして、すごく良かったのがほとんど食事を残していないことです。私は個人的にずいぶん偏食の激しい方ですが、日本の友達の食習慣を見て学ぶところが多いと思いました。

セミナーの中で印象深かったのは日本の友達の積極性でした。韓国の子供たちは幼い時から発表とか前に出て、自分の考えや意見を示す活動をあまり経験しません。私も必ず必要な瞬間以外は前に出て意見を出したり、質問をしたりしません。だから、日本でセミナー中、日本の友達が発表したり前に出て発表したりする姿を見てとても驚きました。これから先の韓国も積極的に自分を堂々と表すことができる教育が必要だと思います。

日本に行ってもっともうらやましいと感じたことは、他人の視線に大きく神経を使わないという点でした。そうでない人ももちろんあるが、日本の街の多様な個性の人々を見て私はそう感じました。例えば、服を着るスタイルとかがそれぞれのスタイルがあり。日本で街の人たちを見るだけで本当に目が楽しくなりました。漫画をみたりゲームをする大人たちをみるのも不思議でした。韓国ではもちろん昔ほどではないですが、まだ漫画とかゲームを下級の文化に考える大人もたくさんいて、若者たちの間でも漫画キャラクターなどを好きな友達をあまりよくなく存思ます。きっとそれは自分の好みで楽しみなのに他の人たちがそんなに評価することは間違ったことだと思います。表現が自由な日本のそういうところはぜひ学ぶべき姿勢だと思います。

短いですが、短くない10日間、国籍も言語も違う友達と過ごしながら普段日本人に対する誤解を持っていたのが、いい友達と会って楽しい時間を過ごすことができたので良かったです。忘れられない思い出を残してくれたお茶の水女子大の先生と友達、特に本当に親切だった歴史グループの友達、本当にありがとうございました！
私を、そして私たちを振り返る

姜智媛

1. グループ活動報告と学び

ソウルではないところで育った私は西大門刑務所をTVを通じて、小学校5年生の時初めて知りました。私はその番組を毎週好んで見たために、日本植民地時代に日本が我が国にしたことの理解するようになりました。大韓民国の国民として日本について良い感情を持つことができず、その後も学校の歴史時間に習っている日本、そして独島、歴史教科書歪曲、慰安婦問題などにより、日本のことを良く思うことができませんでした。

事前学習で西大門刑務所を訪れた日は傘に穴が開くほど雨がたくさん降っており、くまなく見回る事は困難でしたが、濡れたままかかっている大型太極旗の姿と、ひやりとした獄舎内部にその当時、不幸だった朝鮮の状況をより現実的に感じることができました。

日本で現場実習に行った明治神宮や靖国神社を訪問して「日本は本当に私たちとは違う考えを持っているのだ」という考えをしました。特に靖国神社は、韓国が敏感に反応をする場所だから写真を撮ると迷ったり、友達と冗談ながらも「あの中では絶対韓国語を話さないようにしよう」と言うほどに気をつけました。神社のわきにある博物館を見学しましたが、やはり日本が受けた被害だけ説明・展示されていることに眉をひそめてしまいました。博物館内にある全ての説明を読んではいませんが、全体的に第2次世界大戦当時の日本の行動を美化しようとする感じを受ける、自分たちが被害者という認識を与えるようでした。そして同じ事実について両国の考えにこんなにも差があることに驚かされました。

グループ活動をしながら最も失望したのは、直接学生たちに歴史を教える日本歴史の先生に会ったことです。実は韓国側は、先生に知りたかった質問をして答えてもらうというインタビュー形式だと思って行ったのですが、独島に対する先生の授業が進んで残念でした。なぜなら、独島は勿論日韓関係に欠かせない事案ではありますが、私のグループのテーマとは距離が遠いからです。そして、先に知っていて、独島について調査したのに急に行って話を聞くと韓国側の考えと言えなくていらっしゃいました。素直に言えば独島に対する先生の考えを私たちに強要するような感じを受けました。

今回のセミナーを通じて今までずっと私が持っていた考えとは全く違う人に会うので頭の中で考えが複雑になり、私が知っていたことは果たして合っているのかという疑問が生じました。歴史とは果たして客観的だろうか。よく、歴史は勝者によって書かれると聞くので私が知っている歴史が実態でない可能性もあると思いましたし、それぞれ他の国で他の教育を受けて異った考えを持っているのが正しい歴史認識とは誰の立場で正しいとするのかという疑問が生じました。歴史についての私の考えは混沌し、もっと複雑になりました。これは私の考えが発展したという証拠で、学んだ甲斐がありました。

2. 日韓の文化的違いと学び

遠隔交流をするときは1時間に5つのグループが会議をしなければならなかったために対話する時間もなく、また、ことの進行状況について報告をするので、言いたいことを事前に辞書で調べて、準備することができたので、それはほど文化の違いについて大きな差を感じなかったです。

しかし、直接セミナーをしながら韓国学生達とは違う姿を見ることができました。私を含めて韓国の学生たちは発表をしたり質問をしたりすることに恐れをなします。先生が名
指しをしたり、発表をする人にボーナス点をくれたりしなければ自発的に前に出て発言する生徒は、まれです。これは、個々人の考えを表現する教育ではなく、無条件に教科書を暗記して試験を受けて順位を出して刺激する注入式教育の弊害だと思います。反面、日本の学生たちは各グループが発表を終えたから発言しなかったから自ら発表をしてまたその質問が鍛えて、びっくりもしたし、うらやましかったです。

そして教授と学生たちの間に上下関係がなく、本当に親しく見えて不思議でした。私たちのグループの友達がご飯を食べる時、前に座っていた森山教授と対話をする姿が教授が苦手な私たちの姿とは大きく違って見えました。韓国のすべての学生がみんなそうとは言えませんが、大抵は教授を煙たがって同じ空間でご飯を食べたとしても、別に食べて講義時間がかければよく訪れたりはしません。

これを克服するためには、簡単ではないが、自分の意思を明確にすることができるようにする教育が必要です。そして教授に対して不満に思うことは、韓国の伝統的な礼儀作法を重んじるあまり、意見することを無礼とする慣習がある程度残っていることです。風習ももちろんだ大切ですが、目の上の人だからいう無条件な上下関係がなく、水平関係で見られる社会的認識が必要だと思います。

もうひとつ、日本の花火を見ながら感じたことは、日本人たちは浴衣や着物をよく着るということです。最初は、花火大会なのにどうして不便で暑くて不快だった浴衣を着るのか?と考えましたが、時間が経つほど伝統的な祝日の時さえ着ない私たちの韓服が浮び上がりました。韓服の不便さを解消した改良韓服があるので私たちはチマ・チョゴリを不便に思って着ないのに、日本人たちは特別な日があるときいつも浴衣や着物を着る姿に感動しました。

私たちも昔から伝わる韓国の固有文化に対する自負心を持って、継承するための努力をたくさんしなければならないと感じました。
お互いの理解

権英芽

1. グループ活動報告と学び
セミナーに行く前、韓国で私たち歴史組は西大門刑務所を訪問した。そこは、過去の日帝強占期に日本軍が韓国の独立闘士を拘留するために作った刑務所である。残酷な拷問の場面の模型を作って、実際の刑務所の展示がしてあるのを見ると本当に苦しかった。しかし、死ぬほど苦しい拷問に耐えて生き残った愛国者とその子孫たちは現在、基礎生活受給者として生きていくなど、経済的に都合が良くない。むしろ当時国を日本に売って、日本側にいた親日派たちがこの社会の指導者になって生きていく。これはいったいどういった構造なのか、と思っても親日の残滓がまだ多く残っており、社会は仕方がないことだと黙認する。もちろん、過去に日本が犯したことは抺えない罪である。しかし、この事実を知りながらも知らないふりをして、韓国も彼らに罪を犯しているのだと思う。これは本当に残念なことだ。

日本に着いて、私たちは渋谷の明治神宮に行った。宿泊先の代々木センターより明治神宮へ行く道は喫煙していた。緑の森の中を歩いていたら爽やかで健康になる感じだった。明治神宮の門は木できているのが本当に日本らしかった。天皇に仕える神氏であるだけに厳粛な雰囲気が漂っていた。内側には大きな太鼓を打つ人と、それに合わせて天皇に祈りをささげる人々がいた。出ると、伝統的な結婚式を挙げる人々を見た。伝統的な服を着た新郎新婦と上品な容姿の賀客たちが行列をなしていた。日本も韓国のようにお金持ちが伝統的な結婚式を挙げるんだなと思った。そして靖国神社に行った。靖国神社は韓国でも有名な神社だ。ここは、第二次世界大戦を主導した戦犯を称えるところであるので、世界的に論難が起こったからである。日本の右翼が軍国主義を尊重し、参拝することを、日本人もいい迷惑だと思うのである。もちろん、私も靖国神社に否定的な考えを持っていてこの場所を見学するのが苦しかった。さらに、神社の中には第二次世界大戦の戦犯の記録を展示した博物館がある。報国という言葉を使いながら、戦犯を包装する姿を見てとても良心が良くなかった。そのような感情を後にしてしまったまま、博物館を出て、気持ちが沈んだ。

明治神宮と靖国神社を見学した後に、事前に約束した日本の高校の先生とのインタビューのために千葉県の高校に行った。しばらく待って出会った先生は2時間ほど韓国と日本の関係と獨島の所有権の問題について授業形式の説明をした。彼の話を総合すると獨島の所有権を主張し、戦うことよりも妥協案を見つけて共同所有をすることがよいということだった。私は少しポーキとしたが、日本人と韓国人はあまりにも異なる歴史教育や環境により異なる考えや歴史観を持っていると感じた。私は獨島は韓国の領土だと思う。その根拠は、媒体を介して伝えられた。日本人も獨島は日本所有の土地だと思う人が多いだろう。彼らの国が根拠を示して所有権を主張しているので当然信じるだろう。だが真実はまだ誰も知らないし、重要なのは我々の態度である。明確な根拠は徐々に出ることでいつか真実は明らかになるだろう。その過程で、韓国と日本は領土を取るための紛争ではなく、真実を明らかにする努力しなければならない。そのためには、お互いの歴史、文化への深い理解と正しい歴史教育が行われるべきだと思う。

2. 日韓の文化的違いと学び
私は子供の頃から日本の漫画とドラマ、そしてインターネットを通じ、日本文化を間接
的に経験してきた。先進国であり、隣国である日本の文化は韓国にかなり深く位置してい
る。特に日本に関心が深い私は日本語の勉強と間接的文化体験を通じて日本文化を比較的
よく知っていると思う。代表的に食事文化の違いがあるが、韓国人は茶碗と汁椀を置き、
スプーンと箸をいっしょに使用するのに対し、日本人は茶碗を持って箸だけを使って食べ
て、汁椀は手に取って飲む。実際日本に行って感じたこととして、レストランに行くとス
プーンはあまり出なかった。また、食べ物を注文するとキムチやおかずが一緒に出てくる
韓国に比べて日本は、注文した食べ物だけ出てくるのは少しあれ驚いた。
韓国と日本は、これらの違いもあるが、共通点も多い。同じ漢字圏だから言葉も似てい
るし生活様式もとても似ている。特に同じ年齢の人々に会って感じたことのなかで、
若い人は、自分たちの言葉を作って使用する。例えば、日本人は「やばい」という言葉の
意味を拡張させて驚いたり大変な状況、またはおもしろい時などいろんな状況で使う。韓
国はそのような言葉が本当に多い。代表的なものに「ハル、デバック」などがある。この
言葉は、「やばい」の意味と似ていて韓国の若者が使う言葉だ。そして、日本人でも韓国人
でも考えていることはあまり変わらないと感じた。共感を覚えるのが難しくなかったのが
不思議だった。ただ日本語がうまくないので時々わからない言葉があれば、いつも辞書を
使ったり、日本の友達に聞いて私の言うことを正確に伝えることができた。
日本人は本当に親切で、思いやりが深い。もちろん、性格は千差万別だが、少なくとも
私が会った人々は皆、基本的に親切だった。個人主義の日本人は、人に被害を与えること
もなく、自分も被害を受けることを嫌がる。だから、寛容することが身についている。そ
して日本人は、時間の約束をとても重要だと思っていることがわかった。韓国人は「少し
遅れても大丈夫だろう」という考えを持った人が多い。これは、他人に被害を与える行為
であり、従って時間約束についての態度は日本人に学べばよかったと思う。もうひとつ学ぶこ
とは、セミナーの発表をする時に感じたことだが、日本の学生たちは、人々の前で自分の
考えを表現し、フィードバックを受けることに不安を抱えていた。一方、韓国の学生たちは、
自分の考えを他人に話すことに不安を持っていて、発表するのに消極的だった。
私の考えで最も大きな理由は、韓国式の教育の方式である。じっと座って話すのではなくて、
自分の考えを他人に話すことに不安を持っていて、発表するのに消極的だった。子供時代には自分の主張をする
機会がほとんどなく、ひたすらテストの勉強だけをする韓国の現実である。このような教育
方法を変えるべきだと思う。
私は日本人の大好きなリアクションが好き。韓国人は恥ずかしがることもなく大きく
リアクションをあまりしない。なので、私たちはあまりないその姿がいい。日本人も私た
ちが思いぬくで学びたい点があると思う。他の環境で育った人々がお互いに親しみになるの
はまず、お互いの環境と文化を理解することが重要であると思う。今回のセミナーを通じ
てたくさん感じて、日本についてもたくさん知っていい経験になったと思う。
一歩進んで行ける
崔允埈

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容
セミナーが始まる何ヵ月前からテレビ会議を通じて‘教育’というテーマにどのように面でアプローチし、韓日両国の教育を比較分析することについて様々な意見を提示して相談をした。韓国と日本の教育が似ていると思ったが、思いのほか違う部分が多いということを感じて中間に細部的な内容を変えなる困難を経験し、内容を定めた。本セミナーの日程が始まる前にアンケートを作って大学学業成就度や満足度を調査して、大学入試のための準備課題と学習の実体などについての調査を進めた。セミナーが始まってからは、まず、韓日両方が調査した資料を検討して有用な資料を選び出した。足りない部分があれば再検討をしたり、お互いのインタビューを通じて埋めていった。現場実習地としては日本の名門大学である東京大学を行うことに決めて東京大学の学生たちを対象にアンケート調査とインタビューを実施することにした。大学に対する満足度、就職に関する項目、大学生活がどのようにかに対するアンケート調査を実施して入試のためのように準備をしたかどうかをインタビューした。すべての資料を集めて発表準備を始めだが、韓国側が日本語において不足な点が多いため、大学のことを日本の友達が引き受けしてくれた。パワーポイントを作って台本を作る作業の大部分が日本の友達によって行われて韓国側は伝えられた内容が一致しているかどうかを検討した。大変な発表の準備過程で発表の時に必要な出し物を練習したことが記憶に残る。韓国アイドル「クレヨンポップ」の「パパリ」の踊りを踊ることにして、皆で映像を見ながらダンスの練習をした。皆、発表準備によってくたびれていた中、難しいことを忘れて楽しむことができた。残念なことに練習不足で出し物を他のゲームに変えたが、教育組が楽しかった最初の時間だった。

1.2 私の学び
セミナーの準備過程が息苦しくてうんざりだとも感じたけれど日本の友達の熱情な姿を見てたくさんのことに気づき、心を入れ換えて準備に一生懸命取り組むことができた。実際に日本の友達のほとんどは私より年下だったが、彼女たちのセミナーに参加する姿を見ると年齢差を感じることができないほど、誰より真面目で大人びていた。セミナー準備中、日本の友達は学校の日程でとても忙しかったと聞いた。私だったら私の個人的な仕事にだけ時間を使いたいと思うであろうが、ない時間を裂いてより熱心にセミナーに取り組む友達の姿を尊敬した。特に彼女たちがみんなで集まって発表準備をする姿を見た時は韓国と比較して本当に多くのものを感じさせた。韓国の大学での授業では、メンバーたちの間の協同心と他人との調整通する方法を知るために、チーム発表をたくさん練習した。しかし韓国のメンバーたちは、協同心を活発にし、メンバーで意思疎通をするというよりお互いの役割を分担して自分の担当だけをまとめる形であった。しかし日本の友達は発表準備が終わるまで、自分の役割をするだけでなく、みんなで集まって意思疎通をしながら発表を作っていくという姿が本当に印象深かった。みんなが一生懸命に作った年のチーム発表に感銘を受け、これからはチーム発表を準備する際に日本の友達を見習ってメンバーで意思疎通をしながら成し遂げていきたいと思った。
2. 日韓の文化的違いと学び
2.1 日韓の文化的違い
韓国と日本は地理的にとても近い国であり、交流した歴史が長いので、文化においてもあまり違いがないと思っていた。10日という期間は非常に短い期間だったが、それでも日本人と生活する上で多くの相違点を見つけることができた。習慣と考え方においても多くの違いを感じられたが、私が一番大きな違いを感じたのは言語行動だ。本セミナーが始まった時、一番最初に感じたのは、自分自身のことを考える前に他人をまず考えて配慮するという行動が日本人には身についているということだ。自分たちと同じく大変な状況下でも、まず前に私たちに配慮する姿をたくさん見られた。また、朝のあいさつや食事の前の感謝の言葉など、日常生活でのあいさつが習慣化されていた。また、日本人というと親切な姿が先に思い浮かべるから、嫌なことはきっぱりと嫌だと言うような、はっきりとした表現を韓国ほどは使わないと思っていた。また、自分が嫌だと感じることははっきりと嫌だと言っており、イメージとは違っていた。これらのこととは、好き嫌いの曖昧な表現の使用により韓日の間で生じる問題を避け、お互いを確実に理解するための日本人の配慮ではないかと私は考えた。また、日本人は韓国人に比べて他人の視線を意識しないと感じた。私ならば個人的に解決することを他人に被害を与えないように範囲内で人に気を配ることは見られた。

2.2 私の学び
克服すべきだと思う違いは感じられなかったけれど、多くの場合において見習いたい部分を発見することが出来た。一番基本的な部分だが、朝のあいさつ、日常生活の中でのあいさつが習慣化されているという部分は特に見習いたい。初日目は、朝、日本の友達が「おはよう」とあいさつすることに少し違和感があったけれど、ちょっとしたあいさつというものが相手の心を気持良くさせることができるということに気が付いた。また、自分がまず他人を配慮するという習慣を見習わなくてはならないと思った。韓国人だからと言ってあいさつをしないというのは、利己主義者であるということではない。気持ち良くあいさつが出来て、配慮もする。しかし、韓日間で異なる部分があり、そのような部分の良さを感じるようになったので、そのような姿を学んで実践したいと考えるようになった。
言語を越える関係

金希俊

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容

教育グループに入って準備している過程において日本人と直接、映像通話をして意見を交流する際、とても不安があったが、日本人教授が簡単な会話、つまり討論によく使われる文型等を教えてくれた。そんな文型を見ながら日本人の対話方式や考え方をなんとなく推し量ることができた。韓日の国際交流という立場で各国の習慣を調べている点も良かったが、私が選択した「教育」という分野でセミナーの準備をして、新たに学んだことや得たことも多かった。

「教育」という問題を扱うことに先立って、以前の授業で韓国の教育は日本の教育方式をそのまま持ってきたと聞いて、日本との間にどのような相違点があるだろうとたくさん悩んだ。その時日本側が提示してきた問題点は、英語教育だった。しかし、日本側が提示した問題点である「英語教育」というテーマ一つにするとやや軽い主題になると考えて教育全体を取り扱うことができるように全般的な教育システムを話し合ってみようと提案した。

教育グループに入り準備している過程において日本人と直接、映像通話をして意見を交流する際、とても不安があったが、日本人教授が簡単な会話、つまり討論によく使われる文型等を教えてくれた。そんな文型を見ながら日本人の対話方式や考え方をなんとなく推し量ことができた。韓日の国際交流という立場で各国の習慣を調べている点も良かったが、私が選択した「教育」という分野でセミナーの準備をして、新たに学んだことや得たことも多かった。

「教育」という問題を扱うことに先立って、以前の授業で韓国の教育は日本の教育方式をそのまま持ってきたと聞いて、日本との間にどのような相違点があるだろうとたくさん悩んだ。その時日本側が提示してきた問題点は、英語教育だった。しかし、日本側が提示した問題点である「英語教育」というテーマ一つにするとやや軽い主題になると考えて教育全体を取り扱うことができるように全般的な教育システムを話し合ってみようと提案した。

教育グループに入って準備している過程において日本人と直接、映像通話をして意見を交流する際、とても不安があったが、日本人教授が簡単な会話、つまり討論によく使われる文型等を教えてくれた。そんな文型を見ながら日本人の対話方式や考え方をなんとなく推し量ことができた。韓日の国際交流という立場で各国の習慣を調べている点も良かったが、私が選択した「教育」という分野でセミナーの準備をして、新たに学んだことや得たことも多かった。

「教育」という問題を扱うことに先立って、以前の授業で韓国の教育は日本の教育方式をそのまま持ってきたと聞いて、日本との間にどのような相違点があるだろうとたくさん悩んだ。その時日本側が提示してきた問題点は、英語教育だった。しかし、日本側が提示した問題点である「英語教育」というテーマ一つにするとやや軽い主題になると考えて教育全体を取り扱うことができるように全般的な教育システムを話し合ってみようと提案した。

韓国側が考えると、そして実際に学生として経験した教育についての問題点などを日本側に伝えると、思ったより大きく驚いている姿に韓国の教育問題点についてもっと深刻に調べる必要があると考えた。

韓国側は韓国の教育方式によって生じた問題点について日本の学生たちにインタビューをしながら質問をした。私たちが予想したものとは反事が異なり、韓日間の教育の問題も違うことをとても感じた。日本側は、英語教育を中心として日本教育の問題点を指摘し、
1.2私の学び

한국의 교육체제는 일본의 교육체제와는 상당히 다른 점이 많았다. 일본의 학생들은 원칙을 지키며, 단순한 방식에 의존하지 않고, 학문과 사회 생활을 결합시켜 학습한다. 반면에 한국의 학생들은 방대한 수험에 열려, 대학 입학에만 관심을 두고 있다.

한일 교류 그룹의 일본의 세미나에 참가하여, 일본인의 사고 방식이 한국과는 다른 점을 알게 되었다. 예를 들어, 밥을 먹을 때, 일본인들은 함께 먹는 학생들이 모두 있을 때까지 기다리며 밥을 먹는다는 사소한 것들까지도 valore하게 생각하고 있다.

나의 학문적 성취에서, 한국의 교육계의 문제점에 대해 많은 생각을 하게 되었다. 한국의 대학은 명문대학과 수험생의 수험점수에만 중점을 두고 있지만, 일본의 대학은 학생의 개인적 수명과 상관없이, 학문적 성취를 추구한다.

이번 국제 교류 세미나를 통해, 일본인들의 가치관과 일본이라는 나라 자체의 전체적인 성격을 직접 느낄 수 있었다. 토론에서, 자주 쓰이는 문형만 보아도 상대방의 의견에 이의가 있을 때에는 정말 조심스럽게 말을 거내는 등 일본인들의 상대를 배려하는 태도 방식을 알 수 있었다. 세미나의 일본 학생들과 대화하면서, 일본인의 학문적 성취를 보며, 한국의 교육계의 문제점을 깨어두는 점에 대해 많은 생각을 하게 되었다.

2. 日韓の文化の違いと学び

2.1日韓の文化の違い

일본의 교육 열은 한국만큼 높다는 것을 알았지만, 문제점이 있어 훨씬 체계적으로 준비되어있는 것을 느꼈다. 하지만, 전반적인 교육은 일본의 수학과, 대학의 이름만을 중요하게 생각하는 한국의 학생들의 경우가 많았다. 반면에, 일본의 경우는 학생의 학문적 성취를 위해, 학과를 결정하는 것이nk차가 있고, 학생의 성공을 위해 학과를 결정하는 것이 있다.

일본의 교육 열은 한국만큼 높다는 것을 알았지만, 문제점이 있어 훨씬 체계적으로 준비되어있는 것을 느꼈다. 하지만, 전반적인 교육은 일본의 수학과, 대학의 이름만을 중요하게 생각하는 한국의 학생들의 경우가 많았다. 반면에, 일본의 경우는 학생의 학문적 성취를 위해, 학과를 결정하는 것이nk차가 있고, 학생의 성공을 위해 학과를 결정하는 것이 있다.

日本の教育熱も韓国と同じくらい高いということを知っていたが、問題点においてはるかに体系的に準備されていることを感じた。しかし、我々がインタビューした大学生の大半が名門大学出身なので、それ以外の大学はどうなのかを確認できなかった点が残念だった。
전부터 걱정하던 것이었다. 하지만 막상 들어가보니 너무나도 자연스러운 일본인들의 모습에 걱정했던 우리가 오히려 더 부끄러워졌다. 어깨에 살레가 밀지도 모르는 행동인데, 우리는 그런 광경이 왜 신기해서 일본인들을 홀extField却没有 적절하게 했었다. 하지만 일본인들은 정말 아랑곳하지 않고 목구멍 본인의 할 일을 끝낼 뿐이었다. 한국인의 입장에서 느끼기에 새로운 행동들은 이것뿐이 아니다. 한국 학생들과 만나면 ‘오늘은 일본 친구 누구 누구가 이런 행동을 했는데 역시 일본이라는 나라와 한국은 많이 다르다’라는 얘기가 자주 오고 갔다.

今回のセミナーを通じて改めて、日本人の考え方と違い点がかなり多いとを知ることができた。ちょっとした生活行動で感じられたものも多い。例えば、ご飯を食べる際、日本の学生たちは一緒に食べる生徒たちが全員座るまで待ってからご飯を食べ始めるなどという些細なことだ。特に、大衆風呂は韓国の学生たちが来る前から心配한 것으로, 실례가 될지도 모르는 행동인데, 우리는 그린 광경이וק 홀extField却没有 적절하게 했었다. 하지만 일본인들은 정말 아랑곳하지 않고, 묵묵히 본인의 할 일을 끝낼 뿐이었다. 한국인의 입장에서 느끼기에 새로운 행동들은 이것뿐만이 아니다. 한국학생들과 만나면 ‘오늘은 일본 친구 누군가 이런 행동을 했는데 역시 일본이라는 나라와 한국은 많이 다르다’라는 얘기가 자주 오고 갔다.

2.2 私の学び

日本人の些細な行動で感じた韓日間의考え方の違いについて話してみたい。韓国の場合は人の視線を本当によく気にする。いかなる行動をする時でも、相手の顔色を見て、比較する。それに比べて、日本の場合は少し違った意味で人をたくさん気にしてくれるところがある。しかし、それは徹底した個人性がある。

日本人は些細な行動で感じた韓日間の考え方の違いについて話してみたい。韓国の場合, 일본인들은 정말 아랑곳하지 않고, 묵묵히 본인의 할 일을 끝낼 뿐이었다. 한국인의 입장에서 느끼기에 새로운 행동들은 이것뿐만이 아니다. 한국학생들과 만나면 ‘오늘은 일본 친구 누군가 이런行動을 했는데 역시 일본이라는 나라와 한국은 많이 다르다’라는 얘기가 자주 오고 갔다.

日本人の些細な行動で感じた韓日間의考え方の違いについて話してみたい。韓国の場合は人の視線を本当によく気にする。いかなる行動をする時でも、相手の顔色を見て、比較する。それに比べて、日本の場合は少し違った意味で人をたくさん気にしてくれるところがある。しかし,それは徹底した個人性がある.

両国にはこのように相違点が存在するが, 事実そういう行動が出るようになった原因は
似ているのだろう。韓国は単一民族国家という理由でお互いに個人的な面まで共有しながら共同体を構成していく。日本も、和を重要視しながらお互いの調和で平和に生きることを追求する。こう見ると、単一民族国家を理念とする韓国と同じだろうと思うが、微妙な違いが韓日間の文化の違いを作り出す。日本の場合は個人が個人の席で与えられた仕事一生懸命しながら他人に被害を与えず、共同体を構成する。

セミナーをしながらこのような違いを感じたものの、それなりに新しい経験をしたと思う。韓国で経験した他人の視線を気にしていた環境から脱して、日本の個人性を経験することができた。特に日本の友達たちと交流をしながら大きく学んだ点は、人が生まれ育った環境が大きく異なるにもかかわらず、「友達」として団結することで理解して生活しながら人間の「町」を感じることができたという点だ。国籍は絶対にその人を判断できる物差しになりえないことを自覚し、人の温かさは言語を超えたものによって感じられるということが分かった。
セミナーレポート

柳美莉

1. グループ活動報告と学び

私が所属したグループは教育グループだったので、両国の教育システムに関したことを調べる活動をした。そして、その活動を通して両国の教育システムがどのような形で行われているかを知ることができた。

1.1 活動内容

私たちのグループは、両国の教育を比較する活動をした。特に学びが多かった部分は両国の大学入試前の学校の教育システムに関する事だった。事前活動で韓国と日本の大学入試前のことに関する調査をした。その結果、次のようなことがわかった。

(1) 韓国の学生は夜まで学校で自習をする。
(2) 日本の学生は部活をする人が多い。

セミナーが始まってからは日本の他の大学生たちを対象にインタビューをして大学入試前の通常のスケジュールを書いてもらったり高校の時の話を聞いたりしていろいろな情報を探ることができた。

1.2 私の学び

この活動を通じて、私は両国間の大学入試前の教育システムの違いに関して詳しく比べることができた。私がこの活動を通じて学んだことは、韓国は有名な大学に入るために子供の時からずっと入試むけの勉強をするのと反対に、日本は常に学校で部活動などを楽しみながら入試むけの勉強より自分自身が興味深く感じたことを中心の勉強をする。そして、日本より韓国の方が、社会の中でより良い環境で生活するためなどの理由で大学に入りたい人が多いことを分かった。反面、入試前の英語教育に対しては、日本より韓国の方が英語をより勉強しており、韓国の方が基本的な文章は中学生になったらほぼ理解できるということが分かった。この活動を通じて、両国の教育システムの中でお互いの良い部分を知ることができた。

2. 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーは、私にとって本、ネットなどの文を通して接した日本の文化を直接的に体で感じることができた初めての機会だった。直接に感じた日本の文化は、文章を通じて接したものよりもより近くに感じられた。

2.1 日韓の文化の違い

私が感じた大きな文化の違いは食文化に関するものだった。
普通の食事をするとき、韓国では箸とスプーンを使って。しかし、日本では箸だけを使った。箸の種類も韓国では鉄で作られたものが多いので、派手な色で作られたものは少なく、箸に派手な形を彫刻して作られた物が多かった。反対に、日本は木で作られた箸を使った。

また、韓国は食器を持たずに置いたまま食べるが、日本は食器を持ち上げて食べるという点が違った。韓国の食器は磁器で作られた物が多いので、重くて持って食べることはできない。
きない。だから食器を置いたまま食べる食文化が発達した。日本の食器は、薄くて軽かった。食器が軽いので、持って食べる文化が発達したかもしれないと思った。

2.2 私の学び

私は普段、箸よりスプーンを使ってご飯を食べる。だから箸だけを使ってご飯を食べるのはとても難しかった。ご飯を食べる時に、箸を使ってお米を取るのが下手だったので、きれいに食べることができなかった。おかずを食べる時にも、最初はうまく取ることができず、不便だった。ところが、毎食箸を使ってご飯を食べていると、慣れてきてだんだん楽になった。

日本でご飯を食べながら感じたのは、韓国は食器を持ちあげないので、箸とスプーンを一緒に使う方が箸だけを使うより食べる時により楽であるが、日本は食器を持ち上げて食べるので、スプーンより箸だけを使う方が食べる時もっと楽だと思った。そういった理由で、日本はスプーンではなく、箸を使う食文化が発達した可能性が高いと思った。
忘れられないセミナーを終えて
姜ウンソム

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私は、教育というテーマを選択したため、グループの活動は主に、日韓の教育方法やカリキュラムの違いについて調査することでした。日本の学生たちと会う前にそれぞれの国の学生を対象に学業成績の調査をし、日本に行った際には、一緒に東京大学を訪問し、東京大学に在学中の学生をインタビューしました。韓国で準備した質問は、高校の時にどのように勉強をしてきたのか、大学あるいは学科の選択基準が何かのか、進路を決めるときにどのような点を重視するかなどについてのものでした。その過程で、韓国のシステムについても説明しながら、多くの会話を交わすことができました。

日本側で用意した質問は、幼い頃から、各年齢別でのどのように勉強をしてきたか、大学あるいは学科の選択基準が何かのか、進路を決めるときにどのように勉強をしてきたかのものでした。その過程で、韓国のシステムについても説明しながら、多くの会話を交わすことができました。

1.2 私の学び
ずっと韓国だけに住んでいたので、韓国の教育システムにのみ慣れていた自分自身を、そして韓国社会をもう一度考えてみるときっかけになりました。韓国では、大学に通うまでには、ひたすら良い名門大学に通うために勉強をしています。ますます競争が激しくなって大学に行くために勉強をする年齢は早くなっています。このため、いくつかの問題が発生することになりますが、人々はそれを知りながらも受け入れるしかなくて、結局はその競争に参加することになります。しかし、日本の教育システムを見てみると、名門大学進学のための情熱は韓国と似ていますが、その数が韓国よりも少なくなく、自分がしたい勉強をするという学生がはるかに多かった。韓国の修学能力試験と同様のセンター試験を高校2～3年生の時に初めて、大学生に進学した後も、自分の適性を最も重視し、その上で進路を決定するというので、驚きました。実際、韓国の大多数の大学生は、他の人が認めてくれる大企業に行きたいので、自分の適性ではなく、就職に有利な専攻を選択する場合が多いです。

似て非なる日本の教育システムが気に入りました。自分の適性と素養を優先的に考えていくのは、韓国が学ぶべき点だと思いました。事前調査では限界があった部分を直接日本の学生たちと話をして深く知ることができる良い機会でした。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日本の人々は友好的である音は昔からよく聞かれました。しかし、日本に行く前まで、その親切さというのが普通の優しさだろうと思っていたが、実際に日本の学生とその他の人々に会って感じたのは私たちが思っている普通以上の優しさを持っているということでした。他国の日本人よりも日本の人々は親切で優しかったです。日本の学生たちと交流し、地下鉄を利用する際には、荷物も私たちよりも多かったのに席を常にお守りして置いてくれました。日本の友人同士で旅行をする時にも日本人に道を尋ねて手作りの地図まで描きながら案内してくれました。
で言いたいことの意味が合ったのか、意図が正しく伝わったかなどを継続して確認してく
れました。自分たちも準備で忙しい中、とても気を遣ってくれて、とても感謝しています。
日本で出会った人々の友好的な態度は、私の日本全体のイメージをかなり良くしました。

2.2 私の学び

利己主義が広まり、社会において人に対して思いやりを失った自分の姿を反省するきっ
かけになりました。もし韓国でセミナーが行われた時、私は私が受けたその思いやりと優
しさを彼らに施すことができたのだろうかと考えてみました。おそらく日本の友達、人々
から受けたそれらの半分しか施すことができなかったでしょう。そんな自分の姿をもう一
度見て、今回のセミナーで学んだ彼らの態度を身につけることが目標です。
私より年下だけど、大人っぽい日本人の友達

金善京

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
私は日本の学生は消極的だと思っていました。でも初日に会った時から荷物を持ってくれたり積極的に声をかけてくれたりして少し驚きました。それから、実習地の計画を立てるととき私たちは行きたい所へ連れ行ってするために一生懸命に相談してくれる姿にとても感動しました。私たちが花火大会を見たがっていたので連れて行ってもらいましたが、雨がたくさん降って結局見ることができなくなりました。日本の学生たちのせいでないにもかかわらず、謝る姿に思いやりにたくさんあふれていると思いました。

そして私が一番印象深かったのは、日本の学生たちの明るくて肯定的な態度でした。発表準備をしたりダンスの練習をしたりするときに、私は少し心配でした。発表とダンスの全てが完璧ではない状態だったからです。コミュニケーションがうまくいかない時、いらっしゃって不安になってストレスを感じました。日本の学生達もきっと大変だったはずなのに、全然そんな事を見せないで熱心に準備してきました。いつも肯定的で明るくエネルギーを失いませんでした。それで私たちは元気を出せましたし、発表も成功させることができました。

1.2 私の学び
意外に積極的でアクティブな姿に驚きました。それから、なにより日本の学生たちのまじめさと前向きな態度から学ぶことが多かったと思います。約束時間は必ず守って、他人を配慮してあげて何をしてもしっかりしている姿にすごいと感じました。それから、不満を口に出さず、いらいらしないでより肯定的に頑張る姿がとてもよかったです。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
日本の学生たちと一緒に実習活動のなかで発表準備とダンス練習もしながら一週間という時間過ごしました。実際に日本人と会って一緒に過ごして思ったのは、日本の学生たちは本当に配慮をたくさんしてくれて、大変なことがあっても表に出さないということでした。実習の日、私たちは外へ出てたくさん歩きました。その日は蒸し暑くて、ずっと歩いたので足がすごく痛かったです。韓国人学生同士は「あ、暑い。大変だよ。足が痛いね。」と自然におしゃべりをしました。そのとき気付いたのは日本の学生たちは全然そんな話をしていないということでした。きっとヒールの高い靴を履いていて足が痛いはずなのに、なぜそんな話をしないのか不思議でした。そこで私は足が痛くないかと聞いたら、「痛いね」答えてくれました。それにもかかわらずほとんど顔に現さなくて、私は驚きました。それから、地下鉄で席が空いたら私たちに譲ってくれるようにする姿に、私は感動しました。お茶をするとき、私は正座がとても大変だったけど日本の学生たちは全く何でもないよう見えました。終わった後に痛くなかったと聞いたらまた「痛い」と答えました。苦痛だからそういった話をしないから、私は本当に大丈夫だと思っていました。ダンスの練習をする時も日本の学生が転んで足にあざができました。きっとすごく痛いはずなのに、笑って「大丈夫」と言いました。このように、他人に迷惑をかけないために我慢する姿を見な
がら本当に大人だと感じました。
その一方、日本人の学生が感情表現をあまりしないので「辛くないのかな、大変ならば誰に話してもいいのに」と思いました。韓国人たちは自分の意見や感情表現に率直な方です。大変ならば誰かによく話をします。たまには、率直過ぎて傷付けるときもありますが、深い話ができてとても深い関係を結ぶときもあります。
韓国に帰って日本人先生に聞いた島国であるため、周りの人たちと良い関係を結ぶことが重要であるために生じた文化だと教えてくれました。そして日本人は言葉には魂があると考えているために言葉を注意することを言いました。これが文化差だと感じて、それぞれの長短があるのだろうと感じました。

2.2 私の学び
日本人たちの真面目さと人に迷惑をかけないようにする行動として、配慮しようとする姿を学ばなければならないと思いました。しかし、日本の学生たちは大変なときも、あまり表現をしないから先に私たちが気づいて配慮をするのが必要だろうと思いました。それで私が先に席を譲ったり、体調は大丈夫なのかと聞いたり、言葉にも少し気をつけるようになりました。
日本に来て気付いたこと

申秀珍

1. グループ活動報告と学び
1.1 活動内容
毎週月曜日に会議を通じての意見交換、LINEを通じての意見交換など無数の意見交換を通じて発表主題を選び、お互い資料を調べFacebookにアップロード。その課程を繰り返しながら主題を選び、お互い資料を調べFacebookにアップロード。そして迎えた出会い。代々木で三日、草津で四日のセミナーが始まりました。代々木では私たちの発表の主題に合う映画『箱入りの息子の愛』を見に行きました。映画を見た後食事をしながらお互いの考えを話し合い、その中から私たちの発表主題に合う感想をまとめました。
代々木での日程を終えて草津へ行った私たちは、以前のテレビ会議やラインでの交流とは違って顔を見ながら話し合えたのでたくさんの意見のやり取りができました。たとえば、発表に以前はなかった意見を聞き入れることができました。
発表準備をしながら私たちは出し物の練習もしました。出し物はラインで話し合った結果、ダンスをすることにしました。日本に来る前にも集まって練習しましたが簡単な振り付けを覚えただけであまり進んでいませんでした。日本に来てダンスを完璧に覚える山本さんと吉村さんの助けで皆の練習は進められました。発表準備と出し物の練習をともにするのは大変でしたが、楽しくできました。

1.2 私の学び
ずっと日本語を使うことに慣れなかったけれども一緒に生活して分かったのは、日本人は「～しにくい」とか「キツイ」と言わないところでした。もちろん、ホストの立場というものの、私たちの専攻が日本語だって言ってもせいぜい言葉が通じるだけで、その文化やルールまでは正確にわからていないという点があったかもしれませんけれど、いつもの私たちのことを気遣って「疲れてない？」と聞いてくれるその優しさが嬉しかったです。その点に関しては本当に学ぶところが多かったです。私は自分が疲れたとか嫌だとすぐ顔に出すタイプなので、どうしてそこまで優しくできるのかと考えました。人間関係でもこういった風に人に優しくすれば円満にできるし、私に対する他人の考えも変わると分かりました。
また、映画を見る前に空き時間があったので明治神宮や原宿などへ寄り道をしました。そこで明治神宮について簡単な説明を聞きました。そのとき思ったのは、私は誰かに韓国の宮廷や文化財を説明できるくらいに分かっているのかということでした。結論から言うと「分からない」でした。外国語を専攻していて今よりももっと外国人と話し合う機会が多くなるはずなのに分からないということがちょっと恥ずかしくなり、私も誰かに説明できるくらいに自国のことを勉強しようと思いました。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
旅行で日本に来たときに感じたことと同じですが、今回のセミナーで感じた文化の違いは「とにかく優しくする」とことでした。たとえば自分が知らない何かを聞かれると調べて
でも教えてくれる日本人の優しさなどを今回のセミナーでも感じました。また、草津で名前は知らないけど私が行きたい温泉を調べてくれたり実習のときに皆が行きたいところを調べてくれたりいろいろと親切にしてくれました。それが違いないと思います。韓国人は道を聞きてもその場所や行く方法を知らないときは「知らない」と答えます。聞いた人はまた誰かに聞かなければならない状況になります。

これは少し違うかもしれませんが「ルールを守る」ことも一つの優しさだと思いました。代々木で借りたシーツを「元通りに折って出してください」と聞いたときは「そこまでしないでどうせ洗うんじゃない」と思いましたが考えてみると出したシーツを運ぶ人や管理する人に対しての優しさだと思いました。韓国は使った状態でそのまま出す場合もあります。元通りとまではいかななくてちょっとした掃除くらいはすることに比べ、それをきちんと守る姿を見て驚きました。

2.2 私の学び

みんなの優しさ見て、好き嫌いがはっきりして嫌いな人にはついつい優しく行動ができなくなる自分が嫌だと思いました。それで私は自分がもっと優しくすれば私も相手も気持ちよくなるといいねに思いことも一つの優しさだと思いました。代々木で借りたシーツを「元通りに折って出してください」と聞いていたときは「そこまでしないでどうせ洗うんじゃない」と思いましたが考えてみると出したシーツを運ぶ人や管理する人に対しての優しさだと思いました。韓国は使った状態でそのまま出す場合もあります。元通りとまではいかななくてちょっとした掃除くらいはすることに比べ、それをきちんと守る姿を見て驚きました。

ルールを守るということをもう一つの優しさだと言いましたが、私が日本文化に関する本を読んでも日本文化の授業を聞いても「日本人は迷惑かけるのを嫌がる」と紹介されていたので「他人に優しい＝迷惑かけない」ことだと思いました。心の中で他人を思いやる優しさ、それをいつも身に付けていることにとても感動し、歴史の中の韓国と日本の関係で生まれた日本人の良い価値観が少しはなくなってしまいました。そしてこれからもこういう機会が多くなりどんどんなくなるといいと思いました。
体感した両国

李京恩

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私は普段から韓国と日本の文化の違いに関心があったのですが、今回のセミナーを通じてその違いにさらに興味を持ち、深く理解することができました。事前学習では日本側とFacebookで互いに話し合ったり、在日韓国人の友人から両国の恋愛や嫁と姑の葛藤について聞いてみたり、いろいろな番組や本などの資料を調べてみたりしながらいくつかの違いを知ることができました。もともと知っていた事実ではあったのですが、事前学習を通じて日本の方が韓国より個人主義である、そして日本の女性の方が積極的であるということを改めて認識しました。

1.2 私の学び

今回はドラマを通してお互いの文化を比べてみようとしました。今まで考えたことはなかったのですが、資料を調べているうちに2つ気づいたことがあります。

第一に、日本のドラマの中で嫁と姑の軋轢を描いた作品がほとんどないだけでなく、主人公の母親がドラマに出て主人公と対立があるドラマが韓国に比べると格段に少ないということです。韓国には嫁と姑のドラマはもちろん、そのようなトーク番組まであります。日本は嫁と姑が出たドラマ自体がとても少なくて、なぜだろうとその理由について興味をそそられました。実は、その理由には韓国人の家族主義と日本人の個人主義がありました。日本のドラマで嫁・姑の軋轢があり出ないのではなく、実際の日本の姑は「息子は結婚すると嫁と二人で新しい家庭を築くから、その後は干渉しない」と考えているからです。日本のドラマで嫁・姑の軋轢があり出ないのは、実際の日本の姑は「息子は結婚すると嫁と二人で新しい家庭を築くから、その後は干渉しない」と考えているからです。その反面、韓国の姑は「結婚しても私の息子という事実は変わらないから、嫁との関係にまで立ち入ることは当然」と考えています。日本人は結婚した息子に対してあまり立ち入らないことが、韓国人は干渉することが息子への配慮だと考えているようです。

第二に、韓国の女性に比べると日本の女性は恋愛について積極的だということです。韓国の女性は自分から告白することはありませんが、日本のような女性は普通に先に告白する人もいるということを知って、互いにびっくりしました。日本側の質問は「じゃあ、女性から好きになったらどうするの？」でした。この場合、韓国の女性は片思いでも相手に告白させるようにしたり、普通に待ったりします。恋愛に対しては消極的かもしれませんが、実は、韓国には「男は天である」という昔の家父長的家族制度がまだ残っているのです。だから、女性から告白するということは結構大胆だと言われています。延いては、さきほどの嫁と姑の葛藤にも昔の考え方と関係があります。「男は天である」上、女性は夫から十分な愛情を与えられず、自分が言いたいこともはっきり言いたいことができず、その不満を満たしてもらいたいという考え方がどんどん息子への執着になり、嫁と姑の軋轢を生じるそうです。しかし、日本は娘より息子が好きという考え方もあるほど強くなく、夫からも見下されるように扱われたこともあまりないので、執着が少ないのかもしれません。このように、恋愛と嫁・姑のパトロンは決して別の事柄ではないのです。
2. 日韓の文化の違いと学び

2.1 日韓の文化の違い

様々な文化の差異の中でも、特に言語行動の違いに気づきました。まず、韓国人は何でもはっきり言う人が多い反面、日本人はだいたい曖昧な表現を使っていた。自分の意思を直接言わず、相手から分かってくれるのを待っている日本人が多いと感じました。例えば、ちょっとした集合時間に間に合わない場合、日本人は「そろそろ集合時間になるんだけど…。」と言いました。一方、韓国人は「시간 다 됐어. 나와. (時間よ.早く来て。)」と言いました。同じ状況でもニュアンスや言葉が全く違いまし。うふうに日本人は言葉を最後まで言わず、意見も強くはアピールしないのだろうとしました。最も頻繁に使っていたのは、「～はちょっと…」、「～だと思うけど…」、「～かも…」の3つです。一つのエピソードで、日本側の皆と寝る前に喋っていたら一人がすごく眠そうだだったので、「○○ちゃん、今眠いよね？」と聞いたら「うーん…眠いかも…」と言いました。あまり大した違いではないと思われるかもしれませんが、よく考えてみるとこの状況で「음...졸릴지도...」と答える韓国人はほとんどいないと思い、大きな違いを感じました。韓国人だったらきっと「眠い」と答えたのではないかなと思われるかもしれません。

次に違いを感じたのはあいづちです。日本人があいづちをよくするというのはもちろんです。既知のことなので、これまであまり気にしたことはなかったのですが、今回のセミナーを通じて、相対して会話をしたいときあいづちは必須だと実感しました。私がグループの日本側の皆によく言われていた言葉は、「そうそう」、「そうだね」、「うーん」という3つです。「○○ちゃんは？」、「そうだね」などでました。私が一言だけ発した際も必ず「えーそうなんだ！すごいー」とあいづちしてもらえて、すごく嬉しかったです。また、「○○ちゃんは？」というのはあいづちに思わないかもしれません、これも日本人の心遣いです。自分だけ話すのではなく、相手の話を聞いて共感したり質問したりすることもよくありました。これに関して、前から気になった「ノリツッコミ」という、テレビでもよく出ているお笑いがあまり理解できなくて日本側に聞いてみたところ、「正確には知らないけれど、自分が思うには日本側がることが習慣的にしているから、まずはあまり疑うなと自然と『うん』と言って、後で考えてみるおかしいことに気づくことから始まったのではないか」という面白い答えがありました。

最後は、日本人はよく受身を使っているということを知りました。セミナーに参加する前から私が気になっていたのは、「～と言われた」という言い回しでした。この言葉を韓国語に直訳したらすごく不自然だから、普通に「～と聞いた」でも大丈夫なはずなのになぜわざと受身を使うのかと不思議だったのです。でもよく考えてみると、誰かに言われた言葉を「～と聞いた」という日本人はあまりいません。そして2つの言葉は少し意味やニュアンスが違うと思いましました。日本側にも「韓国語で受身ってあまりないの？」と言われて、皆で普段使っている受身表現について考えてみたのですが、どれも話せられず、「足を踏まれる」、「怒られる」などは言うかもしれません、「袖に被せられる」、「子どもに泣かれる」は絶対言わないと言われました。そうしたら「じゃあ、泣かれることは韓国語で何ていうの？」と言われたのですが、正解は韓国語にはありません。もしこのニュアンスを伝えたければ、普通に「子どもが泣いて困った」となります。こういう違いが面白い反面、すごく難しいと感じました。

2.2 私の学び

このセミナーを通じて互いの言語行動の違いを知ることになり、日本人っぽく会話する術も学習できたので、とてもありがたい思い出でした。実は、その術は前述した3つとも関連があります。
まず、自分の意見をはっきり言うのは日本人に対してはむしろ失礼になるかもしれません。他人に気配ることに慣れた日本人と会話するときは、自分の意見を控えめにするのもいいかもしれません。

次に、あいづちは円滑な日本語会話をするためには一番大事です。日本人の多くの人はリアクションが大きいので、普段他人の話を黙って聞く外国人でも日本人と会話するときには、あいづちと大きいリアクションをした方がいいでしょう。それによって、相手の日本人は楽に落ち着いて話せると思います。

最後に、受身も同様に慣れてないかもしれませんが、上で示した 2 点とは少し違った意味で勉強が必要です。あいづちや気配りは意識すれば、身につけることは比較的簡単だと思います。しかし、日本語の受身は韓国語に訳すと文法的に正しくない表現も多いので、知識がないと意識して頑張っても表現を間違ってしまう可能性があります。ゆえに、注意してしっかり勉強しなければなりません。
ギャップを通じて学ぶ

姜秀珍

1. チーム活動報告と学び
1.1 活動内容

韓国で遠隔交流によってセミナーを進めていた頃、韓国の学生たちと細部テーマを決め
る過程でドラマのような映像媒体を通じて各国の文化を比較しようとした。様々な映像
媒体の中でグループのメンバーに親しまれているドラマを中心に韓日文化に関連のある小
テーマについて意見を交換した。会議を進める中、韓国ドラマを見た外国人が事実と実際
の韓国文化に誤解しているという意見があった。例えば『冬のソナタ』のペ・ヨンジュン
のように過度に優しい韓国男性の姿と極端に描写されるドラマの嫁姑の葛藤などがあっ
た。特に、日本人のグループメンバーと情報共有を通じて嫁姑間の葛藤は日本ドラマで描
かれる可能性が低いことを知ることができた。このような嫁姑の葛藤を扱う韓国と日本ド
ラマの違いを通じて両国の家族文化を分析することができると考えられた。このような原
因は、韓日に共通して現れるものもあるだろうが、韓国だけの慣習によって現れるものと
韓国人にとっては新しい日本だけの家族文化、慣習をよく表すことができると考えた。そ
して、日本の家族文化を通じて韓国の嫁姑の葛藤の解決策を考えようとした。また、日本グ
ループメンバーと情報共有をするうち日本ドラマではママボーイ（マザコン）を家族文化
の一部と扱うことになった。これを介して、現実と違って嫁姑の葛藤が過度に描写されて
いる韓国ドラマに対する誤解を解決できると思った。このテーマで、韓国ドラマで嫁姑の
葛藤が頻繁に登場する原因と日本のドラマでは取り扱われる比較的頻度が低い原因を調べ
ようとした。

「嫁姑の葛藤」が韓国のドラマをよく示しているテーマなら、日本のドラマをよく示す
のは「草食男子」だった。日本ドラマに登場する「草食男子」と「干物女」などは日本の
ドラマに端を発し、韓国ドラマにも登場し、実際韓国人たちにも使用する新造語となった。
ちょうど日本で草食男子が登場する映画が上映中だったため、映画を通じて草食系男子を
よりよく理解することができた。映画やドラマで簡単に接することができる「草
食男子」と「干物女」は日本だけでなく、韓国の新しいカテゴリーとしてもよく示して
いる。こうした新カテゴリーは両国のドラマでロマンスのキャラクターとして登場するが、
現実では、近年の経済不況と関連して説明できようと思った。単純にドラマで登場する新し
いタイプに対する興味を持つようになったという現象についてのみならず、こうした若い
世代の姿が見られるようになった原因を説明しようとした。また韓国のドラマには日本の
ドラマの「草食男子」と対照される「肉食男子」が主に登場する違いを見つけた。韓国と
日本のドラマの男性像が異なって表される理由について調べた。

1.2 私の学び

セミナーを通じて、従来考えられなかった原因を見つけることができた。嫁と姑の折り
合いについては家族文化の違いから始まった場合もある。しかし、私たちは日本と韓国が
ドラマの放映構造の違いから生じるという点を発見した。韓国ドラマは日本ドラマに比べ
てドラマの放映回数と時間が長いため、主人公の周辺人物との関係を扱うことが容易にで
きた。しかし、日本ドラマの場合、ドラマの間に流れるCMによって展開の流れが切れる
こと、韓国のドラマより放映回数が短い点、放送時間が短い点などによって主人公中心に
ドラマが進行されるようになる構造上の制限があった。
草食系男子に対する調査を通じて自発的か受動的な2つの類型が発見された。この2つの類型はどちらも社会的背景が原因となっている。長期化された景気低迷で韓国と日本の若い世代は時代に合わせて変化しているということであった。ただし、こうした新しい私意タイプの人間が時代に適応するための方法であると考えられた。また、韓国人男性の肉食性を比較しつつ、現実の男性像と肉食系男子キャラクターやが頻繁に現れる原因について考えてみたのだ。これについて私たちは日本の男性と韓国の男性の最も著しい違いである「軍隊」について焦点を合わせて説明することになった。韓国の男性は軍隊で家族を、国を守らなければならないことを目的に2年間訓練を受ける。このような過程を通じて韓国の男性たちは「男なら女性を守らなければならない」と強要されることになる。したがって、ドラマに登場する肉食男子の姿は戦争後、社会が要求する韓国男性の姿が反映されたものである。この部分について発表準備を進め、韓国の芸能番組を紹介した。韓国女性たちが見ても軍隊は難しくて大変なところだが、日本の学生たちが「虐待」と描写するほどさらに苛酷に映し出された。このような過程の有無によって、社会で要求される男性像の変化が生じたようである。

2. 日韓の文化の違いと学び
2.1 日韓の文化の違い
遠隔交流をしていたときは、日本の学生たちと大きな文化の違いは感じられなかった。しかし、日本でのセミナーをしながら興味深い文化の違いを経験することができた。「人に迷惑をかけようとしない」日本人の特徴から始まる責任感を目にすることができた。実は以前韓国人にも「人に迷惑を及ぼそうとしない」姿勢を持っている人がいるために文化の違いを大きく感じないだろうと思っていた。しかし、日本の学生たちとセミナーを通じて生活してみた結果、些細な習慣から韓国人とは他の責任感を感じることが出来た。おそらく、このような日本人特有の責任感は小学校から強調され、教育に起因するものとみられる。韓国では責任感を育むような教育を行わないため、韓国人が日本人のような責任感を持つことは容易でないものとみられる。
また、日本の学生たちと対話を交わしながら、自分たちの学校に対する高いプライドを感じることができた。これは韓国と日本の他の大学入試制度で始まったものと思われる。韓国の学生の場合、志望する学校に志願する場合もあるが、ほとんどの生徒は修学能力試験を通じて点数に合った学校、学科を決定する。そのために自分の前で勉強する大学や学科に対する考えが浅いのが事実だ。しかし、日本の大学入試の場合、自分が志望する大学に向けた受験勉強を行うことで、進学しようとする大学と学科に対する理解が高い状態と考えられる。これがお茶の水大学の学生たちに自分たちの学校に対する高いプライドを感じさせた原因なのかもしれない。

2.2 私の学び
日本の学生たちの責任感が韓国の学生たちに影響を与えた。外国語で進行されるセミナーに困難を感じたのは事実だが、日本の学生たちのセミナーに対する責任感と真剣さに触発され、もっと使命感を持ってセミナーに取り組めた。日本の学生たちの姿勢が韓国の学生たちにも相乗効果で9泊10日で意味のある旅にすることができた。韓国に帰ってからも日本の学生たちの責任感は私にとって新鮮なカーティギャップだった。日本の学生たちと生活を通じて文化の違いを感じるようになった。日本人に特徴的な事例を経験して彼らの長所を学ぶことができた大切な機会だったと思う。たとえ韓国と日本が歴史によって外交
関係が悪化しても、韓国人が日本人に学ぶ点まで無視してはならないと思った。実はセミナーに参加する前、留学生や外国の学生との交流に対して消極的だった。これを通じて学ぶことができるとは多くないだろうと思ったからだ。しかし、今回のセミナーを通じて日本の文化を経験して違いについて学びながら他の国の文化を知っていくことに対する重要性を悟ることができた。残った大学生の期間、国外のいろいろな学生達と交流しながら、他文化に対する理解を高め、新しいものを学びたい。
第9回 日韓セミナーを終えて
—もやもや感の先にあるもの

松野志歩（お茶の水女子大学 大学院生）

今年のセミナーが始まる前、前回や前々回の報告書を読みながら、わたしの期待と疑問
は、どんどん膨らんでいました。

日本でのセミナー開催は、震災をはさんで3年ぶりです。3年前に参加した学生によると、
その頃の連絡手段は、Eメールだけだったそうです。今年は去年と比べても、FaceBookや
LINE、カカオトークなどのSNSでやりとりするグループも増え、事前交流の方法が
多様化してきました。また、セミナー自体も、今回初めて日本の学生も7日間寝食を共に
したり、歓送迎会や文化体験、研究発表会などの運営を学生たちに任せたり、と学生主体
が強まったので、SubのTAとして参加させてもらう身としては、楽で楽しみばかり多い準
備期間でした。おそらく3年前とも、韓国で開催された去年とも全く違ったセミナーができ
あがるのだろう。その中で自分が何か役に立てるのかという不安も覚えつつ、7月25日
を迎えました。

初日、代々木オリンピックセンターで韓国のみんなを迎えた場面が強く印象に残ってい
ます。バスから降りたみんなの顔は、TV会議で見慣れた顔で、だけど動いているのが何
だか不思議で、芸能人に会って話しかけるような気持ちになりました。その時、今までに
ない、新しいスタイルの交流が始まった、と思いました。

1週間にわたって話し合われた各グループのテーマ、「共生」「文化」「報道」「教育」「歴
史」は、どれも多くの人が生涯をかけて取り組んでいる問題だと思います。それらの重大
なテーマに、真っ向から挑んで短期間に答えを出そうとしているみんなの姿に、尊敬の気
持ちを感じました。おそらくみんなの中に、大小さまざまな、もやもやした感じが残った
のではないでしょうか。それでも、臆せず疑問点や課題を共有し、外国語でもやもやを表
現しようとする努力に、我が身を反省しました。

実は、みんなの準備を見ながら、発表を聞きながら、忘れていた大学の学部生時のほろ
苦い思い出が、たくさんよみがえってきました。例えば、国際交流サークルに入りながら、
いつも日本人ばかりと遊んでいた日々。大学3・4年時のゼミ合宿で、いろいろな人に話を
聞くほどに頭が混乱し、最終日にはぼろぼろになっていた記憶。これら学部時代に味わっ
たもややや、10年以上経った今でもすっきり解決はできていません。でも、その時の気
持ちや友人たちは、わたしの中の核になっているような気がします。

もしかしたら、日本と韓国の関係も、そのようなものかもしれません。お互いに知れば
知るほど、分からないことも増えていきますが、もやややをお互いに共有することが大事
と思います。両国の間には、知らないということや、こうしたもややを感じないこと
自体が恥ずかしい事実が存在するのではないかでしょうか。わたしたちはまず、両国間と自
分の中にあるもややを認め、それに溺れてしまうないように、でもずっと忘れないと考
え続ける必要があると、セミナーを通じて強く感じました。

この報告書を書きながら、もやややした気持ちがよみがえってきています。ネット
環境が整えられず、皆さんの交流と発表準備に迷惑をかけてしまったことや、もう少し
TAとしてできたことがあったのではないか、など。もろもろだったらなくて申し訳なかっ
たです。でも、わたし自身はとても楽しませてもらいました。あとはもうしばらく、この
もやもやと向き合いたいと思います。
最後になりますが、このセミナーに参加する貴重な機会を与えてくださった森山先生、いつも学生に的確なアドバイスをしていた2人の金先生、笑顔で同じハングルを何度も教えてくれたTAのナレさん。セミナー開催とこの報告書作りのために何か月にもわたりご尽力いただいている両大学のスタッフのみなさん。そしてなによりも、オリンピック選手のように感動を与えてくれた日韓の1人1人の学生たちに、感謝したいと思います。参加できて幸せでした。ありがとうございました。
学生間の交流から見える日韓の新たな関係構築の可能性

チョナレ（お茶の水女子大学 大学院生）

変化が激しく、問題が国境を超えて同時に多発的に起こる現代社会において、機敏な問題解決能力のために要求される頭の良さとは「曖昧さに耐えられる能力」だという。答えがはっきりしない状況で、安易に答えを出そうとせず様々な可能性を考えられる能力、今回このセミナーを通して得られた成果の一つとして、このような能力を育む機会を提供したことを挙げられるのではないだろうか。

韓国と日本は「近くて遠い国」という言葉が表しているように、あらゆるレベルで交流が活発に行われている一方、昔から対立が続いており、問題は今も様々な形で频発している。そのような状況の中での個人間の交流は、社会的雰囲気や個人の気持ちを混ざして感じさせる可能性がある。実際、このような葛藤は自分が韓国人というアイデンティティを持って日本で生活しながら時々ぶつかる問題でもあるため、期待半分・不安半分でこのセミナーを迎えた。

7日間にわたり皆が行動を共にしながら考え、向き合ったテーマはどれも正解がなく深い考察が必要な問題である。そのような問題と向き合うと同時に新しい友人関係を作るという場での中で学生の皆は頭も心もフル稼働して取り組んでいた。合宿中のプログラムの運営の多くも学生が担当していたため、充実している分、負担も大きかったと思う。

しかし、合宿中の皆の姿は私の中を一変し、責任をもってタスクを遂行していくうちに、みんなで仲間になっていき、最後の日には泣きながら別れを惜しんでいた。それは自分だからこそ出せた感情であり、この会は私にとって貴重なものとなった。

取り組んだ課題の明確な答えを探すことは難しかったと思うが、一緒に考えることで大切な仲間を得た学生たちの顔はキラキラと輝いていた。この時代の生き方をこの子たちは掴んでいたのかもしれない。そう思った瞬間に、今まで自分にはこのような機会があまりなかったことに気づき、学生たちに一種の嫉妬心さえ覚えた。

個人のアイデンティティは国家と密接に関係しており、それなしに説明することは難しい。しかし、国家の価値観と自分を同一視しては個人間の交流は発展しない。国家の価値観の対立に起因する問題を、協働して解決すべきものとして認識し、同等の立場で話し合うといった成熟した関係の一端を、このセミナーから窺えた気がする。
日韓—相互理解のための文化意識における基礎知識
——文化相対主義の次の段階へ

金曙泳（同德女子大学校）

日本と韓国は長い歴史を通じて対立と反目を続けてきました。両国の間にはかつての文禄・慶長の役、また現代の二次世界大戦など、大きな戦争が何度もあって、今まで協力と競争、また侵略と非侵略を繰り返してきた両国の間には他のどの国々よりも深い溝が存在しています。近来にはワールドカップを共同開催したり日本で韓流が流行したりするなど、日本と韓国は一時でありながらも相互理解と協力が深まるようでありました。しかし、最近の両国の関係をみると、未だに真の相互理解と同伴者の意識の定着は未だに程遠いような気がします。このような現実の中で今回のセミナーに日本と韓国の学生たちと参加した私は次のような一連の疑問が思い浮かびました。

日本と韓国は相互理解が出来るのか。
そして、私たちは相互理解を本当に願っているのか。
また、それを本当に願うのであれば私たちはこれから何をどうすべきなのか。

私は以上の問いに対して結論から先に言うと、「根本的に人間を全ての思考の中心において考えること」だと思います。皆が認めるところだと思うが、どのような価値も人間が人間らしく生きる権利以前に存在しません。つまり、全ての人間は生まれ育った文化の中で疎外されず、また差別されず平和で自由に暮らす権利を持っていますし、それは他の価値よりも優先されることであります。もちろん現実には国家や民族など、私達が属している共同体のためのより大きく見える大義を何より優先し、大事であると信じている人々もたくさんいると思います。そして私もそのような大義の為に生きることも意味があることで、価値のあることであると思います。それは、そのような努力が国など私たちは共同体をより大きく強く成長してくれましたし、他の共同体から私たちの命と財産を守ってくれたのも事実であるからであります。しかし私は、究極的な話ではあるが、国民のような一般の共同体の構成員が幸せではないかし、いわば一方的な犠牲を強いる国家と民族のような共同体にどのような価値を置くべきであるのかという疑問を持っているのです。個人の犠牲を基盤としたある共同体の繁栄が果たしてどこまで有効であるでしょうか。人間を中心においていない共同体意識は、極端には人間を戦争の駒のような消耗品に転落させてしまう危険を抱えています。いつか何かの大きな大義のために我々は共同体のために自らの意思に反する犠牲を強要される可能性が常に存在しているからであります。もちろん、先に述べたように、共同体のためにある程度の個人の犠牲は必要でありますし、それを通じてお互いの利益を向上させるという姿勢と努力も尊重すべきでありますし、とても意味のあることだと思います。しかし、構成員の生命と尊厳を軽くしながら、必要なない領土紛争などの消耗で意味のない戦いに共同体が加わることは断じて許されないことだと思います。それは言うまでもなく何より人間の生命と尊厳が大切だからであります。

一方、以上のような共同体の内部における人間中心的思考は、共同体と共同体、つまり特定の文化圏の間または国家間の問題に拡大させることも可能であります。他の共同体の権
益を阻害するまでして自分が属している共同体の繁栄だけを得ようとする帝国主義的発想の危険性は、かつて二回に渡って起きた世界大戦の惨状から十分に確認できましたし、我々は現在にも頻繁に起こっている数多くの局地戦と紛争の中でもその残酷な結果を簡単に目撃することができます。ここで私は、私達全ての人間は自分が生まれ育った特定の共同体が享有する文化の中で幸せに暮らす権利を持っていますが、それは他の文化或は他の共同体の人間の犠牲と戦を踏み台にしてはいけないという前提をと言っておきたいのです。誰もが自分を願ってない原理や方法、そして目的によって自分の生活様式、つまり文化を強要されはいけませんし、文化はそれを享有する人自らの決定によって存在しなければなりません。例えば、日本人の文化は日本人のものでありまして、他の文化的な対象になられませんし、また他の文化を持って振り返られない存在でますので、それ自体でその存在の意義や意味は完結性を持っていると思います。ちなみに、ここで日本人というものは、人種的・血統的・地理的に演による定義ではなく、構成員自らの判断に基盤する定義である点を言っておきたいと思います。従って私たちは、お互い異なる文化を持つ他の共同体を尊重する必要があるのです。全ての人間は自分の文化を享有し、発展及び維持させていく権利を持っていますし、他の文化の犠牲によって成立するものでもなく、優劣判断などの対象になる理由もまたどこにもありません。つまり、「文化相対主義的」な観点から異文化との関係を規定する必要がありますし、それは人間がその文化の中心にあるという考え方から起因するものです。

しかし上記のような文化相対主義には見落としやすいもう一つの大事な前提があります。それは他ではなく、「人類普遍的価値」、つまり人間中心的思考という次元から文化を見なくてはいけないということです。これは、あらゆる文化が尊重されなければならぬことには間違いありませんが、その全ての文化的全ての全てが絶対的に正しいとは限らないということです。なぜならば、人間が生まれ育った環境で自然に自分の言葉を使用して生活するに際して幸せになる権利、それは文化自体から由来するものではなく「人間中心的思考・人類普遍的思考」から生まれるものであるからです。従って、特定の共同体の文化の存続を保全の以前より大事な点は、その文化の中で我々が思う人類普遍的価値が尊重されることが出来るのかという点である。どの文化に属しているにせよなどの文化を自分の文化として認識するにせよ、その人間が自由かつ幸せでなければならないことが何より大事な点であることは全ての共同体の文化を貫く共通の原理であると思います。

まとめると、私達は人類普遍的価値観を基盤とした人間中心的思考を持って自分の文化を自ら享有して発展するかに存続しなければなりませんが、その時に前提になるものは同じ共同体の構成員あるいは他の共同体の構成員の犠牲と戦を踏み台にしてはいけないという考え方であります。よって日本と韓国、韓国と日本は、お互いの文化その中でも人類普遍的価値観に相応しい文化を尊重するべきでありますし、それは絶えない交流と理解のための努力を通じて可能になると思われます。そしてそのような努力はそれぞれの構成員の無意味な犠牲を食い止め、人々が人間としての尊厳を与えられてくると思われます。もちろん、今の現実を考えてみると簡単ではない道のりであり、難しいことは誰もが知っていることだと思います。しかし、だからこそ今日本と韓国がお互い理解しようために努力しなければならない時期でありますし、かつてないほど切実にお互いの協力が必要とされる時であると言えますでしょう。そして、その鍵は誰でもなく私達の世代が握っていることを忘れてはいけないと思います。

P.S. 私が同徳女子大学の学生を引率して日韓大学生国際交流セミナーに参加したのは今年が最初のことであり、よって経験もない上に不備な点が多く、韓国の学生たちの
みならず、日本の学生たちにもあまり良いアドバイス・支援などを与えることが出来なかったと思って本当に申し訳なく思っています。しかし、私は今回のセミナーを熱情的に準備して、またお互いの心を分かり合えようと頑張る日本と韓国の学生たちの姿を見て多くの感銘を受けましたし、このような心をこれからも多くの学生に伝えていきたいなあと思うようになりました。短い時間でありましたが、今回のセミナーは大切な思い出と経験として韓国の学生たちに残ると思います。この場を借りて、森山先生とチョ・ナレさんと松野さん、日本の学生の皆さん、そして韓国の学生の皆さんに感謝の言葉を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。そしてお疲れ様です。
居場所を共有した中での主体的な対話と協働

森山新（お茶の水女子大学）

第9回を迎える今回のセミナーで大きく進展をしたのは以下の2点であった。

第一にセミナーの全期間で合宿を行い、対話と協働の場を確保したことである。講演でも述べたように、本セミナーは過去と国境の壁を越えられずにいる東アジアの、とりわけ日韓の学生が、日韓と東アジアの共生を実現するための道を模索することを目指している。そのために前回からTV会議システムを導入し、毎週のように遠隔の事前交流を続けてきた。今回はそれに加え、セミナーの全期間、日韓の学生が寝食をともにすることで、共生のための対話と協働の場を確保した。韓国での開催では前半はホームステイ、後半は研修所での合宿を行ってきたが、日本での開催の場合には、前半は韓国側の学生が大山寮に宿泊しており、前半の交流が十分とは言えなかった。それで今回は大山寮をやめ、代々木リンピックセンターに日韓の学生が寝泊りすることで、セミナー実施期間すべてで合宿による親密な交流を可能にした。

第二にセミナー運営の多くを学生にゆだねたことである。それにより、学生の姿勢が受身にならず、自らが築き上げるという意識を高めた。前回の韓国でのセミナーでは韓国側の学生の主体的で熱いおもてなしに日本側の学生すべてが大いに感激したが、今回は日本側で、学生が先頭に立ち、学生がアイデアを出し合って企画した。5つのグループは、それぞれ、報道グループが歓迎会（25日）、文化グループが講演会（26日）と研究発表会（29日）、教育グループが日韓文化体験（26日）、歴史グループが草津・白根山観光（30日、31日）、共生グループが送別会（30日、8月3日）をそれぞれ担当したが、どれも学生たちが学生らしいアイデアを持って企画、運営した。

最終日、東京に着いた我々は、ひそかに準備した寄せ書きノートを韓国側の学生に手渡し、韓国側の学生に涙で喜びと別れの悲しみを表現、それに日本側のメンバーももらい泣きする結果となった。学生にゆだねることはある意味不安もあり、失敗も覚悟しなければならないが、最終日のその光景は、学生に運営を委ねてよかったとの思いを抱かせてくれた。また学生たちが国を越えて一つのゴールを目指して協働する経験は、今後グローバル時代を生きる彼女たちに大きな経験となったし、国や政治が見えない国境の壁を私たちは越えることができるということを確信できたに違いない。

もちろん1学期間の遠隔交流と1週間の合宿できることは限られている。しかし今回の経験は、これからグローバルな心を持ちながら、日韓を、東アジアを、そして世界をまとめる力と自信を、彼女たちにあたえてくれたと信じている。

今回の経験が今後、フェイスブックや交換留学という形に変えて、継続、発展していくことを願ってやまない。
報道

動機と目的

動機

韓日間でも最近は社会文化的な交流が増加している。
しかし、韓国と日本のように加害者と被害者であった国は、
接触の頻度の高さにも関わらずなお誤解が深まり、偏見が
固定化されるのではないか？

これに対し韓日の報道の特徴と違いを比較してどのような影
響を与えているのか調査した。

目的

受信者が一つの事実を曲げないように正しく受け取ること
ができる。
その事実に対して様々な角度からの意見を知り、偏見なく
自分の意見や考えを持つことができる。
-それのような報道のためににはどうすればよいか？

5月13日、日本の政治家、橋下徹氏が「慰安婦」に関する発言をした。
日本と韓国でどのような報道をしたか、
この問題についてのTVと新聞の調査をし、比較することで、
日韓問題の報道の差や特徴を考えた。

歴史的背景

1927年 京城放送局として民間により設立
1926年 社団法人として国家により設立
1961年 大韓放送局が放送権利を政府に愛護
1961年 放送法により特殊法人となる
1995年 訪問集金廃止
○予算○

<table>
<thead>
<tr>
<th>受信料</th>
<th>广告料</th>
<th>政府の補助金</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>38%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>61%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

KBS 1%

NHK 96%

1%

組織の経営に関して、

・経営委員会は12人、そのうちの5人は与党が推薦
・社長選出は経営委員会の2/3以上の同意が必要

KBSがNHKや他の国の国営の放送局の仕組みを見習った

組織の経営に関して、

目的

・経営委員会は12人、そのうちの5人は与党が推薦
・社長選出は経営委員会の2/3以上の同意が必要

KBSがNHKや他の国の国営の放送局の仕組みを見習った

目的

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関して、

目的

組織の経営に関

KBS newsにおける報道

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>日</th>
<th>水</th>
<th>木</th>
<th>金</th>
<th>水</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>20</td>
<td>21</td>
<td>22</td>
<td>23</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>26</td>
<td>27</td>
<td>28</td>
<td>29</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>32</td>
<td>33</td>
<td>34</td>
<td>35</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>37</td>
<td>38</td>
<td>39</td>
<td>40</td>
<td>41</td>
<td>42</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※下段数字はニュースにおける順番

13日～27日までの15日間にわたり報道された

KBSニュースの言論報道の特徴

5月13日の字幕をみてみると、「進撃の日本」などと視聴者の関心を惹きつけるような刺激的な字幕を使用

5月20日
アナウンサー「日本政府の妄言、一体どこが果てなのか分かりません。」
字幕「これが日本！」
一人(橋下)の発言がまるで日本全体を代表しているかのように報道

5月20日
デスク分析をしたが、時間的問題により、背景説明など細かい分析はなかなか難しかった

KBSニュースの言論報道の特徴

KBSニュースの言論報道の特徴
KBSニュースの言論報道の特徴

- 刺激的で、過剰な表現⇒刺激的な字幕使用
- 韓国について好意的な人がいるにも関わらず、一人（橋下）の発言がまるで日本全体を代表しているかのように報道
- 時間的問題により、背景説明など細かい分析はなかなか難しい
- このような報道により否定的な印象になってしまう傾向がある
- でも、過去より日本問題に関する報道の態度は客観的になりつつある

日韓の報道の差

言論機関⇒視聴者の関心を引き付ける
報道機関⇒視聴者の関心を惹き付ける

日数 ページ数
朝鮮日報 9 11
ハンギョレ 7 10
朝日新聞 1面:6日
2面:1日
4面:2
38面、39面、政治面、社会面:それ
読売新聞 4面:8日

- 118 -
共通点
TVよりも新聞のほうが思想に傾いた報道をする。
新聞会社によってページの数が異なる

差異点
日本・・・事実が多い
韓国・・・意見が多い

インタビュー調査結果
同徳女子大学
ホン・ウォンシク教授
報道機関に就職後
大学教授として大学で教えている

質問内容
1 KBSによる報道は繰り返し、刺激的な字幕や慰安婦の映像を流していますが、歴史観や価値観に影響を与えているか？
2 報道での橋下発言の報道は報道の機能をよく活用しているか？
3 これから報道の言葉が日本のことを報道するとき、正しい方法はなんだと思いますか？

ホン・ウォンシク教授からの回答のまとめ
韓国の橋下発言の問題点
・発言がまちがっていると報道しているが根拠ははっきりと報道していない
・一部が拡大されて報道されている
・韓国報道の特徴である言論報道がされている

報道はどうしたいのか
・一部をピックアップせず多様な面を扱うこと
・ジャーナリズムの基本である事実報道をすること

TV、新聞報道のまとめと考察
一つの事件の取り扱い方が、
国家間ではもちろん、国内でも大きく違う。
個人が情報を見極める能力を備えるとともに
新しい報道の方法を探る必要があるのではないか。

よい報道の実現のために、
日韓の不仲のシンボル
靖国神社の報道を話し合ってみました。
靖国神社とは？
・明治天皇により建てられる。
①日本のために死んだ人々を供養する
②日本のために死んだ人を英雄として後世に残す。

なぜ問題となるのか
靖国神社に参拝すること ⇒ 日本のために死んだ人の冥福を祈る
⇒ 戦前の日本を肯定する行為
⇒ 日本の帝国主義の被害を受けた中国・韓国は批判

靖国神社の印象は？
ネガティブなイメージ
怖い 悪いところ
しかし、靖国神社には何があるか分からない･･･
⇒ メディアで否定的な報道
◇ 三月一日に小泉総理大臣が参拝した
◇ 過激な報道、感情的な批判内容
◇ 政治家168人が靖国に参拝
⇒ 日本への嫌悪感を抱かせるような報道

訪問してみてどうだった？
・ 訪問中も始終怖かった。
・ 外国人も多く意外に観光地だった。
・ ほかの神社に行ったことがないから比較できずわからない。
・ 靖国に来る人はみんな右翼だと考えていたが、イメージが変わった。
訪問してみてどうだったか？

• 普通の神社と変わらなかった。
• 行く機会がなかっただけ。
• 外国人が多かったことに驚いた。

靖国神社を正しく報道するためにはどんな報道をすべきか？

• 日韓
  ー 歴史的事実について
  ー 若者の意見を伝える
  ー ディスカッション（discussion）
  ー ドキュメンタリー（documentary）
• 韓国（批判的報道が多い）
  ー ディスカッション番組での議題にする
  ー 他の神社に関する知識
• 日本（事実中心）
  ー 正直な論評、意見を入れた報道

日韓問題はどのような報道が良いのだろうか？

• 日本：事実中心の報道だから・・・
  ー 論評や意見を増やす
• 韓国：批判報道が多いから・・・
  ー 刺激的な言葉や表現、写真は減らす
• 日本も韓国も・・・
  ー 歴史的事実を増やす
  ー いろいろな見方ができる報道にする

ご清聴ありがとうございました。

聴き上げてありがとうございます。

参考文献

• NHK http://www.nhk.or.jp/
• KBS http://www.kbsworld.ne.jp/
• 朝日新聞
• 毎日新聞
• 読売新聞
• NAVERまとめ（韓国）
• Wikipedia
• 韓国学の研究（論文）
• 朝鮮近代史（論文）
2. 共生グループ

調査内容
両国
・日本人(韓国人)の韓国(日本)に対する認識に関するアンケートを実施
・在日韓国人の青年団体を組織する方にインタビュー

韓国
・日本文化院を訪問、副所長と文化研究員にインタビュー

問い
・韓国と日本の人々は、互いをどのように認識しているのだろうか。
・異文化を持つ人々と「共生」するとはどういうことだろう？様々な民族性を持った人々が問題を乗り越え「共生」していくには？
・異文化を理解することはどう共生に資するのか？

アンケート基礎情報
・実施期間
  日本：7月15日～21日（6日間）
  韓国：6月29日～19日（20日間）
・対象者：10代、20代の若者
・回答者数：日本側 92人、韓国側 107人

相手国に対してどのような印象を持っているか
相手国に関する情報をどこから得ているか

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>3%</td>
<td>2%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>10%</td>
<td>5%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>53%</td>
<td>52%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばいいえ</td>
<td>22%</td>
<td>21%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>12%</td>
<td>98%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

日韓関係に関心がありますか。

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>37%</td>
<td>63%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>40%</td>
<td>46%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>14%</td>
<td>12%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばいいえ</td>
<td>4%</td>
<td>18%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>4%</td>
<td>5%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

反対に、韓国（日本）は日本（韓国）に対してひどいことをしたと思いますか。

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>52%</td>
<td>12%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>29%</td>
<td>25%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>13%</td>
<td>46%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばいいえ</td>
<td>2%</td>
<td>88%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>3%</td>
<td>2%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

結果が示唆するもの

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>52%</td>
<td>12%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>29%</td>
<td>25%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>13%</td>
<td>46%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばいいえ</td>
<td>2%</td>
<td>88%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>3%</td>
<td>2%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

日本（韓国）は韓国（日本）に対してひどいことをしたと思いますか。

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>27%</td>
<td>11%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>38%</td>
<td>23%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>35%</td>
<td>65%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>8%</td>
<td>15%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

反対に、韓国（日本）は日本（韓国）に対してひどいことをしたと思いますか。

<table>
<thead>
<tr>
<th>内容</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はい</td>
<td>8%</td>
<td>13%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばはい</td>
<td>4%</td>
<td>12%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらでもない</td>
<td>16%</td>
<td>14%</td>
</tr>
<tr>
<td>どちらかといえばいいえ</td>
<td>11%</td>
<td>15%</td>
</tr>
<tr>
<td>いいえ</td>
<td>58%</td>
<td>89%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
具体的な例

韓国側
• 生活のパターンの違い
• 食べ物が違う
• エチケットの違い
• 文化に関して、同じ言葉でも違う意味をさすことがある
• 具体的な衝突はないが、日韓問題・政治問題になると（日本側）話題を変える

日本側
• 礼儀作法、マナーの違い
• 政治・歴史観の衝突
• 日韓問題を話題にすること

友人関係と相手国に対する印象の相関関係

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
<th>日本</th>
<th>韓国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>良い印象</td>
<td>16%</td>
<td>50%</td>
<td>11%</td>
<td>28%</td>
<td>28%</td>
<td>20%</td>
</tr>
<tr>
<td>良い印象</td>
<td>44%</td>
<td>43%</td>
<td>28%</td>
<td>28%</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>良い印象</td>
<td>24%</td>
<td>25%</td>
<td>16%</td>
<td>14%</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>良い印象</td>
<td>12%</td>
<td>14%</td>
<td>18%</td>
<td>23%</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>良くない印象</td>
<td>4%</td>
<td>25%</td>
<td>9%</td>
<td>56%</td>
<td>3%</td>
<td>66%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

結果が示唆するもの

両国において、「韓国人に実際にあってみて、自分達と変わらない普通の人だと思うから。」「親しい日本の友人がいるから。」など個人的な友関係と、相手国全体に対する印象そのものを良くしていることがわかった。

個人を知り友関係を結ぶことで、波及的効果がある

Interview, 19.07.13
在日コリアンとは

例1. 朝鮮学校

・ 朝鮮学校に通っているのは、在日コリアンの1、2割程度。
・ 各種学校である。

＊ 日本の学校・・・いじめ、差別
＊ 在日コリアンのネットワークの必要性
“在日コリアン”としてカテゴライズ
個人として付き合っていく

結果
・個性を生かして安心して過ごせる環境
・個を知ることで、人間としての共通性に気付く

→個人としての交流の機会が増える
→社会に浸透すれば、共生が実現する

例2. ヘイトスピーチ
民族差別の法は日本にはないため、容認されている。

この社会を生み出した理由
･･･多民族国家的意識の欠如（国、個人）

この状況を打開するには
メディアからの情報を受動的に解釈するだけでなく、自分で判断する力をつける
（バイアス、ステレオタイプ、決めつけるをなくす）

→個人の正しい認識

結論
・日本、韓国共に民族的同一性が高く、根拠のないマジョリティ意識を共有しやすい社会
→国内の民族的多様性に対して不歓容
また、あいまいなマジョリティ観は、対照にあるマイノリティの多様性にも純粋にさせる
・韓国、日本両国における相手国に対する世論が、国内に住む相手国出身者の立場を左右している
一方で、友人関係が相手国に対する良い印象を与え、気機となっていることが確認される
→個の異文化理解が、世論を動かす
＝異文化理解が、ローカルな共生の後押しとなる
3. 歴史グループ

### 日韓の歴史認識について

鄭根姬 金柾  張有鎮 姜智媛 權英芽
笠智道 加藤紗紀 小山奈月 佐藤文香

### 歴史認識とは？

### 人間的歴史認識

アンケート結果まとめ

- 身近な人間に韓国についてどのように思うか尋ねた

- 善悪がはっきりしているところ
- 愛国心が強いところ
- 目上の人を敬う
- 親しみやすい

50代
- 韓流ドラマがおもしろい
- ご飯がおいしい

40代
- 情が深い
- リベラルな政治体制(女性大統領)

20代
- 国民の勤勉性、誠実性
- 温泉・夜景や景色が多いところが多い

### 韓国的好きなところ

50代
- すべて相手のせいにする
- 反日感情がある

40代
- 愛国心があい

20代
- 美容決意が強い
- 日本人をよく思っていない

### 日本的好きなところ

50代
- 国民の勤勉性、誠実性
- 温泉・夜景や景色が多いところが多い

40代
- 日本人たちは優しい、きれいだ。
- 温泉好きな生活

20代
- 日本人はみんな礼儀正しいようだ。
- 強人気質。親しい文化がもっと深まって、支援も
  多い。アイデア商品の多様化

10代
- きれいな街
- さっぱり味の食べ物、環境

### 韓国の嫌いなところ

50代
- 歴史認識について被被害者意識の問題、重ねている
  - 日本人が悪い → 日本人が悪い

40代
- 反日感情が強い
- 日本人をよく思っていない

20代
- 愛国心が強い
日本の嫌いなところ

50代
- 形式的な親切さっぽい。
- 極右勢力がだんだん強くなっていく。

40代
- 本音と建前。
- 不安定な環境。

20代
- 極右勢力がだんだん強くなっていく。
- 歴史の歪曲が激しすぎる。

10代
- 建前過剰。
- 戦争問題。

旭日旗

侵略者
- よくわからない。
- まったくない。

旭日旗
- 日帝強占期。
- 日帝を象徴するもの。
- 旧日本軍旗。
- 帝国主義。

歴史の教科書に出ているもの
- 日帝を祀っている。
- 日帝を祀る神社。

たのマーク
- 知らない。

韓国からの靖国神社のイメージ

50代
- あまり悪感情はない。
- 第2次世界大戦のA級戦犯が合祀されている。

40代
- 戦犯を英雄視して旭日旗のように帝国主義の復活を国民に煽動するように見える。
- たまにはちょっと度を過ぎる。

20代
- 帝国主義的なイメージ。

10代
- 戦争を正当化するように見え。
- たぶんうちの仏教、キリスト教のような存在だと思う。

- 129 -
日本からの靖国神社のイメージ

50代
- 戦争を戦うところ、戦争死したすべての人
- 死んでくれたが戦争とは戦われたときではない
- 戦争で戦って死なかったすべての人を戦死した日本人として普通のことを

40代
- 戦争の理解が複雑で、政治家が参拝することで普通のことを
- 靖国神社は普通の神社

20代
- 政治家の参拝は望ましくない
- 政治家が参拝した場合、靖国神社は普通の神社

靖国神社訪問感想

- 丹念の遺志
- 奇抜な価値観
- 日常的な価値観
- 靖国神社

歷史認識の要因—高校教員—

韓国

- 歴史教育の問題より入試制度を問題である。
- 歴史認識は自分で成り立つもの
- 時代の転換、何を教えるかを教えるより歴史的教訓を得るよう指導するのが大事
- お互いを知るため、道徳的な態度を取ること
- 政治的な和解が必要

日本の自信のアイデオロギー

何故、歴史を学ぶのか、ということを念頭に置いて学ぶべき
- 歴史=自分は何者なのか、というアイデンティティの土台になるもの
- 歴史を学ぶことは、国際社会に出る為に必要となること
- 考える力を育むための教育を行うようにしている

日本の併合まで(1904～1910)

- 日清戦争から

歴史の教科書①
独立運動
韓国においてはとても重要な運動。だが…

日本
→ 日本史の教科書では僅か数行の記述。
武力を用いた統治(武断統治)から、文化統治へ

韓国
→ ページにわたる記述。
民族運動のきっかけ
文化的統治について
しかし、日本はひたすら統治を強化してわが民族の自由を奪い、文化を絶滅させた。

関東大震災(1923)
→

日本
社会不安が高まる中で暴動の流言を信じた民衆は自警団を作り、彼らが行い、多数の朝鮮人・中国人が殺害された(一部抜粋)

韓国
在日16000人あまりが惨殺される
朝鮮に強制移住させ、植民地政策に利用した
日本の川北新聞・下野新聞を引用(3ページ)

皇民化政策について
日本
→ 日本語教育の徹底・神社参拝の強制・姓氏改名などの極端な日本への同化を求める路線

→ せいぜい3つの政策しか紹介されない

韓国
愚民化教育、民族抹殺政策と呼称
ハングル使用の普及運動による抵抗
内鮮一体・日鮮同祖論などの歪められた歴史教育
1919年に3・1運動が起されると、日帝は韓国人の独立運動を抹殺させるため、資料的な「朝鮮史」を作った。

強制労働・従軍慰安婦
→

日本
慰安婦・強制労働については、「強制」という文言が入る
表現を工夫することで記載する教科書が多い
→ 日軍に連行され、『従軍慰安婦』にされる者もいた

韓国
強制連行と明記。邪悪な日帝。非人道的蛮行。心から死ぬものである。

歴史認識
教育…重要な影響がある
自分の国はどこを見ているか

韓国
日韓関係のこれからについて(インタビューより)

正しい歴史認識とは？
色んな資料・意見を見たり聞いたりすることで
作り上げていくべき

例えば…
幼い時から日韓キャンプなどを行い、お互いの立場を分かり合いながら
作り上げていくべき
今までの教育
→ 注入式・知識詰め込み型の教育

歴史を客観的に学び、お互いに立場を理解して受け入れ、相互共存することで関係はよくなるだろう
4. 教育グループ

Study History in Japan

☆幼稚園入学前☆
文字を読む／書く教育がまだ始まらない
勉強よりは遊び中心
☆幼稚園／保育園☆
この頃から遊びに基づいて文字や数字を少しずつ覚え始める
(絵本を読んだり、ブロックを使ってたり、通信教材を使ったり)
音楽／スポーツなどの習い事を始める

☆小学校☆
英語の授業は小5—6年生から
週／月1回程度ALTの先生がくる。
授業はゲーム中心の英会話程度
…英語をしたい子は英会教室に通いたいです
通信教育(ドリル形式)を始めて、小学校5年生になると塾に通
いだす(苦手分野の補充、中高一貫校の受験のため)
☆中学校☆
中高一貫校に入る子が多い?
授業にさえついて行けばよく、+αはあまりしない
高校受験のある子は塾に行く子も
受験のために英検／漢検を学校が推進する
部活が生活の中心

☆高校1—2年生☆
生活態度さえしっかりしていれば、高校は推奨で入れたりする
基本的には授業／授業の予習／復習のみで、テスト前に詰め込む
内申点(大学受験のときに大学に提出する成績)を気にして、テ
スト勉強をしたり、部活や、生徒会に入ったりする
☆高校3年生(受験期)☆
受験勉強のスタートは早くて2年秋～遅くて3年の夏
都心部:予備校などに通う子が多い
地方:学校のサポートのみに頼る場合もある
2次試験(応用問題)よりもセンター試験(単純知識の詰め込
み)に重視する
推薦で12月には大学が決まってしまって、あとで勉強しない子
も多い

☆大学☆
大学に入学したらたん勉強への意識が低下する...

TODAY’S OUTLINE

・ 日韓におけるスタディヒストリー
・ 英語教育
・ 受験勉強
・ 大学における学習意欲
・ まとめ
Study History in Korea

☆幼稚園入学前☆
母親から絵本の読み聞かせや歌を歌ってもらって韓国語を自然に習得
中には単語カードを母親に作ってもらう子も
☆幼稚園/保育園☆
道徳教育（あいさつ、礼節）を幼稚園で学ぶ
ハングルや計算を母親に教えてもらったり、公文に通ったりして学ぶ
絵本は自分で読むようになる…中には小学校入学前に1年くらい英語、数学、化学、韓国語を勉強する子も

☆小学校☆
学校の授業と宿題が中心
音楽／スポーツなどの習い事を始める
小学校4-5年生で塾／家庭教師／英会話教室を始める
夜の6時くらいまで
英語は週に2回くらい（ネイティブの先生もくる）
☆中学校☆
試験期間に勉強を詰め込む感じ
家庭学習があった
塾／家庭教師は引き続き続ける（6〜7時くらいまで）
高校受験のための勉強はあまりしない
部活やっている子は少ない
英語のクラスはレベル別
クラスに1〜2人頭のいい子は外国語高等学校の為に勉強する
（名門大学にはいりやすい高校）

日韓の違い
◎小学校での英語教育
…日本：ALTが月に1回くらい
韓国：週に2回
◎受験勉強
…日本：受験勉強スタートは2年の秋〜3年の夏
韓国：高校1年生から行う
◎大学の授業への意欲
…日本：単位を取ることにのみ
韓国：就職に重大に関係する

小学校における英語教育
<日本>
・小学校3年生から義務
※最近は幼稚園、小学校1年生から始めるところが増えている。
・週に3〜4回くらい
・英語のテープを聞いて、まねして繰り返す
・発音はネイティブの先生が教える
・アルファベットも学び始める
<韓国>
・まだスタートしない
英語力(GTEC)比較

英語教育における問題点

・日本では現在の英語能力を改善するために初等教育の改善などに取り組んでいる。
→◎英語の小学校の義務教育がスタートしたばかりで成果が見えていない。
◎教員の養成や、地方でのALT数が確保できない。
◎韓国では英語のみの教育が行われている。

英語教育における問題点

・日本では現在の英語能力を改善するために初等教育の改善などに取り組んでいる。
→◎英語の小学校の義務教育がスタートしたばかりで成果が見えていない。
◎教員の養成や、地方でのALT数が確保できない。
◎韓国では英語のみの教育が行われている。

英語教育における改善策

・英語教育の本格的な徹底は小学校低学年からとする。
...幼稚園からの徹底だと母語の妨げになり、また高学年からでは遅すぎる可能性がある。
・授業数を週3〜4回程度にふやす。
・年齢にあった教育を(小学校のうちはゲーム感覚で学ぶ方がいいのでは...(~ω~)?)。

受験勉強

<韓国>
・早は中学2年生～
(早い高校に進むため、大学にいくため)
・ほとんどの人は高校1年～
...どの大学に通ったかが就職に影響するため
・ほとんどの人が大学にいく。
・ソウル市内の大学なら私立／国立関係なくどこでも

<日本>
・早くて高校2年秋、遅くて
高校3年夏
・それまでは部活中心
...どの大学に通ったかが就職に影響するため
・ほとんどの人が大学にいく。

受験勉強に関する問題点

<韓国>
・部活などがなく、道徳教育・礼儀などを実生活で学ぶ場がない。
・親の干渉による強迫観念
・学費負担が重い
・家庭に落ち込んでいるため授業中に寝てしまう。
・入った大学によって将来が決まってしまう。

<日本>
・部活がないため、道徳教育・礼儀などを実生活で学ぶ場がない。
・親の干渉による強迫観念
・学費負担が重い
・授業中に寝てしまう。
・入った大学によって将来が決まってしまう。

受験勉強の方法

<韓国>
・学校では教科書中心。
・塾で受験対策を行う。
・学校の自習中に人気の先生のインターネット講義をみる。
・学校には22:00まで残り、その後に塾へ向かう。
(そのため終わるのは日を越えることが多い)
・塾に行かないのはクラスに1人いるかいないか

<日本>
・自主学習。
・塾／予備校に出る。
・学校でサポートが受けられる。
・学校には19:00くらいまで
・塾は遅く23:00には終わる。

入試対策のために教育の一発化
受験が一発勝負

- 136 -
解決策

(韓国側)
- 部活を活性化し、受験の内申点に、部活の成果を加味する
- 全国統一試験（韓国：修学能力試験、日本：センター試験）を年に数回行うようにし、その平均点をとる
- 生徒自身の意思を尊重する

大学生活の現状（学習面）

(韓国)
- 興味関心を中心に学習
- 受け身形式の授業
- 授業中に発言少
- 授業後先生へ質問
- 夏期休暇に語学講習
- 海外短期留学

(日本)
- 興味関心を中心に学習
- 受け身形式の授業
- 授業中に発言少
- 授業後も質問にほぼ行かない

大学生活の現状（生活面）

(韓国)
- サークルに入るのは1/2程度
- サークルをしていた方が、自己学習の余裕がある

(日本)
- サークルをしている人がほとんど
- 自主学習を行う時間が足りなくなる

就職に対する意識

(韓国)
- 高校1年生から
- 大学の成績が重視される
- 単位を取ることに集中

(日本)
- 大学3年生の夏休みから
- 公務員を目指す人は大学2年生後期から

問題解決方法

(韓国)
- 就職するまでの社会構造が教育システムを決定している
- 社会構造を変化させる必要がある

(日本)
- 一方的に教師の話を聞くだけの授業
- 教育プログラム/教師の質の向上
- 日韓交流セミナー、実験形式授業など
まとめ

・日本と韓国という近距離の国であっても、教育の点について多くの違いがみられた

・お互いの教育には、メリット、デメリットが存在する
  ex) 韓国では英語早期教育が母語習得の妨げになる可能性があることが問題になっている。
  日本では受験勉強を始めるのが高校3年生で韩国に比べると遅い

・そのことを加味した上で、よりよい教育作りを目指すべき
5. 文化グループ

韓国ドラマ

・ ほとんどのドラマで嫁姑問題が登場する

韓国のトークショー

シワールド（シワールド）

夫の家族の世界のこと。
シワールドの合成語
シ…夫の家族を指す言葉。
例）シオモニ シアポジ
・ワールド…world

嫁姑問題はなぜ起こる？？

① 儒教の影響で家族を大事にする
→ 母親が息子離れできない

息子に愛情を注いで執着。
いつまでも子供のように扱う

自立できない未熟な息子
嫁姑関係でもめごとが生まれる。
②儒教の考えが崩れている
昔…親の意見を尊重
最近…夫婦中心
自らやってほしかったやり方で
（家計・家事など）
女性が社会進出して自己主張するようになった
言うことが言いたいことは言う！
嫁には家にいて欲しい
働きたい！

嫁姑問題はなぜ起こる？

理由その①ドラマの放送形態
韓国
・16話～24話
・CMなし
・1時間
理由その②現代の嫁姑関係
犬猿の仲に変化の兆し？　

理由その②続き
犬猿の仲に変化の兆し？

嫁姑問題: 日本のドラマ
多くのドラマで扱われているというわけではない！

嫁と姑の間で苦労している
嫁には家で息子を
支えてほしい

嫁 ソンギョン 息子 カンスジン 姑 池田

理由その②現代の嫁姑関係
犬猿の仲に変化の兆し？
嫁の本音

•「(姑が)夫よりも自分の味方になってくれること多い」
•「思ったよりも気を遣わなくてもよくなった」
•「コミュニケーションをとる機会が増えた」

「ママボーイ」(마마보이)

何でも母親に相談する
母親の言うとおりに行動し、自分で決断しない

日本ドラマ：マザコン

•マザコン・・・母親にべったりな息子のこと
「母親離れしていない」「自己決断力に欠ける」

日本のマザコンの定義？

日本の新聞や雑誌によると...

-「母親と二人で行動することがある」
-「実家との連絡が密である」

韓国では「情がある」「親孝行」とされる行動も
日本ではマザコンと呼ばれることもある

まとめ

・韓国は嫁姑問題を取り扱うドラマが多く、
日本には少ない。

・マザコン・ママボーイ像の違い
どちらも嫁姑問題の原因になることがあるが、
日本のマザコンは、韓国ではママボーイではないことがある
草食系男子とは

- 恋愛に「縁がない」わけではないのに「積極的」ではない、「肉」欲に淡々とした男性のこと。

具体的には
①恋愛経験がなく交際に踏み切れない男性。
②モテるけれど恋愛に執着しない男性。

対義語は肉食系

日本人男性の草食化

不景気による未来不確実性
男性性の喪失
恋人に懸ける時間的・金銭的余裕がない

韓国ドラマに見る肉食系男子

韓国の肉食系男子が多い背景

- 「軍隊に行くと一人前の男になる」
  責任感が芽生える「国を守る」→「家族・恋人を守る」
- 草食系男子ではモテないから、肉食系男子になるために努力する。
  ⇒肉食系男子の増加

日韓キャスティングの違い

- 日本
  「縁の細い男性」
  かわいらしさと顔をしている男らしさとの意外性
- 韓国
  筋肉質の男性
  男らしい外見に備えられた優しさとの意外性
映画『箱入り息子の恋』

雨雫健太郎のプロフィール

35歳独身（彼女いない歴35年）
外見：白くて細身。印象が薄い。
性格：野心がな。人と付き合うのが苦手。
幾帳面。
趣味：格闘ゲーム、貯金

『箱入り息子の恋』検証

交際経験のない30代男性が・・・
• 恋人が欲しいと思わない理由:
  趣味に没頭（49.3%）、恋愛が怖い（19.7%）
• 異性と交際する上での不安:
  自信がない（44.7%）
(内閣府平成22年度結婚・家族形成に関する調査報告書より)

結論

• ドラマはその時代の現実と願望を反映するもの。
• 社会的背景によって求められる男性像が異なる。
• 親世代とは異なる、新しい男性像の創出。
  女性の地位向上と家父長制度によるターニングポイントである。
編集後記

日韓大学生国際交流セミナーも早いもので今回が第9回目、今年から参加した同徳女子大学校の学生にも多文化交流実習の単位が与えられた。日韓関係が良好とは言えない今日にあって、このセミナーが両国の間に友好の架け橋となってくれることを祈っている。
第9回日韓大学生国際交流セミナー